

平成25年度

調査研究助成事業報告書

- ◆ 新潟県立高田特別支援学校
- ◆ 千葉県立東金特別支援学校
- ◆ 愛知県立春日台養護学校

全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会

**上越地域の
知的障害特別支援学校P T Aによる
ネットワークの構築
～「やらんがnet」実現への取組を通じて～**

新潟県立高田特別支援学校P T A

研究主題
上越地域の知的障害特別支援学校PTAによるネットワークの構築
～「やらんかnet」実現への取組を通じて～

新潟県立高田特別支援学校

1 上越地域及び当校の概要

(1) 上越地域の概要

新潟県は大きく4つの地域に分かれています(上越・中越・下越・佐渡)。当校の所在は上越です。県庁所在地の新潟市は下越にあり、上越からは約120km離れています。

上越地域には、分校を含め知的障害特別支援学校が5校あります。しかし、PTA活動は学校ごとに実施されており、互いの活動を紹介したり各学校の問題を話し合ったりする等の連携はほとんど行われていません。そのため、活動内容の発展性や協力体制が未整備の状態です。

(2) 当校の概要

当校は小学部・中学部・高等部の3つの学部と寄宿舎が併設されている特別支援学校です。小学部の児童32名、中学部は39名、高等部は98名、合計169名が在籍しています。寄宿舎を79名の児童生徒が利用しています。近年、上越市内の公立小中学校から転学進学する児童生徒が多く、軽度な発達障害の児童生徒が全児童生徒の半数以上を占めています。

高等部卒業後の進路は、約30%が障害者雇用枠にて一般就労をしており、残りの70%は福祉事業所が就労先となっています。

また、近年児童生徒を対象とした傷害福祉サービスの充実により保護者間の情報交換や協力体制が弱まっている現状があります。そのため、PTA活動への参加人数も少なく、参加する保護者が固定化されてきています。

2 「やらんかnet」の趣旨と目的

(1) 趣旨

上越地域にある知的障害特別支援学校PTA間で、いろいろな情報の交換や共有を図り、障害があっても生まれ育った地域で、親子で幸せな生活を送るために、PTAでできることをしようと思いました。

そのために、上越地域の知的障害特別支援学校PTAが協力し、この地域で活動するためのネットワーク「やらんかnet」を発足させました。「やらんかnet」を通じて、各学校のPTAの情報交換の場や、各校の優れた教育や就労に向けて実践を学び合い、保護者と教師と地域の支援者を巻き込んで取り組んでいきたいと考えます。

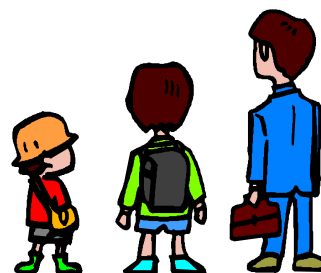
また、卒業生やその保護者とのネットワークを活用し、卒業後の長い人生についても考えたいと思います。卒業後の社会参加と自立をどのように果たしているのか、日常生活をどのように営んでいるのか、働くってどんなことなのかを学べる場としていきたいと考えます。

さらには、このネットワークを通じて、地域に様々な情報を発信していくことにより、支援が必要な子どもたちが地域にいることやその現状を知ってもらうことへと広げていきたいと考えています。

このようないろいろな想いのもと、「何かやらんかね～(注釈:やらんかねとは、上越地方の方言で一緒にやりましょうよという意味です)」と立ち上げたのが、この「やらんかnet」です。

(2) 目的

学校教育や卒業後の生活に関する、様々な**情報の交流と共有**
上越地域のいろいろな**関係機関の方々とのつながり**
各学校の優れた教育や就労に向けた**実践の学び合い**
卒業後の日常生活をどう営んでいくのか、**働くってことの学び合い**
様々な有益な**情報の発信**



3 「やらんかnet」の活動

(1) 参加校PTA 4校

- ・ 県立吉川高等特別支援学校PTA
- ・ 妙高市立にしき特別支援学校PTA
- ・ 糸魚川市立ひすいの里総合学校PTA
- ・ 県立高田特別支援学校PTA

(2) 1年間の活動計画

月	日	活動内容	備考
5	29	立ち上げの打合せ（高田特別支援学校）	
6	12	立ち上げの打合せ（高田特別支援学校）	
7	3	上越地域ネットワーク「やらんかnet」 発足の会 ・ 本事業の年間事業活動について ・ 次年度以降の活動の方向性について ・ その他	会場：高揚荘 参加者：参加校の管理職及びPTA役員他
8	5	研修会 研修 「ぶれジョブって、何をやるの?!（仮題）」 講師 石畑健一様（県立長岡聾学校教頭） 研修 「ぶれジョブに参加してみよう（仮題）」 講師 保護者の立場から ボランティアの立場から	会場：上越市福祉交流プラザ体育館 案内送付先： 参加校のPTA、上越地域の小・中学校特別支援学級、関係機関（教育行政、福祉、労働等）
9	4	定例会 ・ 夏季研修会の報告 ・ 視察研修について ・ 各学校の現場実習先の状況について ・ 情報交換	会場：上越市教育プラザ
10	19	ぶれジョブ先進地域への視察研修 ・ 視察先：ぶれジョブきた（新潟市北区） ぶれジョブながおか（長岡市） ぶれジョブ柏崎（柏崎市）	2つのコースに分かれて実施
11	13	定例会 ・ 視察研修の報告 ・ 上越地域で可能な「ぶれジョブ」の行い方 ・ 次年度の運営について ・ 情報交換	会場：上越市春日謙信交流館
1	28	定例会 ・ 今年度のまとめ ・ 情報交換 ・ 「ぶれジョブ」のお試し実施に向けて ・ 次年度に向けて	会場：上越市福祉交流プラザ
2		まとめの会（高田特別支援学校）	

会議・研修会等

会議：2回（発足、まとめ）

定例会：3回

研修会：2回

4 「やらんかnet」の実践

(1) 定例会の実施 第1回定例会

- | | |
|----------------|--------------|
| 1 日時：平成25年9月4日 | 2 場所：上越教育プラザ |
| 3 参加者人数：22名 | 4 内容 |

1 開会の挨拶

2 自己紹介

3 夏季研修会の報告 「やらんかnet」事務局

- ・長岡聾学校教頭の石畑健一先生と「ぷれジョブ長岡」の代表とぷれジョブサポーターの方を招き研修会を開きました。当日63名の参加者がありました。特別支援学級の担任やその保護者の参加が少なく、これがこれからの課題かと思っています。

【アンケートから】

「研修会の内容は興味関心のもてるものであったか」については、ほぼ分かりやすくイメージしやすい大変興味のもてる内容であった。とても好評をいただいた内容であったと思います。

「もう少し学習したいと思ったか」については次のような主な意見がありました。

他の団体の内容も聞いてみたい。

ぷれジョブと具体的な実際の就労の関係を聞いてみたい。

高等部卒業後の就職について具体的に聞きたかった。

ぷれジョブの実際を見ることも大事だと思う。

現場の視察や、卒業後地域で暮らすためのサポート体制などを今後も知りたい。

もっとサポーターさんの話や経営企業さんの話を聞いてみたい。

実際にいろんな企業での仕事を実践している様子を見てみたい。

事業者側からの声を聞きたい。

マイナスの点についての話も聞いてみたい。

上越地区でどういう流れで立ち上げていくのがいいかを考えられればいい。

このように、ぷれジョブの活動に興味を持っていただいて、上越地域でもぜひ行っていきたいという意見ではなかったかなと思っています。そのためには、現場を実際に見てみたいという声が多かったと事務局では考えています。

「やらんかnet」についての意見」

他の特別支援学校や特別支援学級への働きかけを増やしてもらいたい。

この取組が多くの人に知られていない。まずアピールをすること。それから連携のために「どんなことをどんなふうにしていくか」を分かりやすくしていく。

活動単位となると、中学校のPTAなどのネットワークを活用することが効果的である。

地域の人に分かってもらうために広報で活動内容を紹介したらどうか。

特別支援学級では各学校によって案内が届かないところがあったようだ。全ての学校に案内を送付したらどうだろうか。

特別支援学校だけでなく、各学校の特別支援学級の方にもネットワークを広げたらどうか。

保護者同士がつながっていくと良いと思う。小さな学校なのでこういった情報交換ができると、自分の子どもの将来のことについて見つめることができる。

「やらんかnet」の研修会はまだ知られていない。市の広報とかメディアとか学習会などを通して情報を発信していくことが大切である。ぜひ小中学校の特別支援学級でも参加させたい。

【アンケートの結果から 質問・意見】

- ・特別支援学級の方の参加が少ないのは仕方がないのかなと思っていました。しかし、アンケートの結果によると特別支援学級の関係者から「もっと情報がほしい」という意見が多くあったので、情報を発信することは時間をかけてやってもいいのかなと思います。ただ話された内容の「ぷれジョブ」という言葉が分からなかったし、初めて出会う人が上越ではほとんどなので「どのようなものなのか」というイメージがこの研修で何となく分かったようです。子どもがサポーターさんの支援を受けて1時間ないし30分企業で働く経験を積む。その経

験が増えていくことによって本人にとって将来的に役立つということです。

- ・新潟の協議会に参加しました。「立ち上がり」とか「形」が多種多様でこれというのがないんです。地域性が出ています。「上越もこうやっていけばいいんだな」と思いました。やっぱり前向きな方が集まっていたので、ものすごいエネルギーがありました。個人的にいろいろつながって「いいところ」をとっていけば上越（時間をかけて）も立ち上がるのではないかと感じました。

4 視察研修について

期日 10月19日 土曜日 場所 長岡方面、新潟市北区（旧豊栄市）

交通手段 中型観光バス2台（助成金から支出） 参加者（定員）各方面15名ずつ 合計30名

「内容、申し込み等」

子どもたちが働いている様子の見学

働いている企業の方からのお話

それぞれの地区のぷれジョブの代表の方からのお話

参加申し込み：期限を設けて定員になり次第締め切り集約します。

その他：案内に合わせて「やらんかnet通信」を送ろうと考えています。

【意見、質問など】

定員が限られているので特別支援学級に案内するという考えもあるのだけれども、まずは役員が人選してみるのが大事ではないか。それぞれの地区の核になる役員さんを選し、余裕があれば保護者の方が来てもらえばいいと思う。

上越地域の全小中学校に案内を送付して、参加希望が多くきて、定員オーバーになり断らなければならない状態になったらどんな印象がもたれるか心配になる。

まずはどういう組織を作るかという「ノウハウ」を見に行くのだから、まずはそこから始め、次に特別支援学級へと考えたらどうだろうか。案内の出す順番も考えて見たらどうか。この段階に特別支援学級に案内を出すのはどうかと思う。

ぷれジョブの今後の進め方にもかかわってくると思うのですが、

- 1)特別支援学校の方が主になってやってみて、その後特別支援学級を取り込んでいくという方法でいくのか
 - 2)あるいは中学校区でということなので、始めから支援学級の方もいっしょにやりながらいく方法なのか
- これらが関係するのではないか。

文章だけだったら分からないと思います。例えば小学校の校長会から中学校の校長会に「こういうことをして、こういう動きをしている」と話していかないと分からないと思います。

〔事務局から〕

特別支援の子どもが働いている現場なので、多くの人が見学に行くというのは無理であることが分かり、たくさんの方から「ぷれジョブ」の様子を見ていただけなくなりました。そこで30名の定員にすることを決めました。

ご意見にあるように「今後の方向性を出して、そこに特別支援学級の方を呼んで行うというのも一つの方法だと思います。まだどうしたらよいか分からないうちに特別支援学級の方を「入れるの入れないの」という話になっても困ると思います。ここで大まかな融通性のきく方向性を出したらどうでしょうか。「特別支援学校でこんなことをするんだけど」ということで、実験的に先駆的にやるので近くの特別支援学級で知り合いがいたらひっぱってくる方向で始めたらやりやすいのではないのでしょうか。

- ・特別支援学級に対しては1人か2人をピックアップしてその人を仲間にして試験的にやってみる形ではどうでしょうか。
- ・その意味でも「立ち上げる、ベースになる」それぞれの特別支援学校のみなさんがイメージをつかまないといけないうし、「そこに存在しているデメリットはないですか」というのがあるので、そのへんをいろいろな企業の方に聞いたりしてここで取り組んでいこうではないですか。前半はそれぞれの学校で取り組み、一步一步進むことを考えていきたいです。小中学校でやるのはもうちょっと後ではどうでしょうか。確かに校長会で話を出してはどうかという意見は出たけれど忙しいので時間を取ってもらえるかは難しいです。最後は巻き込むですけど、最初から巻き込まねばならないというとなかなか難しいです。

【決定事項】

視察見学の案内については特別支援学級にはださない。
 特別支援学校の役員の中で人選して視察見学に行く。
 定員に余裕があった場合は保護者の見学も可能である。
 見学箇所は長岡市と新潟市北区とする。

5 各学校における現場実習先の状況

学校名	状況
高田	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度、高等部 98 名が春と秋に実習しています。大変数が多くて6月は2年生と3年生だけで行い、10月は1年生と3先生が実習を行っていく状態です。 ・ここ数年一般就労が30%前後で、実習もその割合と同じぐらいの数です。ですから、福祉就労の場所はおよそ70%です。 ・一般就労の場合は2週間行い、福祉就労は1週間です。福祉事業所での希望が非常に多くて、本当は2週間じっくりと実習を行いたいのですが、なかなかできない状況です。
吉川	<ul style="list-style-type: none"> ・実習は春と秋の年2回実施しています。それぞれ2週間程度メインにやっているのですが、1年生は春も実習に出ていて1週間させてもらっています。後の学年は2週間行っています。 ・ほとんどは一般就労で行っています。 ・一人一人のニーズに応じて実習を行うようにしています。
にしき	<ul style="list-style-type: none"> ・6月と11月に現場実習を2年生と3年生で行っています。 ・現場実習のほか、職場体験学習があって1年生は2学期から毎週月曜日に課題を与えて行っています。 ・現場実習先については妙高市や上越市にある企業で行います。
ひすいの里	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度初めて卒業生を出しました。1名は一般就労、それから一般就労移行21名、後は福祉施設に3名、福祉事業所で3名就職しました。 ・現在1~3年生で21名いて10名が福祉事業所で残りの11名が一般事業所方で実習します。 ・期間は福祉事業所で1週間。一般事業所については2週間行う予定です。 ・一般就労している事業所はもちろん受け入れてもらいますが、市のスーパーや薬屋、学校福祉事務所、デイサービスセンターなど一般就労実習をさせていただいています。実習に対するバックアップをもらっています。 ・今年度は8名就労する予定です。

【親として思うこと 質問、応答】

- ・私の学校では、先生方が一般就労先を開拓していただくんですが、これから先の就労先の状況が予想できないのが率直な意見です。事業所はあるんですけど定員がいっぱいでその中に自分の息子が入っていけるのかと親として心配しています。
- ・卒業生のために、先生方も開拓されているとは思いますが、親としてこれからどうしていったらいいのかな。
- ・もし福祉施設に行くことができたとしても、今実際に定員がオーバーしているところがたくさんあります。それを分かって入ってきているのだから、「本当に見ているだけ」「そこにいてください」の状態で扱われるのではないかと心配です。
- ・一般企業が障害のことを、例えば、このくらいだとできるんだというふうに障害者に優しく変わってくれたらいいなと思っています。直接就労に結びつかなくても一般企業が少しずつ目を向けてくれるといいのかなと思います。

「質問1」

現場実習と就労って結構違うんですか。ここで雇ってくれる企業ってあるんですか。実習は実習としてとらえられているのですか。

そういう企業もたくさんありますね。でも、会社として良ければ雇うというところが多いですね。福祉事業所は毎年1つ2つぐらいできてきています。ここ4年ぐらいですね。新井の方で「こでまり」、「リトルライフ」、今年は「ポニーズ」ができました。来年はさくらの「サクラ工房」ができる予定です。毎年、いっぱいで行くところがないと言われるけれど毎年できてきています。定員より1.25倍入れられるということもあるし、曜日によって利用者が違う所へ行っている状況もあるので今のところはうまく動いていると思います。「定員より多いから、多くは期待しないでね」ということはないです。ただ先は不透明な部分も多いので市の自立支援協会や市行政がリーダーシップをとって設立にもっと力をいれていただければと思っています。上越市の方で一般事業所の理解が得られないというあたりをがんばろうと思うならば、事業主の研修会を開くことも必要かもしれません。また、「ぶれジョブ」等の実績を出していったって「少しでもいいから1日でもいいから経験させてください」という考えも一つあるかもしれません。ハローワークとも連携して事業主の人を集めるというのも一つの方法かもしれません。それも大事なかなと思います。

「質問2」

「ぶれジョブ」先と現場実習先とダブっているのかということも聞いてみたいです。就職したところが「ぶれジョブ」をやってくれると聞いたんですが、実習先も支援を受けるし、対応の仕方が分かっているから「ぶれジョブ」もいいよと言ってくれるといいと思うんですが。

ぶれジョブするときも全くゼロから探すのではなくて現場実習先からあたってみるという手もあると思います。

「質問3」

一般就労したお子さんのそれからのフォローってどんな感じなんでしょう。一般就労した後、どういうふうに定着しているのかを聞いてみたいと思っています。

卒業3年ぐらいはフォローしています。それからどんどん卒業生が増えるわけだから担任もいなくなって分らなくなります。後は旅費の問題もあるので県内では3年くらいなんですが、全部同じ所ではできないので地域の就労相談支援センターとつないでいかなければいけません。でも、相談しやすいのは学校の担任であるので、まずそこに相談して見るのもいいと思います。各地域に障害者就労生活支援センターがあります。いろいろな問題について相談に乗ってください。卒業して3年ぐらいは電話がかかってきて呼ばれることがあります。いろいろなつながりがあります。高校3年のケース会議の時に就労などが新加入してくるので、移行支援記録をしっかりと保護者が把握しておいて支援計画に明記しておくことも大事です。

「質問4」

「さくら」さんは一般就労に関して教えてくれるんですか。

一般就労した人だけです。福祉就労の場合は計画相談がこれからずっと入ってくるので何があってもすぐ相談できる体制になっています。継続して生涯にわたっているいろいろの支援を受けられる場があるということです。

「参加委員より」

- ・「かなやの里ワークス」は給料は多少なのですが、それは職員の評価による相対評価になっています。例えば5000円をもらおうとしたら、それを励みにして一生懸命にすればもらえるんだよということが分かります。それが分かれば本人はやる気を出して行きます。
- ・保護者が職場へ行ったら職場の方といろいろ対話をしていく中でやっていくことが一番いいことだと思っています。

- ・公的な支援を受ける時期がくればまたそういった方々の援助も借りなければならぬだろうし、それはご家庭にあったやり方があるのではないかという気がします。

「意見1」

各学校における現場実習先の状況をこの場で発表しなければいけないというのが、各学校の方はご存じだったのでしょうか。

各学校にはこういう話題を提供していただくようお願いをしてあります。

- ・状況は大事だと思うのですが、これだけの各学校のPTAの代表の方が来られているのですから、「うちの学校の保護者は何が心配なのだろうか」ということを要約して個々に持って来られてここでその意見を語られて、「この会の形態をどの方向に持っていくでしょうか」ということが、この「やらんかnet」にとって貴重なことではないかと思えます。ここに来ている方の意見だけでは広がりがないと思えます。各学校でいろんな状況を抱えていらっしゃると思うんです。各学校の保護者の方の考え方に違いがあるかもしれないし、地域性もあるかもしれない、そういう部分を各意見を吸い上げておいてこの場に持ってきて話し合いをするということが必要ではないかなと思えます。状況についてはほとんど毎年変わりがなく皆さん知っていただけることです。そんなことをこの場で話してどうなのだろうかという気がして仕方がないです。もう少し各学校の問題点や各学校の保護者の方の考えや意見などを集めておいて話し合った方が私はいいと思えます。

【会の持ち方に対する提案】

各学校の就労状況の説明は毎年ほぼ同じなのではないのでは
会に出席する人の意見だけでいいのか
各学校の保護者が抱えている考えや問題点を把握して、この会で持ち寄り
これらの意見を話題にして話し合ってはどうか

- ・今の意見を参考に、次回の定例会の進め方を工夫します。

6 情報交換

全知P鹿児島大会についての報告

- ・以前富山大会に出させていただいた時に、「PTAの活動から就労につながったという話」にすごく感動しました。PTAでもこんなことができるんだと思いました。私たちのPTAでも何かしたいなと考えたときに「就労につながる」ということが目標になったのです。
- ・私たちが何かできることはないかといういろいろなことを考えて始めたのが「お楽しみ会」です。
- ・全国の先進的な発表を見ることは刺激になりました。そこから、気持ちが盛り上がったのと、自分たちで何かしなければいけないという思い、支援（福祉は上越市で充実してきたのですが）まだ遅れている面があったので、自分たちで支援をやった方が早いというふうに考えて、「お楽しみ会」と称してPTA活動を始めたことを発表しました。この活動から防災講演へとどんどんつながっていったことの大切さをお話しました。また卒業後もつながりを持たせるために「やらんかnet」や卒業後の活動（卒業生及びその保護者が参加して）「ダンディライオン」を設立しました。その「ダンディライオン」は、卒業すると学校から離れ、親子のよりどころがなくなってしまうことの心配があったので親子で活動できるものとして作りました。そこからのつながりで「おやじ会」ができて楽しいお父さんの会があることを発表させてもらいました。
- ・「どうして学校がこんなに協力してくれるんですか」という質問が多く出されました。そのことについて「先生とよくお話をすれば大丈夫ですよ」と言いました。大きな問題を抱えれば抱えるほど先生達が対峙して協力してくれないとおっしゃっていました。「話し合うことがまず大事です。先生達は敵ではないし味方もいますよ」と言いました。「やっぱり大きな問題を抱えているところに限って切り捨てになっている状態が多く難しいな。」と言われました。
- ・「やりたいことをやっている」楽しい発表でした。「PTAで何ができて思うまでに時間がかかり、やるまでもきっかけが必要なんだな」というのを感じていましたので、「この発表が一つのきっかけになってくれればいいな」と思っています。
- ・北海道の発表が印象に残りました。「やらんかnet」や「ぶれジョブ」につながるようなことをやっていました。「小さい頃から就学相談のようなもの」を小学部からたくさん行っているとのことでした。その子たちが「どこにいきたいか」「どんな職種につきたいか」を相談しながら実習先を選んでいきます。それが就労につながる

状態であるということを知りました。それがなぜできるのかということ「自立支援協議会」が活発に動いているとのことです。その「子ども部会」は関係者 60 名ほどがいきなり集まるそうです。そういう所だから、将来何人卒業するというのが分かっているのです。その準備ができていますというお話が印象的でした。

【やらんか net の今後の活動内容】

定例会を定期的に設ける。

「ふれジョブ」の立ち上げの方向性を決める。

PTAが抱えている問題の解消に向けての取り組みの話し合いをする。

学習会の開催

仲間を増やす活動をする。

企業や労働機関の行政の人たちを取り込んで障害理解を進める活動をする。

就労の現状を確認及び話し合いを行う。

たよりの送付

情報発信及びアピール活動を行う。

- ・今日の定例会での意見を踏まえながら「やらんか net」の構成をを考えていきたいと思っています。

第2回定例会

1 日時：平成 25 年 11 月 13 日

2 場所：上越春日謙信交流館第 1 会議室

3 参加者人数：18 名

4 内容

1 開会の挨拶 高田特別支援学校長 松岡義男

2 視察研修の報告

(1) 長岡市・柏崎市

『ふれジョブ長岡』・・・視察場所 越後丘陵公園「花と緑の館」 視察時間 午前 8 時 50 分～10 時

「チャレンジド、ジョブサポーター」について

・チャレンジド : 高等部 2 年女子 1 名

・ジョブサポーター : 「ふれジョブ長岡」代表の品川さん

・レクチャー : 「ふれジョブ長岡」コーディネーターの長谷川さん

(2) 新潟市北区

『ふれジョブ北』

「視察場所」について

高木農場・・・チャレンジド : 高等部 2 年生の男子

自動車販売店(個人経営)・・・チャレンジド : 中学校特別支援学級 3 年生

スーパー青山・・・チャレンジド : 特別支援学校高等部 3 年男子

< 詳細については、P23 ページよりの報告書を参照ください。 >

3 上越地域で可能な「ふれジョブ」の行い方(「ふれジョブ」と関連させた PTA 活動の活性化も含めて)

「意見交換」

視察見学 より聞いたこと、感じたこと

・ふれジョブのメリットやデメリットについてまだよく分かっていませんが、子供たちにはふれジョブを体験する機会は作ってあげたいという気持ちはもっています。

・小学部や中学部の生徒がこういう経験をするのはとてもいいことだと思います。このことが就労や働くということにどんどんつながっていくし、地域の人を見る目も変わってくるのでいいことだと感じます。

・どこのふれジョブに行っても準備段階が大変であるという感想を持ちました。ふれジョブをやりたいと思って残る人であれば、ふれジョブをやっているのではないかとも思いました。

・ふれジョブ北ではチャレンジド 1 人に対してサポーターが 5~6 人で 1 ヶ月 1 回 1 時間サポートしているくらいがちょうどいいそうです。しかし、動く範囲が広いのでどこに行けるかが分からない状態だったということです。

ふれジョブを始める前に

ふれジョブをスタートするに当たって名称は?

- ・「ふれジョブ」のスタートの仕方名称が気になっています。ふれジョブという所に核を決めて入ってやっていくのだろうか。
- ・柏崎では「ふれジョブ育て隊」という名前にしておいて、1年後にふれジョブ柏崎に変わっています。あるいは新潟では「考える会」を発足して途中で変わっているので、このようなことからやりながら考えていってもよいと思います。いずれにしても「やらんかnet」という名称でいくのかどうか考えてみるのも必要です。
- ・次年度からはふれジョブを主として行いながら、やらんかnetの事業はそのまま継続して行う

ふれジョブのモデルを提示したら?

- ・商工会議所(柏崎市)でふれジョブを説明したときに、「言われていることがわからないから、モデルを示してほしい」と言われたそうです。モデルを作ってお話をするのもいいのかなとも思っています。
- ・ふれジョブのスタートは、一番やりやすそうな、しかも協力する企業がありそうな地域からモデルのふれジョブとして、まずやっていくのがよいのではないのでしょうか。
- ・その中で一番つながる相手(例えば、ふれジョブ北だと社会福祉協議会、柏崎では商工会議所女性部長)を上越でも見つける必要があると思います。教育委員会関係だと、キャリアスタートウィークで優良企業のリストをもっているはずなので見せてもらったらどうでしょうか。
- ・上越市で一律にどの地域でも同じようにやっていくということではないです。一番やりやすそうな地域でモデルとしてやっていくということですね。
- ・一番やりやすい地域の中に(中心になるのは特別支援学校であるとは思いますが)ひょっとしたら支援学級の保護者で理解してくれる人もあるかもしれません。上越市の場合、キャリアスタートウィークで必ず5日間就労体験をしているので理解があるとも思われます。
- ・ふれジョブをやるに当たって上越では、「何が必要で」「どういうことが問題で」なのかを詳しく調べたいです。また、あとは企業さんの理解とサポーターの数がどれだけ集まるかでしょうか。
- ・高田地区で高田特別支援学校の中でケースとしてやり始めてみるということと、それと同時にふれジョブ新潟連絡協議会にいいかを確認を取りたいと思います。

プレのふれジョブをするには?

- ・柏崎は23年2月からプレの「ふれジョブ」を行い、4月から正式にふれジョブを始めたそうです。
 - ・ふれジョブに入る前に「プレのふれジョブができるか」「一つのモデルとして上越市でやれるか」「受け入れ企業も同時に探す」など調査したいと思います。
 - ・コーディネーターとジョブサポーターをまず集めて学習会を開くことが必要だと思います。ジョブサポーターやチャレンジドのプレのふれジョブを始める前にやってみるということもいいかもしれません。まず大人が分からないと子供は動けないと思います。
- プレのふれジョブをどういうふうにするか
チャレンジドを集め、最初は15分くらいからやってみようか(子供の状況による)
大人が達成できてから子供を募集する
子供を一人決めてからサポーターを集める
などの方法が考えられます。
- ・企業にだけ頼るのではなくていつも自分たちが買い物をして顔見知りの店とか、自分の職場とか、そういうところから声をかけていくことが一番いいなと感じました。
 - ・近所にお店屋さんがあって、そこに子供がいて、そのときにサポーターさんが一緒に行ってもらっていただければいいのではないのでしょうか。あまりこういう条件とこういう条件が整わなくてはできないという問題ではない。

保護者に知ってもらうには?

- ・まだ予算があるので、糸魚川の方に行ってふれジョブの説明をするのもよいかと思っています。できる範囲で動けることはして、「こんなふうになるんだよ」ということを話したいと考えています。
- ・糸魚川で研修会をすることで、時間帯はいつ集まりやすいのでしょうか。
- ・「ひすいの里総合支援学校」と「白嶺分校」では全く保護者の意識が違うので「ふれジョブ」については分からない状態です。それなので、まず高田の方でモデルケースとして動いてもらってから、「こんなのがありますよ」とお話をさせていただく方がいいのではないかと思います。一律のスタートでなくてもいいのではないかと。

- ・広く一般市民に周知するのも大事だし、まだなかなか理解できていないPTAの方もいるので、学校のPTAの活動に来ていただいてお話をいただければ理解が深まるのではないかと思います。
- ・役員会で「ふれジョブの研修会」にいった話をしたのですが、なかなかみなさんが話に乗ってこない感じがしました。モデルケースでやってみてそれが形になればそれを見ながら妙高市の方で参考にしてやっていければと思います。最初からなかなか動けない感じがします。
- ・すぐにうまくいなくても「どれをどうしたらいいのか」という動きを探ってみるといろいろな問題が出てきます。その中で、自分が「やってみる」と考えると、具体的な問題点が出てくると思うんです。それを皆さんに発信することでみなさんの理解が深まっていくと思います。
- 「こんなことをこんなふうにしてこんなふうになりました」という話をもっていった方がいいですね。
- ・具体的に行くところまで準備しましょう。そうしたらみなさんにご相談やお示しができると思います。
- ・理解を広め周知を徹底するための話を糸魚川や妙高に行って話をするのも一つかなと考えます。

企業にどうPRしようか?

- ・ライオンズクラブの定例会のときにふれジョブについて説明にいった話してもらいたいのではないかな。
- ・「ふれジョブ北」では社会福祉協議会から助成金をもらってパンフレットやDVDを作っています。DVDには「ふれジョブ」を紹介したものがああります。
- ・「ふれジョブ佐渡」からDVDをいただいているのでPRの時に使わせてもらえらると思います。

特別支援学級への対応は?

- ・柏崎や長岡の視察見学に行きました。そこではチャレンジが特別支援学校の子供たちでなくて、小中学校の特別支援学級のお子さんが来ているという傾向があります。学習会の中に小中学校の担任の先生にも声をかけている。上越地区で今の段階で、特別支援学級に声をかけるというのは厳しいのかなという気もします。
- ・特別支援学校と特別支援学級では学習に対する意識が全然違うと思うんです。まず特別支援学校から始めていくのがいいのかなと思います。こちらで形を作って、それで広がっていったら、その方法を特別支援学級の先生や保護者にお知らせすればいいと思います。
- ・小中学校ではふれジョブについてはやっぱり「わからない」と思うので実績を作ってから紹介する方がいいと思います。
- ・ここで話し合われたことを特別支援学級の方にも情報として発信してもいいと個人的には思います。

その他

- ・「ふれジョブを立ち上げたらどうなるのだろうか」「企業の理解を得るにはどうしたらいいのか」などについて協議会をもったらどうかとも思います。
- ・「ふれジョブ」の形とは似ていてねらいや行っていることは違うのだけれども、土日も就労体験の延長のようなことをやっている子供がいるので、私たちからすればどこが違うのと感じてとらえられます。吉川の場合だと吉川区の子供は一人しかいなくてそれでも吉川高等特別支援学校となってしまう。そうすると地域限定にするとなかなかないのが現状です。
- ・「モデルケースはどうですか」ということで毎回集まっていたのはなんなので「各部門で集まってたたき台を作ってみて話し合う」のはどうでしょうか。

ふれジョブを始めるにあたって

- ・組織として「ふれジョブのプレ」が現状としてできるかどうか
- ・プレのふれジョブとしてスタートする方法
- ・「考える会」「育て隊」の組織を立て、時間をかけてスタートをする方法

4 情報交換

(1) 関知P連・県知P連について

- ・学校の教室の数が不足し、設備がどの学校も足りないという感想をもちました。やはり現状はそうなんだと思うとともにPTAでまとまっているんな要求をしていかなければいけないんだなとつくづく感じて来ました。
- ・この会合は来年度、新潟県に来ます。新潟市に来ます。担当者の話し合いの中で前夜祭もやりたいという提案がでました。1日の大会で会議だけを行っているとう肝心な情報交換ができなくなります。それぞれの学校や地域の様子を話し合うことはとても大事だなと思います。

- ・新潟市で行う「関知P連」にはできたら特別支援学級にも案内を出したいと構想を練っているところです。遠い所ですが県内なのでぜひ参加されているような情報交換をしていただきたいと思っています。
- ・「県知P連」で話が出た内容は
 県立はどこも人的に立ちいかない。
 高等部の1学級8人定員の問題がでた。新潟県は「設備充足すること」「学校新設」の方が先行していて、なかなか8人定員はできない状態である。
 今年は市立が3校でき、来年もできて増える。
 これらのことが話題にのぼりました。
- 「質問」
- ・関知P連はいつ来るんですか。
 まだ決まってはいいのですが、今年の様子から10月の上・中旬ではないかと思います。
- ・1教室に対する生徒の人数の規準はないんですね。
 規準はないけれど、市立は8人でやっています。新潟も長岡も柏崎も妙高もみんな8人学級でやっているんです。やっていないのは県立だけです。
- ・特別支援学校には教室の広さの規準はないんですか
 教室の広さの規準はないんです。小学校中学は決まっているのですが支援学校の標準はないんです。特別支援学級も間切り間切りでやっているのでもせまい教室でやっているんです。

第3回定例会

- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1 日時：平成26年1月28日（火） | 2 場所：上越市福祉交流プラザ第6会議室 |
| 3 参加人数：23名 | 4 内容 |

開会の挨拶 高田特別支援学校長

- ・ふれジョブという名前を使うとかなり制約があるので、少しやれるところからやっていけばよいのではないかと。
- ・「ふれジョブ」と「やらんかnet」はすこし切り離す。
- ・やらんかnetは地域のPTAの連携（情報交換の場）であるととらえている。
- ・予算については社会福祉協議会等から出してもらおう方向で検討している。

1 今年度のまとめ

「事務局より」

P5～8（報告案）

どうしてやらんかnetが立ち上がったのかという経緯、概要をまとめたいと考えています。

この事業の趣旨と目的をまとめます。これは発足の会や第1回目の定例会の時に示した内容がここに記載されています。

年間事業活動には参加校のPTAと事業の活動計画を載せます。

定例会3回と研修会2回を皆様のご協力で行うことができました。

参加人数...	7月3日	発足の会	18名	
	8月3日	夏季研修会	63名	
	9月4日	定例会1	22名	
	10月19日	ふれジョブ視察研修	21名	（ふれジョブ北13名、長岡・柏崎8名）
	12月13日	定例会2	18名	
		夏季研修の報告、上越地域で可能なふれジョブの行い方の確認		
	1月28日	定例会3	20名	年度のまとめ、情報交換
	2月	まとめの会...	行わない	

定例会と研修会の実施については、議事録の中から重要なポイント、資料、写真を掲載しながらまとめていく。定例会については参加人数、定例会の内容、主な意見、次の定例会や研修会などの事業へどう生かしていったかという視点でまとめていきたいと思っています。

研修会の実施については、内容、参加者の感想で、「この事業にどう生かしたか」といった視点でまとめていく。5番のまとめの所では、今日の情報交換から出された意見を中心に成果と課題を報告書にまとめていく。

会計報告

- ・旅費交通費は、視察研修会のバス代がかかったので、予算よりオーバーしています。委員の皆様には、些少ですが、発足の会、定例会の4回分を、学校から会場までの往復、1km×22円で計算し、支出させていただきました。

質疑・意見

- ・今までやってきたことをまとめ、印刷・製本をして100部くらい作って各学校に配布したらどうだろうか。そうすればお金を使い切ることができると思う。約11万円くらいにはなると思う。これから労力をかけてうまくまとめようとしなくて「今までやったこと」を出せばいいと思う。(松岡校長)
- ・各4校の一般PTAの方に「今までの活動」をどのように話していくかということが大事です。「今までの活動状況」をコピーして示さなければいけないと思います。そうすればある程度活動の様子を知ってもらうことができます。その資料を使って「こういう活動をやっているのですが、みなさんやってみませんか」というお誘いもできると思います。だから、写真を入れながら冊子を作るという方向でどうでしょうか。(大野さん)
- ・ぷれジョブの「のぼり」「腕章」などを作ったらどうでしょうか。
- ・各学校に行って「やらんか net」について説明するということができませんでした。ですから成果をまとめた資料を各学校に配布していただきたいと思っています。それを使って来年度は説明に回りたいと思っています。
- ・たしかにここで話し合われたことなどを各学校の一般会員の方にどう説明していいかわからないという意見が出ていました。それを作っていたら来年度のことを考えるといいなと思います。
- ・ぷれジョブについてもまだ正直言って固まっています。具体的に「お試し」で行うことになったらその予算で買った方がいいのではないのでしょうか。
- ・一般の方々への啓発活動に使えるような成果をまとめた資料やパンフレットを作ってみたらどうか。

2 情報交換 ~今年度の活動を振り返り~

- ・地域のPTAで視察や研修会をしたということが大きいと思います。各学校の役員が、年間を通して出席して顔見知りになったりネットワークがつながったりしたというのが一番大きいのかなと感じます。「やらんか net」の本当の意味の「上越地域の同じ目的を持つ親同士がしっかり手をつないで、できるところからやっっていこう」という情報交換、情報共有をしてやっっていこうというところから始まったので、その意味で達成できたのかなと思います。
- ・ともすれば学校で集まってしまうPTA活動が、広がっていく上で、学校がやっていくことがあるのだなということがわかりました。それなので、これからみんなで作ってきたことをどう広げていくのか、ぷれジョブに代わるものをどう立ち上げていくのか。これを今度は試行したものを自分の学校でできるのかというふうに広がっていくのかなと思います。
- ・研修会を行うにしても、自分の学校の先輩がやったのだけれども、今度はこの中で講師もやりくりできるのかなと思います。そういう意味でも研修の機会が広がって行って、頼める人も広がって行って、ネットワークが広まっていったのかなと思いました。皆さんの活動に参加させてもらって親御さんの気持ちというのはどの学校でも変わらないのだなということがわかりました。
- ・自分の学校だけでいろいろ悩んでいたのですが、この会に参加していろいろな方々がいて、いろいろな考え方を教えてもらいました。私自身勉強できたと思っています。私の子供は卒業なので、次の役員さんにもこういう場に参加してもらい、うちの学校にも広げて行ってほしいと思います。
- ・亡くなったお子さんがいました。親御さんの喪失感はずごかったです。そのときに、生きているうちにつながりをもつ努力をすることは大事だと身にしみて感じました。子供を入れた目に見えるお祭り騒ぎのようなものがあってもいいのかなと思いました。それで一人一人の表情も見られるし、親御さんの子供を見つめる姿、他の親御さんの姿を見ることのできる場面もあってもいいのではないかと感じています。
- ・連合PTAの横のつながりが「やらんか net」の中で、私自身意識した部分であり、大事だなと思ってます。この会に入ってみると、「上越地域の実態、学校によっては実態差があるんだな」と感じました。卒業後のケアは学校だけではできません。地域の中での関わりが当然必要です。
- ・小さい学校なので役員は交代制で順番が私に回ってきました。ということで、最低限のことをすればいいと考えた役員です。しかし、ここに来たら「すごく一生懸命やっているんだろう」「なぜ楽しんでいるんだろう」ということが驚きでした。自分ができるかといったら全然自信がないですが、またいろいろ教えてもらいたいなと思っています。
- ・うちの学校は人数が少ないこともあって、どうしてもPTAの活動が小さくまとまりがちです。しかし、こうやって他の学校の方々も活動させてもらって、またいろいろな経験が生きて大騒ぎもいいのではないかなとは思

いますが、なかなか一般会員の方に話をしても伝わらないところとか、乗ってきてもらえないところがありました。それなので今後もう少し他の保護者の方にも興味を持ってもらえるようになるといいのかなと感じています。今年立ち上がったばかりのことで、役員が参加し勉強しているところなので、勉強したことが伝えられるようになればいいのかなと思っています。

- ・今のところ PTA 会員が 37 名です。この会に出させてもらって、一番刺激を受けたのは山川さんの人柄です。PTA ってこういうふうにはひっぱていかなければいけないのかと感じました。おそらく和田さんが PTA 会長になると推察され、来年度は「にしき」の PTA を引っ張っていてくれると思っています。やらんか net については文書を配布し PTA 全体会で折に触れ「やらんか net」でこのようなことをしていますと会員に伝えていきます。しかし、残念ながらこの会に出席するのが同じメンバーということで、来年度以降、他の会員にも強力に呼びかけ参加できるようにしていければと思っています。にしきでも他の学校や施設に視察研修に行っているが、この会に参加したことで「ぶれジョブ」に関する視察研修にできることができたことが大きかったなと思っています。にしきの PTA では思いつかないところで研修会に参加できてよかったと思います。
- ・ひすいの里の PTA 会員は 18 名です。その中で 2 年間 PTA 会長をさせてもらいました。一昨年度まで高田特別支援学校の分校であったこともあって、高田の本校の方といろいろと交流させてもらっています。その経緯もありこの会に参加させてもらいました。横のネットワークということは非常にいいことになると思って参加しました。趣旨としては地域の中で顔見知りになれる、つながりが持てるということが第一にあったので、その意味では参加できたことが一番大きかったと思います。ただやっぱりこの一年、昨年の夏以降この会に参加してみても糸魚川って遠いなということを感じました。来年度以降になります。PTA の役員も改選になってきます。その中でこの会とどのようにつながりを持っていければいいのかなということが一つの課題として考えているところです。しかし、今後何らかの形でつながりを持てる方向でいければいいなとは私自身は思っています。上越市との距離的な感じ方、規模などもあるので来年度以降どうするかをこれから考えていきたいと思っています。
- ・「このままじゃいけない」という思いが消えなくてその思いだけで動いてきたのですが、動けば賛同者がいます。周りでそう思っている人が多いのかな。そういうことをいろんな活動を通して実感しています。何かしなければという思いがどのお母さんもどの保護者も毎年毎年同じように悩んでいます。障害の子供が生まれたからどうしよう。病気がわかったからどうしよう。保育園をどうしよう。学校をどうしよう。中学校・高校どうしよう。将来どうしよう。という悩みがどこへ行っても消えない。その悩みを一つ消すわけではないですが、保護者間の情報処理の中で、一つでも「こういうことがあったよ」という言葉が伝わればいいなという思いは子供が生まれてから私が持っていた悩みでもあるし、今でもその思いは消えませんが、その中で、ここにいろんな立場の方が集まって情報交換ができたことは大きな成果だなと思っています。
- ・楽しいことをしたいという思いは変わりません。来年度どうするかという話を別にしても個人的につながりがありますので何らかの形で今後もつながりを持てるという思いをもち、課題は課題として皆さんとご協議しながら取り組んでいきたいと思っています。
- ・中学校から転校してきて、2 年目で副会長をやらせていただいて、やらしていただいたタイミングが「やらんか net」であって、ぶれジョブ自体の存在を知っており、前から他県が行っていることは分かっていました。「すごいな。新潟市はやっているな。でも上越はやっていないな。こっちまでこないんだな」と思って見ていました。ところが会長さんを初めとしてうちの学校で「やらんか net」として活動している中に、自分が存在して微力ながらいっしょに活動できたこの一年間は自分にとってプラスになりました。長岡に行って研修をしたり、実際にその働いている（活動している）現場を見たり、よその学校の方々の意見を聞いたりして、同じ障害のある子供を抱えている学校なんだけれど、それぞれのカラーがあり課題があり、いろんなことが分かって勉強になりました。今やっているこの活動が現実に行っているといえるような、本当に行動で来年度は活動でしっかりやれていければいいなと思っています。
- ・私も特別支援学校 2 年目です。何でこんなに楽しんだらうという気持ちです。最初は入ってみたいと分らないけれど入って動いてみるとこんなに楽しんだなと思いました。楽しいから自分にもいろいろ身につくものがあります。やらんか net は PTA の活動なので若干弱くなるのかなと思います。やはりやらんか net を経由して作業していったという、生活支援という面も残しつつ、同窓会的なふんわりした集まりができればいいと感じています。年に 1 回集まる会があればいいと思いました。
- ・私の子供は小学部 4 年生ですが、春先に幹事を引き受けたときにまだ小学部だし、今役員をやってやめればいいわと思っていました。「やらんか net」の立ち上げがあり、それをやっているうちに、「今までは、まだ小学生のうちは就職など考えるのは早い」と思っていました。この会を通して「早いということはないな」と感じました。この会に参加し勉強させていただきました。その中にはたくさんの情報がありました。これが他の保護者にも伝わればいいなと思ったのが正直なところです。後 2 年間小学部に在籍するので他のお母さん方にも

情報を流しもっと興味を持ってもらえるようにしたいと思っています。

- ・私もこの会に参加させていただいてとても勉強になりました。子供たちのためにこんなに一生懸命話し合いをしているということを見聞きし、こういった会に参加させてもらってありがたいなと思って出席させていただきました。このような会を行っていることを他の保護者の方にももっと知ってもらいたいなと思っています。
- ・役員をやらせてもらい、やらんかnetの活動をみなさんとやってきました。いろんなところに行って活動を見させていただき、いい経験をさせてもらいました。参加して始めて感動することが多いので他のいろいろな人に知ってもらって実際に体験してほしいと思いました。それを体験することですごいなと感じるのでたくさんの人に見てもらいたいと思います。「これだけの活動をやっているんだ。すごい楽しい活動をやっているんだ。」などのことをもっと広められたらいいなと思っています。
- ・いろんな経験ができました。それを子供にどう生かしていけるのかということを考えているところです。
- ・連合的というか、一つの(自分の)ところだけでとどまっていなくて、いろんな人の意見(保護者や先生の意見)、いろんなタイプの人の意見を聞くことによって、自分は一人でないという気持ちで心強くもなりました。いざとなったら誰かに相談しようかなということができるようになります。いろんな情報を聞いて得ることはいいなとあらためて思いました。
- ・私は卒業したお母さんたちと年1回集まる会に出席しています。「卒業した後の困ったこと」「こうなった」さんはどうしている」などの実態を聞くことができてすごく助かった面がありました。(卒業が)2~5年上の人からお話を聞くことによってものすごく助かっています。
- ・最近の中学部や高等部ぐらいの子供のお母さんからの話で「今、こうなんだよ」という話。つい最近、小学部のお母さんから実際に聞くことができるなどすごくプラスになりました。世の中、このような流れになっているんだなと実感しています。それなのでいろいろな人と会いいろんな話を聞くことがいいのではないかと思っています。ただ同じ顔ぶれでなくていろいろな人に参加してもらいたいなと感じます。だからどうやったらいろいろな人を担ぎ出すかということが今後の課題かなと思っています。

事務局として

- ・次年度は、この上に「どんな仕掛けが出来るのかな」ということを皆さんのお話を聞きながら考えていました。その仕掛けを考えられるような集まりになるのがいいのかなと思いました。いろんな仕掛けを持っていらっしゃる方々がたくさんいるのでそれを出し合ってもらおうという形。それで自分の所でもやろうかというふうな雰囲気になるといいなと考えながら聞いていました。会の持ち方が次年度の方向性になっていき、(今日の会が)また話が深まっていくようになるといいなと思っています。そこで終わって次年度につながるととてもいいなというふうに感じていました。

3 「ぷれジョブ」のお試し実施に向けて

「事務局から」

- ・次年度は「ぷれジョブ」と「やらんかnet」の活動を分けてやっていこうと考えています。
- ・今年1年、「ぷれジョブ」「就労体験」といってところに焦点を当ててやってきました。これをどうこの地域でやっていくか、それに向けて具体的な動きをどうしていくのかというあたりをご意見いただいたり構成づけたりしていきたいなと思っています。
- ・先回の議事録を見ると、「まずは高田でやってみてほしい」「こういうものなんだ。じゃ、うちも」というような運びになっていたと思うんですが、その後、高田の方では進展が見えたのかなと思うんですがその辺りを山川さんから話していただきます。
- ・「モデルケース」をだそうというところで企業も当たってみたいと思います。やる気はあるんですが、「雪」と「年度末」ということであまり動いていませんでした。ただうちの理事の田中さんの方が勤め先の方といいお話ができたということで話していただきます。
- ・自分が勤めている上司がたまたまそういった対外的な活動の窓口になっています。そこでは受け入れることに関しては全く問題はないそうです。それを行うことが雇用とつなげられると困るということでした。細かい打ち合わせをしてほしいということでした。会社の方では従業員がお子さんに気を取られるようなことはしめさんと説明しました。そのときに行う仕事もきちんと考えてくれるということでした。腕章、エプロン、入り口にポスターのようなものを貼ってもいいとのことでした。1週間に一人。あるいは土曜日と日曜日で一人ずつ。それぐらいは可能かなというお話をいただきました。いつから始めるかなどが決まれば連絡くださいとのことでした。
- ・やはりぷれジョブと職場体験とは違うことがあります。しかし最初はぷれジョブは職場体験のような感じで捉えられていました。ぷれジョブはちょっと違った側面があって、障害の重い、はっきり言って体を動かして実際

に仕事をする事ができないようなお子さんも参加する活動ですということもお話ししました。そういったことであれば、配慮して行えるようにするとおっしゃってくれました。職場的にはそういった方が使っていただける休憩室のようなものがあります。

田中さんからの情報	
ぶれジョブの受け入れてくれる企業があり	雇用にはつながらないことを承知しておくこと
1週間に1人あるいは土曜日、日曜日で1人ずつ	職場体験とは違うことだということを説明
いろいろな障害種のある者が参加すること	それに配慮した活動を用意すること

・本当は地域で、高田であれば南本町の商店街をあたるということも考えたのですが…。地域にはぶれジョブの成功事例をもって「こういうことをするんですよ」ということを一律に話した方がわかりやすいのかなと思っています。商工会議所の代表に会ったときも、海のものか山のものかも分からないから実例を持ってこいといわれました。

・状況は整っているのですが、本当は名前をぶれジョブを使わないとなれば、「やらんかジョブ」「やらんかね」というので、それを決めなくてはいいないんだけれども。まずは数人から始めて、それでうまくつながったら少し増やしていく形にしたらいと思えます。そのために一番大事なことはサポーターの共通理解を図ること。そこがなんにもないとならば変わらない。今度そういったルールも作らなければいけません。1週間ずつ交代するのがあるんな方法があります。その最低限のサポーターの「こういうことをします」というマニュアルも作らなければいけませんね。

・やってみて、例えば「にしき：の子供で送ってくれば、ジャスコでやるということもできるかもしれません。ジャスコさんは福祉的なことをやっているところだから、大きな企業だからノウハウとしてあると思えます。そこは社会貢献をしているところです。「のぼり」「腕章」「エプロン」「ポスター」「事務室も使っていいよ」など。条件的には働きやすいところですね。ここを拠点に始めて見ましょう。

「モデルケース」を行う上で..大野さんの意見		
名前を決めたら	最初は数人で始めたら	サポーターの共通理解を
サポーターを行う上でのルールを作っては		マニュアルの作成を

「事務局から」

・「ぶれジョブにいがた」の柴田会長さんに、ぶれジョブという言葉が「こういう取組なのですが使ってもいいか」と聞いたところ、ゆくゆくは「ぶれジョブ」につなげるのであればいいですよとされています。「ぶれジョブ」は使ってもいいかなと思います。

(質) 報告するというのはいないんですか。

こういうのをやっているよという報告はした方がいいと思います。

・具体的にとりあえず高田で出してみます。やっていることは今年度終わったとしても皆さんに情報として提供したいと思っています。

・糸魚川だって、1時間だからちょっとリクレーションかたがた来て、1時間くらい遊んで帰るといってもできるのだから。

・もしよければ、活動の様子をビデオを撮り糸魚川に持って行って「こういうのをやっていますよ」というPRbの材料を作ることも必要かもしれません。

・やらなければいけないことではないんですが、上越でこういうことをやっていて、(にしきの丸山さんが私に聞いた言葉によると)「定例会、月1回でしょう。それくらいだったらでるよ。」と聞いたので、(個人的に)卒業するけど、そういうところにつながることもおもしろいかなって感じがします。

・保護者がサポーター役ということですね。

4 次年度に向けて

「事務局からの提案」

意義、目的

- ・お互いのPTA活動でやって良かったこととか、逆にこんなことで悩んでいるよということが、この場で各学校から話題提供できるという会にしていきたいと思っています。
- ・ここで話し合ったこと、あるいはいい情報をもたらしたり勉強したりしたことが各学校のPTA活動に反映させていってそれぞれの活動が潤うようにしていきたいと考えています。
- ・「おたくのPTA活動を手伝うよ」「いっしょにやろうよ」といったような雰囲気や気持ちを作り上げていきたいと考えています。
- ・連合でつながりを深めていきます。
- ・それに伴って各学校のPTA活動が活性化させていきます。

具体的な内容

- ・合同でPTA活動を考えていきましょう。
(例1) 当校で2月に餅つき大会をしますが、早速案内を「吉川」「ひすいの里」にいたしました。このような活動を個々で考えて発想しようかなという考えでもいいかなと思っています。
(例2) 親御さんたちの勉強会。
(例3) 卒業後のことが心配という声もたくさん聞かれているので卒業に向けて事業所に行っていない暇な時間をどうしようかなどを考える内容なども有効かなと思っています。
(例4) サービス利用の現状、放課後クラブの現状、ぷれジョブのプレの活動報告など、

運営組織

- ・今の4校。若しくは白嶺分校が整えば参加してもらい、これらの学校あたりを中心に運営していきたいと考えております。今日のような定期的な定例会を活動の中心にしていってらどうかと思っています。
例1「講演会をするんだけど、どなたか来てもらえませんか」というような組織に次年度はステップアップしていきたいなと思っています。

諸経費

- ・前回提案させていただいた「県民助け合い基金助成事業」の活用、参加者からの実費徴収あたりが正直なところかなと思っています。

その他

- ・参加するメンバーを徐々に広げていくというのも一つの手かなともっています。
- ・「ぷれジョブ」と「やらんかnet」を切り離して行います。
- ・大まかな概要としてはこのようなことを考えています。

質問1

切り離していくと言うことは、高田だけでやっていくということですか。

やらんかnetの中で、ここで毎回「ぷれジョブ」という形ではなくて、この会はあくまでもPTAのこと、ネットワークのところですか。その中の一つにももちろん「ぷれジョブ」があってもいいんだけど、主はぷれジョブが全てにはなっていないと思います。今回はたまたまお金があったから「ぷれジョブ」を勉強させてもらってよかったんですが、みんながみんな「ぷれジョブ」にかかわるわけではなくて、それにかかわれないからいけないというわけではなくて、ネットワークがある中で例えば「就労の問題」「の問題」の中に「ぷれジョブ」があって、「そればっか情報が上にあがってこうなっているよ」というほうが参加しやすいかなと思います。

質問2

内容(2)の4番目「ぷれジョブのプレ」のぷれジョブの活動報告はするけれど運営は高田でやっていくということですね。

ここではやりません。

でも、もしやりたかったらいっしょにしましょうという気持ちはあります。

ここで全部というのは負担かなと思います。

- ・ぶれジョブとしての集まりはあって、やらんか net としての集まりがある？
- ・ぶれジョブは今度作るとなると、定例会という形になるんですかね。

(事務局) そうですね。

例えばイオンで山田さんがやってジョブサポーターで山川さんがついた。その成果を2月の末土曜日に定例会をやりましょうというようなイメージになるのでしょうか。

- ・定例会の案内はだすけれども必ず出席しなくてはいけないというものではなくなります。やらんか net で定例会を開くと、みんな来なくてはいけないという話になるのでそれは負担が大きいかなと思います。でも、もちろん情報や報告はいたします。その情報を持って「糸魚川」や「新井」にいくつもりでいます。

(2) 研修会の実施

夏季研修会

1 目的

- ・特別な支援を必要とする子どもたちがそれぞれの地域で社会参加と自立を目指し、自己実現のための幸せな生活を送るための1つの活動として「ぶれジョブ」について研修を深める。

2 日時 平成26年8月5日

3 場所 上越市福祉交流プラザ

4 参加人数 63名

5 内容

(1) 研修

「ぶれジョブって、何をするの?!」

講師 新潟県立長岡聾学校教頭 石畑 健一 様
(ぶれジョブ新潟連絡協議会長)

【はじめに】

- ・長い間高等部に在籍し進路指導を行って来ました。その中で、集団参加が苦手な子どもがとても多いことを感じました。また、自分の夢があるのだけれども口に出して夢を語れない子どもたちや、自分の障害を受容できていない子どもたちが多く見られました。
- ・一つは障害の特性によるものかもしれませんが、大きな原因として二次障害(子どもたちの経験不足、興味関心が育っていない、自分への自信のなさから進路に対する不安感で包まれている)が考えられます。
- ・このことを顕著に物語っているのが、高等部の進学に当たって、いったん地域の高校に入って、その後特別支援学校に転入してきた子どもたちの中に見られます。通学のバスの中でヘッドホーンをして音楽の音量を大きくして他から聞こえないようにして通学してくる子どもが複数いました。
- ・その「理由」として(子どもからの聞き取りから)
出身中学の同級生とバスの中で途中まで一緒にいるから
中学まで友だちだったのですが、何か自分の悪口を言われているのではないかと気がになって、音楽を聴くことでそれを断ち切っている。
- ・すごく一生懸命な生徒ただだけに、こういうことをいうんだったら、他の生徒もみんな心の中で、他者へのコンプレックス、自分自身の自己肯定感が日頃からもてていないということがこの言葉の中から私は感じました。
- ・また、保護者との話し合いからは、次のようなことを感じました。

障害に対する情報不足	養育に対する不安
社会からの疎外感	家庭の中での疎外感

【ぶれジョブを始めたきっかけ】

- ・小中学校の中で、特別支援学級の保護者の方は非常に少ないです。ですから、同級生の保護者の方と話をしている中で、なかなか自分の子どもの障害のことについて切り出すことができないことがあります。またお母さん方が自分の責任のように感じている方がいます。すごく肩に重くのしかかっている感じがします。少しでもお母さん方の気持ちを楽にさせてあげたい、そのためには相談ができる仲間をつくるのが必要です。また、一番のお母さん達の願いは何だろうかと考えたときに、将来子どもたちがどのように進路を決定できるのか、そして、将来に見通しを持たせることが大事ではないかと考えました。保護者への進路学習が必要ではないかと

というのが進路指導をしていたときに感じたことでした。

「保護者の不安」の原因は
相談する相手がいない現状 お母さん方の感じている責任の重さ 子どもたちの進路への不安

【ふれジョブとの出会い】

・働く体験や喜びの拡大、地域の中での理解者の育成、保護者の負担軽減、子ども自身の自信の醸成などが必要であると考えていました。こういったことができる活動はないかと思っていたときに 6年前岡山県の中学校特別支援学級の西先生が新潟に来られました。この時「ふれジョブ」の講演をしていただきました。この講演を聴き、自分がやりたかったことはこれだと感じました。それなら、新潟でも活動を行えばいいと思い、仲間と立ち上げようということになりました。これが新潟での「ふれジョブ」の始まりです。

【ふれジョブ】とは

- ・「ふれジョブ」というのは、簡単に言うと障害のある子どもたちの就労支援のプログラムです（それだけではないのですが）
- ・対象は小学5年生から高等部3年生までです。
- ・地域の協力事業所の中から、自分がやってみたいことやこれなら自分はできそうだなという仕事の中から、選択して仕事をします。
- ・ふれジョブの活動は、放課後や土曜・日曜の休日を利用して1週間に1時間程度の仕事を約半年間継続して実施します。
- ・仕事は「ジョブサポーター」（地域のボランティア）という方と一緒にいきます。

- ・1回のふれジョブは、次のように行います（上図参照）。

放課後、サポーターがやってくる。

仕事を1時間行う。

帰宅する。

学校でふれジョブの様子を話し合う。

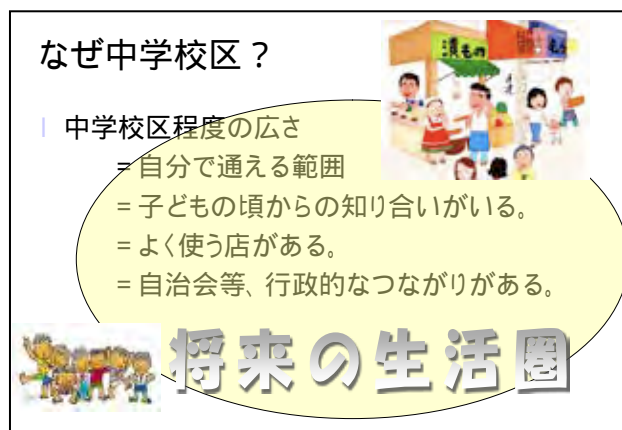
サポーターと一緒に協力事業所に行く。

その後、仕事の報告をする。

家で親に報告をする。

【ふれジョブの活動の広さ（範囲）は？】

- ・ふれジョブは中学校区で行っています。なぜ中学校区の広さで行うかというと、「自分で通える範囲である」「子どもの頃からの知り合いがいる」「自分がよく買う店がある」、そして「自治会や子供会・行政的なつながりがある」からです。すなわち、子どもたちにとっての将来の生活圏であり、ここで自分の知り合いを広げていくことが「ふれジョブ」の大きなねらいなのです。



【なぜ、1週間に1時間なの？】

- ・ふれジョブは、1週間に1回1時間程度のお仕事体験をします。なぜ、1週間に1回、1時間なのか。次のような理由からです。
 - 子どもたちにとってあまり負担にならない程度の時間である。
 - 負担が少ないから、仕事への興味がわく。
- ・中学部や高等部では2週間程度、地域の中で現場実習をします。それは朝から晩まで長いです。だから、本格的な就労になります。子どもたちにとってはやりがいがある反面、かなりプレッシャーもあります。ふれジョブの場合は負担を極力少なくして、子どもたちが働くことへの興味関心をもって体験し、自分からやってみようかなという意欲を引き出すことにあります。
- ・1週間に8時間になると、実習先の事業所にとっても特別な仕事の準備が必要になります。しかし、1週間に1時間くらいなら協力してもいいかなということで、協力してくれる事業所が多いです。
- ・ふれジョブを始めるにあたって、協力事業所がどれだけ出てくれるかなということがとても不安でした。しかし、以外と事業所の協力数が多く、こちらの方からお願いに行くと快く引き受けてくれるところが多いです。1週間に1時間程度の仕事が働くことへの動機付けとして効果がありますし、「よくがんばったね」という言葉かけによる効果も見られています。

【ジョブサポーターって？】

- ・ふれジョブは、地域のボランティアの方と一緒に仕事をしています。1週間に1時間とはいえ、事業所も子どもだけで来られた場合に子どもに教えるスタッフが必要になります。それは事業所の負担になります。そこで、子どもたちと事業所とのパイプ役として、「ジョブサポーター」をお願いしています。
- ・「ふれジョブにいがた」では、民生委員や退職された方、福祉に興味のある方がジョブサポーターをやってくれています。
- ・立ち上げの際に、ジョブサポーターをお願いするのが難しかったです。そのため保護者同士が、互いの子どものジョブサポーターをやってみようと思えました。自分の子どもに対してできていなかったことが、他の子どもに対して客観的に見ることができて、いろいろなことに気づけたようです。
- ・ジョブサポーターは半年ごとに交代しています（事業所も含めて）
- ・ふれジョブがその事業所でうまくいくと、親御さんは将来の就労のことを考えて、ず～とそこでふれジョブをやらせてほしいという思いがでてきます。実際にふれジョブをしている保護者の中には、「半年たって、もう半年同じところでやらせてほしい」という話が出てきますが、一応事業所もサポーターも変えるという約束事になっています。

【なぜ、同じ事業所やジョブサポーターではだめなのか？】

- ・理由は次のとおりです。
 - 子どもの育成が広がらない
 - 支援者が増えない
 - 地域の中の味方が増やせなくなる
- ・例えば、高等部に入ってから事業所に2つ実習に行き、そこで就労できたとします。けれども、何年か後に離職してしまった場合、同じ所しか実習していないと、次にどんな仕事をしたらよいのかということが見つけられないという心配が出てきます。そういうことから、半年ごとにいろんな事業所を経験していくことで、自分にあった事業所をいくつか選択することもできると考えています。また、親の知らなかったところで、自分の子どもの適性があるのかな、その仕事をがんばったなという意外な部分も見えてくるとも思います。
- ・ジョブサポーターがどんどん変わっていくと社会参加が苦手な子どもであっても地域の中で自分を見てくれる味方が増えます。それが子どもたちにとって大きな財産になってくると思っています。

【ジョブサポーターにとっての問題点】

- ・実際に新潟でふれジョブをやってみて、1週間に1時間とはいえ、半年間、1対1でジョブサポーターをやることが、ジョブサポーターにとって負担であることが分かりました。毎週1時間、必ずそこに行かなくては行けないとなると、自分のスケジュールが難しくなってきました。
- ・「ふれジョブにいがた」では、ジョブサポーターの負担軽減を図るため、3~4人のチームを編成してローテーションで回るようにしました。そのサポーターがその子どもと1ヶ月に1回くらいになり、なんとか負担を軽減することができました。

【小学部5年生からぷれジョブをするのは？】

- ・小学校5年生から高等部卒業まで8年間あります。多い人では16回できます。16カ所の体験の中で子どもたちの中には人的なもの、物的なものが積み上がってきます。子どもたちにも仕事への適性が生まれるし、職場での人間関係が広がってきます。いっしょに働いたことのある子どもだと愛着があると思います。「くんだね」「くん、こんなことが得意だね」といったことで、その子どもの味方になってくれる人がいろいろな職場で、また地域のサポーターの中で増えていきます。地域の中でたくさんの知り合いができて、仕事をする上での基礎が積み上がってきます。

【ぷれジョブの定例会を大切にするわけ】(スライドを見ながら)

- ・ぷれジョブでは、月1回の定例会を大切にしています。定例会では、
ぷれジョブの活動を発表します。
子どもたちの活動報告や運営連絡などを行います。
ジョブサポーターや事業所から仕事の様子を話してもらいます。
保護者からも家での子どもの様子を話してもらいます。



- ・それぞれの思いや体験を共有することが定例会の目的でもあります。
- ・ジョブサポーターや事業所からは、子どもたちの「ぷれジョブ」をやりながら変わってきたところをほめてもらっています。
- ・三条地区の「ぷれジョブひまわり」では、月によってクリスマス会などのお楽しみ会を行う等本当に仲良く接しています。
- ・定例会で修了式を行います。半年間ぷれジョブをやると、事業所での仕事が終わるので、修了をお祝いして事業所の方やサポーターの方から修了証を手渡してもらいます。そこでは感謝の言葉を事業所さんなどに渡します。こういった子どもたちの様子を見て、保護者の方からも「将来何とかなりそうかな」という言葉や、他のぷれジョブをしたいと考えてい

る子どもたちは「お兄ちゃん達みたいにやってみたいな」という言葉が聞かれます。このように働く意欲や関心がどんどんつながっていきます。

- ・子どもたちはぷれジョブをやっていて、自分たちはプロの人から仕事を学んでいるんだという気持ちをもって臨んでいました。また、いろんな地域の人たちから賞賛されており、自分たちは地域の人たちの役に立っているんだといった自信が生まれました。仕事をしていて気持ちがいいし、またやりたいなという気持ちが育っていきました。それが自己肯定感や自己有用感がえられていくと感じています。ぷれジョブってまさにここを育てる活動かなと思っています。
- ・各地域の定例会の開催日は「ぷれジョブにいがた」のホームページに掲載しているのでぜひみてください。

【ぷれジョブを行うと】

- ・子どもたちにとって、ジョブサポーターや事業所の方は地域の中でのいい見本だと私は思っています。「仕事って、このようなことをするのだな」ということが分かり、自分がお手伝いをすることでほめてもらって仕事への意識が高まっていくことが実感できます。地域の事業所にとってみれば、いっしょに仕事することで職場の雰囲気も変わってくるし、障害への意識も高まってくるということでした。
- ・ぷれジョブを行うことで、子どもたちは地域の中に知り合いが増えます。そのことはとても大きなことだと思います。地域の方々も地域にこのような子がおり、こんな特徴がありこんなことが得意でこんなことが苦手であるということが分かります。こんなことを手伝ってやることでできるのだということがわかります。そこで、その子に対



する認識が増えてくるのかなと思います。本当にその子の成長を喜びあえる仲間になってくれると
感じています。

【ぶれジョブの大きなねらい】

- ・子どもたちを中心に、地域の事業所、地域の人、学校、行政、家庭が一緒になって地域のネットワークができてくることが大きなねらいです。
- ・子どもたちが大きくなって働けるということは大切なのですが、地域の中で安心して生活できるということが非常に大事だと思います。こういった土台がしっかりできてきていて、その中で就労につながっていけば子どもたちにとっても地域にとっても暮らしやすい地域になるのではないかと考えています。
- ・このように、至る所で少しずつ広がってきたぶれジョブの輪が、新潟県全体に広がり、障害があるなしにかかわらず、互いに信頼し、助け合い、生き甲斐を持って生活できる、そんな町になっていってくれたらなと思っています。ですから、ぶれジョブが地域の人とのつながりといった土台をつくったところで、高等部に進学していった子どもたちが地域の中で現場実習をします。学校では就労につながるといった実際の体制をたててもらいます。そんな形が地域に根付くことができたらよいなと思っています。

(2) 研修

「ぶれジョブに参加して～保護者の立場から・サポーターの立場から～」

講師 保護者兼ぶれジョブ長岡代表 品田 真由美 様
ジョブサポーター 野尻 範子 様

保護者兼ぶれジョブ長岡代表 品田真由美 様から

【ぶれジョブを始めるまで】

- ・長岡の丘陵公園の近くに暮らしています。私の子どもは広汎性発達障害で小学校3年生から特別支援学校に入りました。コミュニケーションの苦手な恥ずかしがり屋の子どもです。
- ・ぶれジョブとの出会いは第1回のフォーラム（新潟市でぶれジョブの事前の取り組み）を聴きに行き初めてぶれジョブという活動があることを知りすばらしいなと思いました。
- ・地域の人に子どもを知ってもらって理解者を増やし、子ども自身が地域で暮らしやすく生き生きとした笑顔で一生を地域で暮らしていくということがイメージできました。子どもにもぶれジョブをさせたいなと思ったので、フォーラムを聞いた後、すぐに仲間の友だちに声をかけました。平成21年10月にぶれジョブの会を長岡で立ち上げることになりました。
- ・最初はぶれジョブってどういったことなのかが分からなかったのですが、新潟市で立ち上げた先生を招いて「考える会」を開きました。その「考える会」には地域の教育関係の先生方や福祉関係の方、友だちのお母さん方（サポーターとしての）に参加してもらいました。ぶれジョブを考える会を2ヶ月に1回開きました。そういう中で、失敗はあるかもしれないがとにかくやってみようということになりました。そして、皆さんの協力が得られたので、平成23年1月から早速ぶれジョブを3人の子どもでスタートしました。

【サポーターを見つけるまで】

- ・サポーターが決まらなかったのですが、私は自分の子ども以外のお子さんにサポーターとしてつきました。その活動が自分にとってとても勉強になりました。
- ・徐々に声を掛けたり、回覧板を回してサポーターを募集したり、いろんな方法でPRをしました。やっぱり口コミが一番協力者を増やすやり方とわかりました。そこで、知り合いからまた次の知り合いに伝えてもらいました。勇気を持って声を出すことが大事だなと思いました。

【ぶれジョブを実施した卒業生は？】

- ・4年間経過して、卒業生がこの春に5名でました。それぞれ一般企業に就労した子どもや福祉事業所で仕事をしている子がいます。いろいろな形でそれぞれ社会へと旅立っていきました。
- ・ぶれジョブを経験した子どもは、仕事に対してとてもまじめに取り組み、意欲があります。「仕事は一所懸命やるもんだ。人にほめられるものなんだ」という気持ちが育っていると思います。

【協力事業所は？】

- ・今、協力事業所は20社程度になっています。事業所の範囲も青葉台の中に集まっています。青葉台だけでなく旧長岡市の方でも活動を立ち上げているところもあります。

【サポーターは？】

- ・ボランティアにつきましては月に1~2回を一人の方が担当しています(1人の子どもに3人制ローテーション)。時間帯は平日の放課後と土曜日の1時間程度になっています。小学校の子どもでは30分ぐらいとかその子どもの実態に合わせて行っています。仕事の内容もその子に合わせています。
- ・ボランティアやチャレンジの子ども達も保険をかけて対応しています。その方が企業にお願いするとき、こちらで責任をもって迷惑をかけませんという意思表示ができ、受け入れてもらえやすくなります。

【ぷれジョブに参加したわが子をみて】

- ・うちの子もすごい恥ずかしがり屋で、挨拶も下を向きながらあまり声をかけることもできなかったのですが、ぷれジョブを中学3年の1月からスタートして高校3年生まで行き、今一般就労ができました。本当にこの活動で成長し明るくなり挨拶もできるようになったなと感じています。いろんな経験を積むことで、働きたいという意識も、社会に出たいという気持ちもここから生まれ、そういった意欲がもてるようになったことを感謝しています。

【コーディネーターをして】

- ・私はぷれジョブのコーディネーターをやらせてもらっている中で、ジョブサポーターや企業の方との出会いがありました。「ぷれジョブをしてたね」と言ってもらい、元気づけられたことも多くありました。地域にネットワークが広がったことを今私自身実感しているところです。これからも長岡でこのぷれジョブを広げていきたいと思っています。11月30日に第4回ぷれジョブにいがたのフォーラムを行いますのでぜひおこしください。

ジョブサポーター 野尻範子 様から

【ジョブサポーターをするきっかけは】

- ・私がサポーターとしてやり始めたきっかけは、品田さんのお子さんとうちの子が同級生で声をかけていただいたことからです。私の子どもは足が悪い子だったので装具をつけて学校にいました。その関係で遊んだりすることを遠慮するおさんもいました。私は子供に対して負い目があるような気がして素直に遊んでほしいということを言えない状況でした。でも、子どもにはいろんな触れ合いをしてもらいたいという気持ちがありました。情報もほしいと思ってそれらの活動の中に入りました。その中で品川さんのお子さんがまったく抵抗なく受け入れて遊んでくれました。その優しさに心が温かくなりました。今回、ぷれジョブのサポーターのお話をいただいた時に今度は私がお返しをしなければいけないと思ってサポーターを受けさせてもらいました。

【地域とのつながり】

- ・私の体験から、今ぷれジョブを始める始めないにかかわらず、地域とのつながりがあると、「サポーターに来てほしい」と声をかけたときに「いいよ、私協力するよ」と言ってくれる人ができてくれると思いました。やっぱり地域の人のつながりを大事にすることが大切だと思います。

【ジョブサポーターをしてみても】

- ・最初にぷれジョブを担当した時は小さい時から知っている仲良しのお子さんだったので、お子さんの方もサポーターであるという意識よりも「ちゃんのおばさん」という感じで子どもたちは接していました。それなので、緊張することもなく「次の仕事はこれだよ」と声を掛けることができました。そして、「えー、おばちゃんやってよ」ということもあり、これでいいのかと迷いながらの活動でした。いろんな経験をするうちにこういう日もあるのも人間なんだなということが分かってきました。
- ・初めての子どもを担当する時は緊張します。これでいいのかなといつも心配します。でも、すごく子どもは体全体で表現してくれます。先ほどビデオで紹介されたゴミ箱のごみを集めて洗濯物をたたんだ子どもは、家でもお母さんのお手伝い(洗濯物をたたむ)をしていたそうです。私たちも大好きな子どもなんです。その子どもたちの中には早く仕事を済ませたいという気持ちかはやってゴミを落とすこともあります。そこで「ちゃんとゴミを拾おうね」というのがサポーターの役割だと思ってやっています。企業の方に迷惑かけないことが私たちの仕事です。
- ・洗濯物の仕事に移ると体が揺れて、嬉しくて嬉しくて仕方がないというくらい喜ぶのを見ると、本当にサポーターをやっている良かったなと思います。こちらも嬉しくなってきます。特に洗濯をしていい匂いがして乾燥

機にかけ、ふわふわした洗濯物を一緒に見るととても幸せな気分になります。「ちゃん、よくできたね」「がんばったね」「すごいね」って声を掛けると手を出してハイタッチをしてくれました。その時私は嬉しくて感動しました。「やったね」と言ってハイタッチをしてその日の仕事を終わりました。

【サポーターの役割って？】

- ・私がぶれジョブのサポーターをしてきてサポーターの役割はなんだろうと考えました。私の自分の子どもに対してもそうでしたが、心配で親元から手を離せないという子どもが多いと思います。その時に親元の手から離れる機会をもたせる役割であるのかなとも思っています。
- ・今までだとお母さんのそばにいて困ると親を頼って手を出してもらおうところが、そこには親がそばにいない。「どうしよう。」っていう緊張感その子の刺激になっていると思います。
- ・「こういう時はどうしたらよいのだろう」と子どもが考える場面があります。いろんなことがその子から発せられて、「こうしてみたらどうかな」「こうしたらうまくいくかな」という言葉が出てくることがあります。そんな時に「そうだね、今度そうしてみようか」ということがどんどん広がっていきます。それを見たときに「あっ、これがサポーターの役割なのかな」と感じました。だから、手をかしてあげられる親以外の大人の存在が地域にあるということがぶれジョブのいいところかなと思います。

【ぶれジョブを卒業した子どもたちを見て】

- ・卒業生がこの春何名か出ました。バスに乗って仕事に行く機会を見ることができました。出会った子どもたちに「おはよう」と声を掛けるとニコッと笑って「おはようございます」と返してくれたり手を振ったりしてくれます。これが地域のつながりだなと日々感じています。子どものなかには体力づくりでランニングをしているのを見て「がんばって」と声を掛けると、胸を張って一生懸命走りだす姿を見ます。「顔を見て声を掛ける」こともサポーターの一つの役割だと感じました。今後も子どもたちと一緒に活動していきたいと思っています。

先進地域視察研修会

1 目的

- ・「働くこと」や「自分で生活すること」を、特別な支援を要する児童生徒がどのように学んでいくのか、『ぶれジョブ』の取組を通して考える。
- ・上越地域で『ぶれジョブ』を具体的に実践するために、県内で実践している地域を視察し、今後の上越地域での展開の参考にします。

2 日時 平成 26 年 10 月 19 日 (土)

- ### 3 場所
- 視察先 1：長岡市越後丘陵公園（ぶれジョブ長岡の活動視察）
 - 視察先 2：柏崎市年頭屋茶舗（ぶれジョブ柏崎の活動視察）
 - 視察先 3：新潟市北区の農場（ぶれジョブきたの活動視察）

4 参加者人数 20 名

5 内容

(1) ぶれジョブ長岡の活動視察

- 視察場所：越後丘陵公園「花と緑の館」 チャレンジド：高等部 2 年女子 1 名
- ジョブサポーター：品田さん（ぶれジョブ長岡代表）
- 説明して下さった方：長谷川さん（ぶれジョブ長岡）

「チャレンジドの仕事」

- ・越後丘陵公園のスタッフの朝の打ち合わせから参加します。仕事内容を確認したうえでジョブに向かうことになっています。
- ・仕事内容は朝礼の参加と「花と緑の館」のテーブルと椅子を拭く作業を行っています。
- ・ここの丘陵公園でのチャレンジドのジョブ体験は 12 月に終了するそうです。
- ・仕事内容はその日によって異なっており、この場所は本人にとって 4 ヶ所目です。この日は簡単な仕事を 1 時間やっていました。
- ・チャレンジドが一人でやっていることが多く、サポーターは離れたところで見守っているというような形でした。
- ・たくさんある椅子の位置を並べ直したり後ろにある長椅子の掃除をしたりする仕事を 1 時間弱やっていました。

「ジョブサポーター」について

- ・このジョブサポーターはチャレンジドの住んでいる地域の人です。
- ・ふれジョブ長岡では住んでいる地域の方がジョブサポーターになっており、1週間ごとに交代しています。
- ・サポーターのなり手は、一般の方から教員のOB・障害のある人に馴染みのある方、PTAの役員やその友だち、広報や市政便り・社協便りを見て応募した人たちがいるそうです。

「長谷川さんからの説明」

- ・企業開拓については、職場体験と混同されないように注意しています。知り合いの人にパンフレットを配って話をしていくようにしているそうです（当たって砕けるの意気込みで）。
- ・企業に話をするときには、仕事は何でもいいこと、保険には入っていること、就職につなげるとは思っていないこと、土日や平日の放課後の1時間程度でいいこと、サポーターと一緒に働くことなどを伝え、いろんな体験をさせてほしいことを依頼しました。受け入れてもらえるかどうかは企業の店長さん次第であったり、店の事情による場所であったりします。やっぱり土曜日の受け入れが多いそうです。



- ・一つの企業にチャレンジドが1名、サポーターが4名で行っています。1週間ごとに交代する形で、サポーター4名が一巡すると1ヶ月終わるようにしています。
- ・サポーターにはボランティア保険、チャレンジドには課外活動保険にそれぞれ加入しています。このお金は長岡市の助成金から出してもらっているそうです。
- ・企業には子ども個人に応じた仕事内容に取り組んでもらっているそうです。やっぱりコーディネートは必要であるとのことでした。
- ・途中で「仕事がいやだ。やめる。」と言い出すチャレンジドもいるそうです。その場合は打ち切りにするそうです。そうならないために「15分間から始める」とか「途中、終了」ということも行っ

ています。基本は体験できるということを重視しています。

- ・やってみるとなかなか言葉で言えない子や気持ちにむらのある子には、プレの「ふれジョブ」をするなどの取り組みもしています。1日、2日の仕事内容のふれジョブもして取り組んでもいます。

「その他」

- ・ふれジョブ長岡で、現在仕事体験を実際している子供たちは、特別支援学校の小学部で1名、中学部で2名、中学校の特別支援学級で3~4名、高等部が2名。それらの人が仕事体験をしています。
- ・質問の中に「待機している子供はいるのか」ということについては数名いるそうです。その理由は保護者の送迎が困難のため、中学校進学のために休んでいるのだそうです。体験する企業がなくて待機するということはないそうです。



- ・ふれジョブ長岡を卒業した子供は5名いて、就労先はふれジョブで体験した仕事とは関係がないという話でした。ふれジョブをしたからといって就労につながるとは限らないということです。

(2) ふれジョブ柏崎の活動視察

視察場所：年頭茶舗（柏崎市内）
チャレンジド：中学部2年女子1名
ジョブサポーター：歌代さん
説明して下さった方：森山さん（ぶれジョブ柏崎）

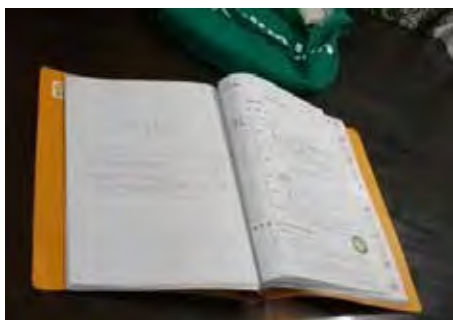
「チャレンジドの仕事」

- ・機械の上の方からお茶の葉を入れ、その機械の中を通ってお茶が出てきます。でてきたお茶を100gずつ袋に入れそれを40袋つくる仕事をしています。
- ・社長が重視していることは、ぶれジョブが終わった後、必ずお茶を入れて振る舞うことです。これも仕事としています。
- ・従業員がいながらのジョブで、しかも本人はここでの仕事が2回目なので手慣れた様子で作業を行っていました。
- ・最後に自分が袋詰めしたお茶はどんな味がするのか入れてもらっています。
- ・今のジョブの仕事の内容のほかに「袋をつくる」「袋の裏に表示を貼る」「機械を掃除する」「お店の中の掃除をする」などの仕事があるそうです。
- ・この年頭屋さんでは、毎回同じ流れで仕事をさせてもらっています。



「ジョブサポーター」について

- ・ぶれジョブ柏崎ではチャレンジド1名に対しサポーターが3人で行っています。1週間ごとにサポーターを交代しています。柏崎は月3回の仕事体験と1回の定例会を一つのサイクルとして組んでいます。



「ぶれジョブノート」について

- ・チャレンジドのプロフィール
- ・今日やった仕事
- ・一言メッセージ（事業主やサポーター等）
- ・担任の先生からのメッセージ

「年頭屋の社長さん」より

- ・柏崎の企業の集まりで、リーダーはどうあるべきかといった勉強会に森山さん（ぶれジョブ柏崎の立ち上げ人）をお呼びして、ぶれジョブを知り「（ぶれジョブが）社会や地域に貢献できることであるな」と思って広めたい気持ちになったということです。
- ・ぶれジョブを行うにあたっては、仕事体験+アルファを心がけているということです。先ほどお話しをしましたように最後にお茶を入れてもらう。袋詰めだけでなく、「お茶って、こうやって飲む」という体験までしています。

「サポーターの歌代さん」の話

- ・チャレンジドさんのおうちの方とは友だちだという話で、子供さんのこともよく知っていて一緒に仕事をしていて楽しいそうです。自分の空いている時間をそこに使っているという話でした。1時間もやらないジョブもあるとのことでした。

「森山さんからの話」

- ・エプロン、腕章、Tシャツを作って仕事の時に使っているそうです。
- ・パンフレットを作って啓発活動を行っています。
- ・「はじめまして」という便りを作成し、各方面に配布をしています。

- ・大きくなったら、結局は地域で暮らすことになります。ですから、子供だけではなく親も地域とつながっていかねばいけないと感じました。その発想が町づくりにつながり、ぷれジョブへとつながっていったそうです。



- ・ぷれジョブ育て隊を作ったりぷれジョブの勉強会を行ったりしたそうです。まずは毎月の定例会を行うことから始めました。そこで「関心をもってもらう」「イメージを自由に話し合ってもらう」「多くの人に知ってもらう」ということから、柏崎ではフォーラムを行ったそうです。参加者数 68 名。交流会も行ったということでした。企業やサポーターさんも呼んで子供たちとふれあってもらおうという活動をしていました。
- ・チャレンジド 1 名につきサポーター 3 名。そのうち 1 名はコーディネーターを兼ねています。この方が「(企業に)こんな子供が仕事をしたいんだけど。」「ボランティア保険にも入っているんですがどうですか。」などの話をしたり日程調整をしたりするという役割を担っています。
- ・学校の職場実習とは違うという考えをもっていらっしゃいます。「今やれる力でぷれジョブをスターとするんだ。」「今やれていることでぷれジョブをスタートするんだ」というふうな考え方をしていました。チャレンジドが をもらう体験を持てるようにしたいということもおっしゃっていました。また、活動記録をしっかり取っていくことが必要であるとも言われました。
- ・企業への勤め方は商工会議所を通じて、また企業の集まりに参加して説明するとか、パンフレットの配布をしたり、知り合いに声をかけたりボランティアセンターに連絡をとったりするなどの行動を起こしたそうです。
- ・運営費はチャレンジドから徴収したり、サポーターや企業から協力金を募ったりしているとのこと。

「追加説明」

- ・森山さんは自閉症協会の柏崎支部の会長さんでした。森山さんは以前ぷれジョブ柏崎の代表をされていたのですが、現在は商工会議所の役員で女性部の会長を務めている方に代表を代わっていただいたそうです。やはり一般の第三者の方に早々と代表を代わっていただいたこと。これが町づくりにクローズアップされていったことが良かったのではないかと思います。
- ・企業主の方で、法人会があって毎週朝の 6 時から 7 時にかけて定例会を開いているところがあり、そこでも話(宣伝)をされたということです。この会のネットワークは上越地域にもあるそうでコロナもやっているということなのでそのへんともつなげていってもいいのではないのでしょうか。年頭屋の社長さんに連絡すればつながって行くのかなとも思います。
- ・子供たちの顔を見たとき、とても顔の表情が輝いていてぷれジョブで仕事をして達成感が得られたのだなという感じを強く持ちました。
- ・親の悩みが別の親が解決してくれるケースがあるということを知りました。自分の子供だと甘やかしてしまうことが多いのですが、「時には突き放す」「一歩下がって見守る」などは子供にとってはいいことなのではないかと感じました。

「質問」

- ・長岡市の保険については、長岡市は補助で支出しているということですがどういう形で補助がでたのか。助成金の中のお金を使って、ボランティア保険の費用を出しているということです。今は助成金がないので、個人で負担して保険に入っているそうです。

(3) ぷれジョブきたの活動視察

視察場所：高木農場

チャレンジド：高等部2年男子1名

「チャレンジドの仕事」

- ・フルーツマトを入れる箱作りをしていました。
- ・この農場では中学校の職場体験も経験しているので、受け入れには抵抗はなかったということでした。
- ・受け入れの条件は「自宅から通えること」「危険のない範囲から通ってこれること」「親の送迎が厳守である」ということです。たくさんの方を受け入れるので重ならないように配慮しているとのことでした（今回で4人目）。



視察場所：自動車販売店（個人経営）

チャレンジド：中学校特別支援学級3年生男子1名

- ・今、行っている仕事は車の洗浄の作業です。その後、車の 中を掃除機で丁寧に掃除をします。自動車1台まるごときれいにしていました
- ・お母さんが送迎してジョブ先に通ってきています。また、このお母さんも他のチャレンジドのサポーターをやっています。お母さんの話ではこのぷれジョブ先は安心して任される場所だということです。
- ・社長さんはチャレンジドによく声をかけてあげていらっしゃいました。

「その他」

- ・ぷれジョブ6ヶ月を経験した際に、経験したものをDVDに収めて卒業時に児童生徒及び学校に渡すのだそうです。「途中でやめたら損だね」と思われるDVDを作ってその子に贈るんだそうです。最初なかなかうまくとっかかりができないことから始まり、半年間やっていくうちにいろんなことができるようになってきたという感動的なDVDが作られていました。
- ・チャレンジドは世話になったサポーター全員の方に感謝の意を込めたメッセージを作っているということでした。
- ・サポーターは60代の方が多いとのことでした。

「食事会」の中での情報から

- ・ぷれジョブを6ヶ月を経験した際に、経験したものをDVDに収めて卒業時に児童生徒及び学校に渡すのだそうです。「途中でやめたら損だね」と思われるDVDを作ってその子に贈るんだそうです。最初なかなかうまくとっかかりができないことから始まり、半年間やっていくうちにいろんなことができるようになってきたという感動的なDVDが作られていました。
- ・チャレンジドは世話になったサポーター全員の方に感謝の意を込めたメッセージを作っています。
- ・サポーターは60代の方が多いとのことでした。

「追加説明」

- ・「ふれジョブ北」では、サポーターは同じチャレンジドを1シーズン同じ人が見るとするのが原則となっているそうです。しかし、やはり毎週ジョブに出るとするのは厳しいので4人で交代しているとのことでした。
- ・チャレンジドの親は絶対に「ふれジョブ」に丸投げをしないということになっていて、送迎は保護者の責任で行い、サポーターは送迎までは手を出さないことになっているそうです。親が送迎できなければ受け入れないということになっています。
- ・柏崎の場合は3人のサポーターのうち一人がコーディネーターをすることでしたがこの地区は分業しています。コーディネーターというのはサポーターさん4人がどう扱えるか、一人が欠席の時にどう受け入れられるかというのがあるのでコーディネーターはサポーターの調整役だとか、または写真を撮って記録をしている。これがコーディネーターの主な役目なんです。そして、6ヶ月間1シーズンのDVDを作ってふれジョブ修了式の時にそれをあげる役目もあります。記録をしたり勤務やサポーターの調整をしたりいろいろな仕事が多くありコーディネーターは大変ですとのことでした。
- ・代表がコーディネーターの上にいます。代表がいてコーディネーターがいてサポーターがいるという形です。代表さんは企業決定（何があるのかなど企業調整をする役目）をしたり定例会の進行・準備も代表が行うそうです。このように分業をしています。
- ・サポーターさんは一人のチャレンジドに対して2シーズンまでとしそれ以上はつかないと決められています。一つが終わると次の所に行きます。サポーターさんは4~5ヶ所くらい順番にローテーションで回るとのことです。
- ・定例会で修了式をするのですが、一気に大勢が修了式をするのはなかなか大変なので修了式を少しずつずらして少人数で行っているとのことでした。修了式では事業主さんにチャレンジドの手書きのメッセージを入れながら感謝状を渡しているとのことでした。ですから、定例会の修了式には社長さんにきてもらうようにしています。
- ・この地区の代表の八木さんはとてもバイタリティーがあり気持ちが熱い方です。これをやりたいという思いが大きい方です。DVDで子供が成長している過程を撮られるなど素晴らしい成果がでていました。
- ・障害が重度のお子さんはどうですかと聞くと、「どんな子にも仕事はあるんです」と八木さんは言い切ります。「仕事はできる」とおっしゃいましたが、ただし「お預け」「行けばなんかやってくれるんだ」という気持ちではなかなかできませんと言われました。それなので、「やりたい人が集まる」というふうにふれジョブ参加の線引きをしてもいいのではないかとアドバイスしてもらいました。
- ・この地区の企業は受け入れがいいです。どこの企業も「うちはちょっと」という話はなく、「働いてもらってありがとう」と言われ、「働いてもらっている以上、いいたいことは言わせてもらいます」と常識的な指導があります。例えば、「1時間の仕事をするのに30分もトイレにいったらどうするんだ。トイレに行くのなら働く前にいくのが当たり前でしょう」と言った方がいました。当たり前のことをその子に言ってくださった。本当に当たり前の話ができる関係は素晴らしいとも思いました。やったことに対する評価は最大限にしてくれました。スーパーの方などは「ありがたい」の言葉を連呼するほどでした。
- ・こういうふうになるまでには時間はかかるかなと思います。「サポーター集め」や「企業の理解」は上越ではどうなのだろうかという不安はあるんですが、この話をもっていったときに上越の企業はどんな反応を示すのが楽しみでもあります。時間をかければ上越も変わっていくし私たちの子供も住みよい社会に将来はなっていくだろうなと感じました。

5 成果と課題

(1) 成果

地域のPTAで視察や研修会をしたということが大きな成果です。各学校の役員が、年間を通して出席して顔見知りになったりネットワークがつながったりしたことが、「上越地域の同じ目的を持つ親同士がしっかり手をつないで、できるところからやっ払いこう」という「やらんかnet」の目的が十分達成できました。自分の学校だけでいろいろ悩んでいたのですが、この会に参加していろいろな方々がいて、いろいろな考え方を教えてもらいました。自分の学校では思いつかなかった研修会ができて、参加できたことは大きな成果です。

横のネットワークということは非常にいいことになると思って参加しました。趣旨としては地域の中で顔見知りになれる、つながりが持てるということが第一にあったので、その意味では大きな成果となりました。よその学校の方々の意見を聞いたりして、同じ障害のある子どもを抱えている学校なんだけれど、それぞれカラーがあり課題があり、いろんなことが分かって勉強になりました。

「やらんかnet」の活動をやっているうちに、「就職に、早い・遅いはない」と感じました。この会に参加し、たくさんの情報を得ることができました。これが他の保護者にも伝わればいいなと思ったのが正直なところでは。今後2年間小学部に在籍するので、他のお母さん方にも情報を流して、もっと興味を持ってもらえるようにしたいと思っています。

連合的というか、一つの(自分の)ところだけでとどまっていなくて、いろいろな人の意見(保護者や先生の意見)いろいろなタイプの人々の意見を聞くことによって、自分は一人でないという気持ちで心強くもなりました。いざとなったら誰かに相談しようかなということができるようになります。

自分の学校だけでなく広域に使えるというネットワークができたと思います。ちょっと助けてというと「よし、わかった。行くよ」あたりができたのかなと思います。

PTA活動を少し広げて、自分の学校だけで完結するのではなくて、連合会の中で研修会を行うなどちょっと広い視野で、他ではやっていない試みができるのかなと思います。

(2) 課題

これからみんなですべてやってきたことをどう広げていくのか、自分の学校のPTA活動にどう広げていくのが課題です。

なかなか一般会員の方に話をしても伝わらないところとか、乗ってきてもらえないところがありました。今後はもう少し他の保護者の方にも興味を持ってもらえるようにすることが課題です。

この一年間参加してみて、糸魚川って遠いなということをつくづく感じました。今後、この会とどのようにつながりを持っていけばいいのかということが一つの課題として考えているところです。上越市との距離的な制約や学校規模などもあるので、来年度以降の参加形態をこれから考えていきたいと思っています。

「これだけの活動をやっているんだ。すごい楽しい活動をしているんだ。」ということをもっと広めたいと思っています。

同じ顔ぶれでなくていろいろな人に参加してもらいたいなと感じます。だから、どうやったらいろいろな人を担ぎ出すかということが今後の課題かなと思っています。

**「一人ひとりの命と健康を守る防災教育」
～安心・安全な教育環境づくり～**

千葉県立東金特別支援学校PTA

平成25年度 調査研究助成事業

「一人ひとりの命と健康を守る防災教育」 ～安心・安全な教育環境づくり～

千葉県立東金特別支援学校

目次

- 1 はじめに
- 2 東金特別支援学校の概要と防災教育
- 3 事業の概要
 - 3 - 1 防災ユニバーサルねっとの成り立ち
 - 3 - 2 P T Aの役割（継続性のある活動とするために）
- 4 事業の詳細
 - 4 - 1 防災をテーマとした地域との交流（地域の中核はボランティア部会）
 - 4 - 1 - 1 P T A厚生部主催の炊き出し&避難所開設～地域の子供会を招いて～
 - 4 - 1 - 2 全校児童生徒防災集会～あたりまえ体操を長寿会と～
 - 4 - 1 - 3 公民館で防災交流～仮設住宅の方を招いて～
 - 4 - 2 地域貢献型の防災教育とは
 - 4 - 2 - 1 防災マルチパーティションの開発と作成
 - 4 - 2 - 2 学区の幼稚園との連携
 - 4 - 3 防災の日常化に向けての授業づくり（できる・わかる・自分から）
 - 4 - 3 - 1 防災コミュニケーション
 - 4 - 3 - 2 避難するための体力づくり（スポーツベンチ・ジョギング）
 - 4 - 4 防災教育講演会と防災教育交流会（広い学区の有効活用）
 - 4 - 4 - 1 東金地域防災教育ネットワーク会議（防災教育講演会）
 - 4 - 4 - 2 災害支援を考える集い
 - 4 - 5 学校安全計画と防災教育
 - 4 - 5 - 1 安全教育確認研修
 - 4 - 5 - 2 防災訓練の工夫と評価 「お・か・し・も」に一工夫
 - 4 - 5 - 3 防災訓練の工夫と評価 頭を守ること実態調査から
 - 4 - 5 - 4 災害マニュアルのポンチ絵（簡略に描いた概略の図）
 - 4 - 5 - 5 災害時情報カード・災害時の与薬依頼
 - 4 - 6 兵庫県・鹿児島県の防災教育先進校・団体の視察
 - 4 - 6 - 1 阪神淡路大震災から学ぶもの
 - 4 - 6 - 2 南海トラフ地震や火山噴火から学ぶもの
- 5 総括
 - 5 - 1 成果
 - 5 - 2 課題
- 6 おわりに
- 7 防災教育関連資料
 - 家庭で考え作る「あたりまえ防災安全情報マップ」～学区の小中学校にも～
 - 公共の施設等に「あたりまえ防災安全情報マップ」～要援護者について～

「一人ひとりの命と健康を守る防災教育」

～安心・安全な教育環境づくり～

1 はじめに

千葉県立東金特別支援学校PTAでは、児童生徒一人ひとりの大切な命を守るために、地域の防災力を高めることを目的として、防災をテーマとした地域との交流を中心に、所在地である北之幸谷区との連携を深めてきました。また、自分で自分の命を守ることを目的として、防災をテーマとし、様々な授業や行事で工夫や評価をし、実践を積み重ねてきました。これまでの取り組みの継続と、県内外への発信のために、全知P連の調査研究助成金の交付を受け実施する運びとなりました。

本稿では、事業内容と成果及び課題についてご報告いたします。

2 東金特別支援学校の概要と防災教育

知的障害を対象とした初の県立学校として昭和48年4月に開校し、昨年度は創立40周年を迎えました。県内知的障害特別支援学校では、唯一の寄宿舎設置校です。学区は三市三町（東金市、山武市、大網白里市、芝山町、横芝光町、九十九里町）にわたり、海まで約8km、海拔約8m、平野部であり宮城県名取市と似た地形となっています。平成25年度の児童生徒数は、小学部28名、中学部45名、高等部82名、合計155名（5月現在）。知的障害を中心に、自閉症、肢体不自由、聴覚障害など他の障害を併せ持つ児童生徒の、多様な教育的ニーズをふまえて「自立をめざして 輝く瞳 光る汗」を合い言葉に、保護者職員のチームワークで一丸となって子どもたちの教育に全力を尽くしています。

2011年2月26日、東京の有明で「防災教育チャレンジプラン」の実践団体として初めて防災教育の発表を行いました。PTA会長と役員、学校の所在地である北之幸谷区の区長さんと代理さん、校長を始めとした学校関係者、地域・保護者・学校の三者協働による防災教育がスタートしました。

2011年3月11日、東日本大震災が発生しました。地震発生時は、寄宿舎生徒と部活動生徒が学校で活動していました。また、スクールバスや自転車、JR利用の自主通学生徒等の下校時間と重なりました。下校途中の生徒を学校に連れ戻し、体育館に避難しましたが、大きな余震があり、グラウンドへ避難しました。テントを張り、車のライトで照らし、火を焚いて寒さをしのぎながら保護者への引き渡しを行いました。沿岸部で家屋が被災し、避難している児童生徒もいたため、全児童生徒・家庭の安否確認がとれたのは、翌日となりました。



千葉県では、東日本大震災において、津波に加えて液状化の被害もありました。児童生徒会が夏季休業中に、警察署や地域の方々から話を聞いたり、元禄地震の大津波による供養碑を見学したりして、手作りの防災安全マップを作成しました。県や市から出されているハザードマップを調べていくと、山側には崖崩れの心配があることがわかりました。学校の近くには、交通事故が多く起きる交差点があり、暗くなると不審者の心配があることもわかりました。それらの情報は、防災科学技術研究所が主催する「e防災マップコンテスト」（24年度奨励賞受賞）で一つにまとめることができました。防災教育チャレンジプランでは、23年度防災教育特別賞（3番目）、24年度防災教育優秀賞（2番目）をいただき、「ぼうさい甲子園」では、23年度だいじょうぶ賞（特別賞）、24年度奨励賞（高校生の部3番目）、25年度

3 事業の概要

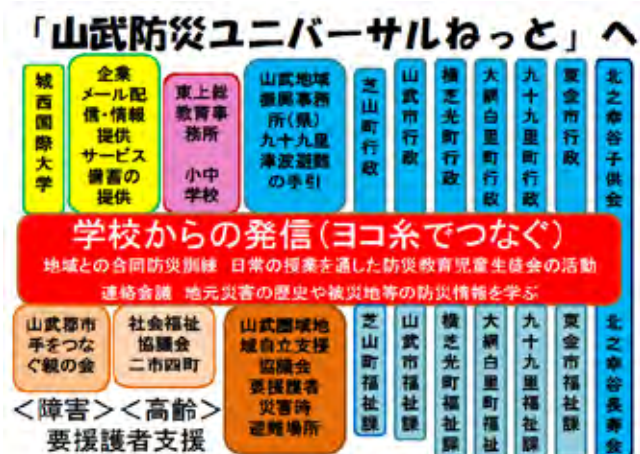
本校は、コミュニケーション支援を大切にしながら、家庭・地域・学校との協働による防災教育を推進してきました。また、防災教育や災害時要援護者の避難等について考える「防災ユニバーサルねっと」を提唱し、関係機関との連携を深めてきました。

自助の取り組みとして、東日本大震災の経験を踏まえ、一人ひとりの大切な命を守るために、学校安全にかかわる行事や職員研修を早期に実施するようにした。また、障害がある児童生徒の防災教育のポイントを、授業や行事を通して探ってきました。ここまで取り組んできた防災教育の実践を、学校安全計画や教育課程に位置付け、発達段階に応じた連続性のある取り組みにしていきたいと考えました。そこに、健康な心と身体を育む視点を加えるとともに、「わかる」「できる」授業づくりを実践しながら、安全・安心な学校づくりを進めていくことにしました。

災害大国である日本に住む以上、必ず来る災害に対して備えを講じなければなりません。地域防災力の向上や広く連携した防災教育の実施は、中央防災会議や災害対策基本法でも述べられています。「防災をテーマとした地域との交流」の継続や内容の整理をPTAと学校が協力しながら行っています。また、防災ユニバーサルねっとの具体化に向けて立ち上げた、小、中、高等学校、特別支援学校、行政機関、福祉機関等が一同に集まる「東金地域防災教育ネットワーク会議」の連携強化に加え、福祉関係機関のネットワーク作りとして開催している「災害支援を考える集い」にも継続して取り組み、誰もが参加できる防災安全教育、関係機関の協働による地域防災力の向上について提案します。

3 - 1 「防災ユニバーサルねっと」の成り立ち

「防災ユニバーサルねっと」を提唱した23年度は、千葉県の事業（地域との連携を深める防災教育公開事業）により立ち上げた、関係機関による「防災担当者会議」を実施しました。この会議では、県・市の行政や教育委員会と地域や保護者の代表が参加し防災について話し合いましたが、防災教育の「教育」の部分や災害時要援護者の問題まで掘り下げることができませんでした。その間、様々な連携を模索し、広い学区を「課題」にせず「有効」に活用することを考え、学区全域をまきこんだ「山武防災ユニバーサルねっと」の構築に向けて取り組むことになりました。24年度は、山武地域の小中学校を取りまとめる東上総教育事務所や山武地域の行政を取りまとめる山武地域振興事務所の協力を得て、「東金地域防災教育ネットワーク会議」を立ち上げ、年2回実施しました。25年度は、継続を考えて、8月の年1回の実施にし、九十九里町立片貝幼稚園や城西国際大学福祉総合学部などの協力も得て、横のつながりを広げて実施することができました。



3 - 2 P T Aの役割（継続性のある活動とするために）

23年度は、防災シンポジウムでP T Aと高等部生徒会が協力して義援金を集めて被災地に送りました。地域との合同防災訓練では、引き渡し訓練も兼ねて実施しました。消防団による放水体験（中高）やホース延ばし体験（小）をしました。東金市総務課消防安全係や消防団の協力を得て実施しました。

24年度は、防災教育講演会で、主に家庭の防災をテーマとして実施しました。P T A厚生部が主催となって毎年夏休みに行っていた親子レクリエーションに替えて「防災をテーマとした地域との交流」を主催することになりました。地域の方

と本校児童生徒が同時に学校に避難することを想定して避難所開設をしたり、地域のボランティア部会と保護者が協力して炊き出しをしたりしました。東金市や消防団にも引き続き協力をしていただき、消防操法の訓練の様子を見学させていただきました。福祉関係機関が多く集まった、災害時要援護者の避難を考えるグループワークにも参加し、様々な方と意見交換をしました。

25年度は、防災の日常化というテーマで被災地の東北から講師に来ていただきました。東日本大震災から改めて学ぶということで、我が事としての意識が高まり、防災意識の継続や習慣化の大切さを学びました。防災をテーマとした地域との交流では、P T A厚生部の行事として定着し、東金市や消防団の協力を得なくても実施ができました。

P T A会長や役員の代替わり、職員の移動等があっても継続した取り組みができるように、年度内に反省し、次年度の方向性まで決めています。

23年度	24年度	25年度
防災シンポジウム 防災教育 地元災害史 「ミニ集会」	防災教育講演会 (ネットワーク会議) 地震防災 家庭防災 「ミニ集会」	防災教育講演会 (ネットワーク会議) 被災地より学ぶ 防災の日常化
地域との合同防災訓練(消防団) 主催:学校	防災をテーマとした地域との交流 (消防団 炊き出し 避難所開設) 主催:PTA	防災をテーマとした地域との交流 (炊き出し 避難所開設) 主催:PTA 「ミニ集会」

4 事業の詳細

4 - 1 防災をテーマとした地域との交流（地域の中核はボランティア部会）

2011年4月の第2日曜日、北之幸谷区公民館で地区の総会が行われました。地域と一体となった防災教育を進めるにあたって、防災関連事業の説明をする時間をいただきました。地域には、「長寿会」「子供会」「ボランティア部会」などの組織があることがわかり、どの時期に、どの方々と、どんな活動ができるかを相談しながら進めてきました。

二年前の炊き出し交流のスタートは、長く続くことができるように、お互いに無理がないように考えて実施しました。メンバーも絞って、高等部生徒会と地域のボランティア部会の参加とし、メニューもカレーライスとしました。野菜を切ったり炒めたりしてルウを協力して作り、電気ガスを使わない非常食用のご飯を使用しました。暑さ対策ということで、場所も調理室で行いました。内容的には、「実際的ではない」という見方もありましたが、無理なく積み重ねてきたことで、昨年度、そして今年度につながったと思います。ボランティア部会の方々には、夜間の防災訓練や長寿会との交流時のサポート、防災教育講演会の参加など、多くの活動で協力をしていただきました。

8月 地域のボランティア部会の方と
高等部生徒会の炊き出し体験

- ・ 備蓄品の確認
- ・ 献立は「炊き出しマニュアル」
(NPOcamper)から選ぶ



寄宿舍で夜間の防災訓練9/26
地域の大学生・ボランティア部会と

- ・ 自治会組織のつばさ会の主導で
- ・ 夜間の行動の仕方を学ぶ
- ・ クロスロードを意識して



昨年度は、「九十九里版津波避難ガイドライン」が作成されたこと等を受けて、避難所開設と炊き出しの訓練を実施しました。PTAが主催となって、東金市役所や消防団の協力も得て、地域からは子供会とボランティア部会の方々に参加していただきました。炊き出しでは、おにぎりという話も出ましたが、人数が多くなると大変であるということ、ボランティア部会の方々に教えてもらい、メニューはカレーライスとなりました。ご飯は羽釜を使っての炊き出しをし、カレールウは長期保存ができる非常食用のものを使用することになりました。これをきっかけに、ご飯の備蓄は数を増やすだけではなく、給食・厨房の係と協力して、週末の残米を多くするようにしました。「備蓄を増やし、保管場所をどうするか」検討することももちろん大切ですが、学校や地域にある様々な資源を、有事の際に有効活用するためのシュミレーションも大切だと感じました。

4 - 1 - 1 PTA厚生部主催の炊き出し&避難所開設～地域の子供会を招いて～

防災をテーマとした地域との交流

PTAの主催が二年目となり、保護者も職員も見通しがもてるようになり、スムーズな運営をすることができました。本校の児童生徒や子供会の兄弟姉妹にも来ていただきましたが、安心安全に過ごすことができました。次年度は、東親会（卒業生の保護者）と青年学級（卒業生）にも声をかけていくことが決まっています。地域への依頼は、次のようにしました（子供会の会長名で案内）。

防災をテーマとした地域との交流（東金特別支援学校）

初夏の候、会員の皆様におかれましてはますますご健勝のこととお喜びを申し上げます。また、日ごろから子供会の活動に、ご協力をいただきまして誠にありがとうございます。

さて、7月27日（土）に下記の通り防災をテーマとした地域との交流の案内を東金特別支援学校より受けました。東金特別支援学校は防災教育に継続的に取り組んでおり、昨年に引き続き、避難所開設を想定した防災教育に関わるイベントを行うとのことです。

つきましては、参加を希望される方は、申込書に参加者のお名前をご記入の上、月 日（ ）までに申込をしてください。

記

- | | | | | |
|---|-------|--|-----------------|------|
| 1 | 期日・場所 | 平成25年7月27日（土） | 東金特別支援学校（体育館 等） | 雨天実施 |
| 2 | 日程 | 9：30～ | 受付 | |
| | | 10：00～ | 開会 | |
| | | 10：30～ | 避難所開設と交流ゲーム | |
| | | 11：00～ | 炊き出し（カレーライス） | |
| | | 12：30～ | 閉会（感想発表） | |
| 3 | その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・ 当日は動きやすい服装で、上履きをご持参ください。 ・ 駐車場については、学校職員の指示に従ってください。 ・ 幼稚園等のご兄弟やご親せきの方も参加OKです。 | | |

長寿会、ボランティア部会へも同様に案内を送りました。長寿会への案内は、文字が小さくて読みにくいという指摘を受けたことから、文字を大きくして印刷をしました。

受付は、統一された「避難者カード(に説明)」を使用しました。

) 避難者カード：東日本大震災の反省を受け、山武地域振興事務所(県の機関)が3市3町の防災担当者を集めて話し合いを重ねて統一したものの受付の後、全員で今日の目的を確認しました。

今日の目的は

- ・ 不自由な体験(普段の生活の幸せを確認)
- ・ 食べる 炊き出し・カレーライス・スイカ
- ・ 避難所開設 少しでも過ごしやすい環境を考える ゆっくり過ごす
- ・ 何か一つでも役割を見つける 与える あるいは一緒に 自分一人ではできないことは限りがある
- ・ みんなで協力して そのために名札がある 知り合いが一人増える(^◇^*) それも役割

家族の命を守る

- ・ どんな災害で どんな時間帯で どこにいたら どうかを話し合っておく
- ・ そうすることで いざという時に信じることができる それが結果として自分の命を守ることになる
- ・ 車椅子のおじいちゃん ベビーカーのあかちゃん 自分ではなかなか逃げられない家族をどう守るかを話し合う 周りに知ってもらう

コミュニケーションを大切に

- ・ あいさつ
- ・ ほうれんそう
- ・ おねがいします
ありがとう
ごめんなさい

職員と保護者はいつも付けている名札を、地域の方には腕章を用意し(高等部縫工班で作成) ガムテープを貼って名前を書いてもらいました。児童生徒は、ガムテープに名前を書いて名札としました。炊き出しグループは、保護者と地域のボランティア部会が中心になりました。食事場所の準備グループは、職員がリーダーになって、身体を動かすことが好きな本校の児童生徒と子供会(お母さん方も)とで学校を散策しながら準備をしました。テントを張り、すのこやビールケースで椅子とテーブルにしました。地域の小さな子や、いつもと違う活動が苦手な児童生徒は、ビデオを観たり本を読んだりゲームをしたりして過ごしました。落ち着いて過ごすことも大きな役割です。高等部の生徒会は、テント張り等に取り組んだあとに、非常食の試食コーナーを設置し、皆にふるまいました。片付けは、全員で協力しました。温めずに食べられるカレーを購入しましたが、とても好評でした。

自分の命を守る

- ・ だんご虫のポーズ
- ・ 頭を守る
- ・ 海の近くで地震が来たら 早く高く戻らない
- ・ 防災頭巾よりもヘルメット
- ・ 自分の体重の4倍はあぶない
- ・ 落ちてこない 倒れてこない 移動してこない
- ・ 足元の危険 靴は大切

必要な知識と情報

- ・ 東金市から配布された避難場所や救護場所
- ・ いろいろなハザードマップや過去の災害や事故等(津波 海まで8キロ 海拔8M 火事 火山 水害 崖崩れ危険箇所 文化会館 交通事故 セブンの交差点 プールの入口 犯罪など)
- ・ 救急法
- ・ 災害に関するメール配信 ラジオ 無線

備え

- ・ 電気 水や食料 トイレ 物資 人(誰が何をできる人なのか)
- ・ 気持ち 姿勢(日本は災害大国)
- ・ ベストより ベターな判断をする「ながら」の練習(サッカーもそう 結果得点になれば それが正解 結果命が助かれば それが正解)
- ・ 話をちゃんと聞くこと 自分の思いを伝えること

7.27(土)防災をテーマとした地域との交流
PTAが主催 地域の子供会とボランティア
部会 本校児童生徒保護者 職員
約100名の参加



避難所長挨拶（区長さんが所用で欠席のため教頭先生が避難所長になりました）

「テントもしっかり立てられたし、カレーも美味しかったし、後片付けもあっという間に終わったし、ほんとに助かりました。時間も15分も早く終わりました。やはり、一人じゃなく、みんなが集まると力になるんだということを感じました。」

PTA会長挨拶

「実際の避難所開設では、かなり緊迫した状態で行うことになると思います。この暑さの中、熱中症等にもならず、こういう時でも冷静にやれば、きちんとできるということです。皆さんのお家の方でも災害にあった場合、冷静に行動していただくことを、普段より心がけていただければと思います。」

PTA厚生部挨拶

「防災についての意識が高まり、また、防災について考えるよいきかけになったのではないのでしょうか。地域の方、先生方ご協力ありがとうございました。」

子供会保護者

「昨年も参加しましたが、今年の方が、内容が濃いと感じました。皆も地域の方々と仲良くなれたのではないかと思います。私たちも、学校の中の様子や、どのような方々がいらっしゃるのかがわかって、とてもよかったですと思います。ありがとうございました。」

子供会代表



「皆で頑張ったから、カレー美味しかったです。」

地域のボランティア部会長

「普段は、長寿会の行事のお手伝いをしたり、地域のゴミ拾い活動をしたりしています。今日は、皆さんのために、カレーのご飯を薪で焚きました。最初よりもだんだん上手になって、最後が一番おいしいご飯が炊けました。練習とか訓練は、回数を重ねればだんだん上手になり、短時間でできるようになるのだと思いました。災害に備えるための訓練は、とても大事だなと思いました。」

児童生徒代表

「カレーライスが美味しかったです。」「テントを張る仕事をがんばりました。」「非常食を皆に配りました。パンの非常食がおいしかったです。いろいろな非常食があることが分かりました。」



【避難者カードの色分け】

避難者の集計表のイメージ。表には「避難所名簿 集計表」とあり、以下の表が示されています。

避難所名	性別	児童生徒・高齢者	行旅・難民	%
正 中 学 校				
小 学 部				
中 学 部				
高 等 学 校				
計				

【避難者の集計表】

4 - 1 - 2 全校児童生徒防災集会～あたりまえ体操を長寿会と～

防災をテーマとした地域との交流

防災をテーマとした地域との交流 全校防災集会10/4

- ・あたりまえ防災♪を全校&地域で♪
- ・ゲーム形式なので 小学部は避難グッズを「ゲットー!!」と達成感 そして全校集会の場で発表の経験
- ・「頭を守って」「ダンゴムシのポーズで」という報告が増えた
- ・「事務室から出て建物から離れて避難しました」「ブレイルームだったのでガラスから離れて部屋の中央に避難しました」 避難行動もより具体的に
- ・「3回目の参加です。上手に避難できるようになってきています。訓練を積み重ねてください。」





この取り組みは、児童生徒会が主催をしています。三年目となりますが、地域の長寿会・ボランティア部会の方々が毎年楽しみに参加してくれています。全校児童生徒集会では、6月に交通安全集会も行いました。毎回、姉妹学級を組んで取り組んでいます。姉妹学級に地域の方が加わり、校内散策に行きますが、途中で緊急地震速報が流れます。廊下、階段、教室、体育館、どこで緊急地震速報が流れるかわかりません。どこで、どのように避難したかを発表し合うことで、お互いの体験を共有することができます。

4 - 1 - 3 公民館で防災交流～仮設住宅の方を招いて～

防災をテーマとした地域との交流

防災をテーマとした地域との交流 とは、学校を会場として行っていますが、学校は東金市の一次避難場所に指定されていることもあり、地域の方に学校内の様子を知ってもらうことも目的の一つになっています。

防災をテーマとした地域との交流 は、地域の公民館で行っていますが、昨年、今年度と千葉テレビのニュースに取り上げていただいています。県立の学校が地域に出て交流をすることが、地域とのつながりを深めていくことにつながっているのだと思います。足の具合が悪く、交流に参加できなかった長寿会の会長さんも、交流 では、「家から近いから」と参加をしていただくことができました。

旭市・飯岡地区の仮設住宅の方々は、城西国際大学福祉総合学部とのつながりから、知り合うことができました。本校で学生の介護等体験を受け入れたり、大学で高等部の生徒が産業現場等における実習を行わせていただいたりという、普段からのつながりの結果だと思っています。

地域の防災力を高めるためには、お互いの資源（物）を知り、有効に使い合って、コミュニケーションを大切にした交流を積み重ねていくことが大切なのだと思います。

12月18日(水)10:15～12:30
防災をテーマとした地域との交流③

- ・ 地域:長寿会16ボランティア部会9公民館長1
- ・ 旭飯岡仮設住宅関係者:シスターズ&ボーイズ4 送迎協力(ロザリオの聖母会職員)2
- ・ 城西国際大学福祉総合学部:学生8職員2
- ・ 東金特別支援学校:生徒17職員12 合計71人
- ・ 10代から90代(最高齢94)までの交流



<発表内容>「あたりまえ体操アンコール♪♪」

- ・ 長寿会 宮城餅つき唄 ドンパン節 九十九里大漁小遣り唄(県大会優勝)
- ・ 高等部3年 どんぐりころころ(手遊び歌)
- ・ 大学3年生 軍手人形劇 祭 団結 防災
- ・ 旭飯岡シスターズ&ボーイズ 操り鳥ダンス
- ・ 全員 あたりまえ体操/COWCOW ぼうさい編



人形劇には 高等部が作った パーティション



仮設住宅の同 窓会 あれから 2年9カ月

<感想>

- ・楽しい思い出ができた あたりまえ体操を覚えてほしい 初めて話せて嬉しかった(本校)
- ・皆が元気で自分も元気になった 人形劇が笑ってもらえてよかった 皆と話せて発表する場をもらえてよかった(学生)
- ・招いていただき嬉しい 長寿会や学生の元気を見て頑張ろうと思った また来れると嬉しい(旭飯岡)
- ・10代~90代まで いろんな人が集まってくれて楽しい時間が過ごせた(地域)



4 - 2 地域貢献型の防災教育とは

23、24年度と、危機管理教育研究所の国崎信江氏に継続してアドバイスをさせていただきました。地域のためになる活動を学校で取り組むことを、「地域貢献型の防災教育」と教えていただきました。不要になったシートを集めて包帯を作り、地域の防災倉庫に備蓄してもらうというような活動に取り組んでいる地域があると聞きました。「防災マルチパーティション」は、学校で日常に使っているものが、災害時には、学校に避難してきた地域の方々のために役立つというものです。

4 - 2 - 1 防災マルチパーティションの開発と作成

「防災マルチパーティション作成のポイント」

普段の学習で使っているものを、有事の際には避難場所に持っていくことで、児童生徒が安心して過ごせるのではないかと、また、デザイン等を工夫することで地域の方も落ちつけるのではないかとという観点で考えました。

- ・デザインや色は、過ごしやすさや安心できるイメージを意識して、多数決や相談で決める。
- ・木材、布、プラスチック段ボール等、強度や重さ、加工のしやすさ等を検討する。
- ・サイズや収納のしやすさを検討する。
- ・作成は、学年縦割りグループの美術の授業で行い、継続性が保てるようにする。

教室で使用するサイズ

- ・集中できるように
児童生徒の視覚情報を遮断
教師は上から見て
様子が分かる高さ

高さ115cm
横幅90cm



遊びや運動で使用するサイズ

- ・三輪車等の乗り物に乗った状態で
児童の頭が見える

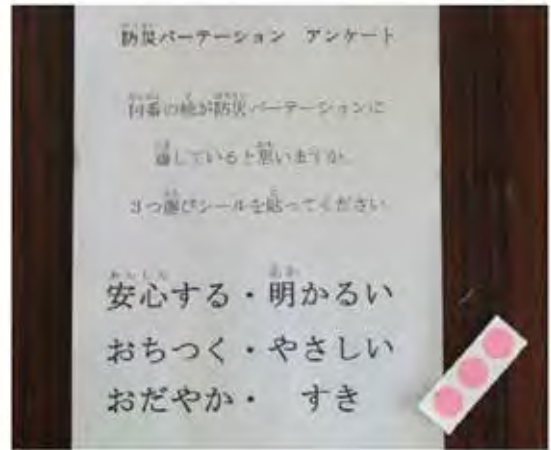
高さ78cm
横幅180cm

<有事には>

- ・片面の布を取り外すと
高さが倍になる
- ・布は
いろいろな物に使える



防災マルチパーテーションの下絵



体育や遊び用のパーテーション完成

授業用パーテーション



色合いを考えた生徒はデザインを考えた生徒とは別

布のパーテーション
担架に 包帯に 高さが倍に



高等部が作製したパーティションが
小学部の教室で



学習に

裏面はタオル掛け



<学校キャラクターヤーマン>

小学部の日常で使用しているパーティションのサイズを基本として作成したことで、小学部と高等部の交流も図ることができました。

4 - 2 - 2 学区の幼稚園との連携

学区にある九十九里町立片貝幼稚園は、海から近く防災教育に熱心です。交流を図るうちに、パーティションは、園児が落ちくためのスペースを作ったり、ままごと遊びに使ったりすることができるということがわかりました。作成するにあたって端材となっていたものが、園児のサイズにピッタリであるということで、作成したパーティションを幼稚園に届けるという交流が生まれました。

幼稚園用のパーティションは、災害の啓発に使えるような絵も描きました。

軽量化の成功(プラダンの密度など)
グループで話し合いながらの色塗り
端材は 幼稚園サイズ(片貝幼稚園へ)



4 - 3 防災の日常化に向けての授業づくり(できる・わかる・自分から)

23～25年度にかけて、以下の授業に取り組みました。

【小、中学部の生活単元学習・特別活動】

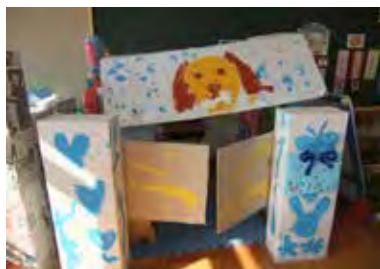
「災害に備えよう～自分の身を守るためにできること～」

防災リュックの中に入っているものは？ その利用方法は？

足りないものを買に行こう 非常持ち出し袋作り

AEDについて知ろう 置き場所は？

「自分たちのお家を作ろう！」丈夫な家するには？



【家庭科（調理実習）】

レトルト食品や缶詰の利用

【高等部作業学習製品（縫工班）】

防災リュック

ひえひえストール（節電対策製品）



【高等部（特別活動）】23年度

防災授業 危機管理教育研究所 国崎信江先生より

「災害から自分で自分の身を守るために」

- ・電車に乗っている時の体の向きは進行方向がよい
- ・体重の4倍ある物は危ない
- ・災害伝言ダイヤル171について

【高等部自力通学生徒集会（部活動）】

震災時を思い出しながらブレインストーミング

具体的な場面設定でロールプレイング

災害時に必要となるコミュニケーション手段の獲得



【高等部自力通学生徒集会（部活動 進路タイム）】

進路タイム（学年毎にグループで実施 特別活動・自立活動）

「自分の意見を言おう！友だちの意見から学ぼう！～夏休み・冬休みに関連させて～」人間関係の形成やコミュニケーションについて進路タイムで学習し普段の生活やその他の学習で活かす



【高等部臨時防災安全集会】

県内で竜巻被害があった翌日に実施

竜巻からの身の守り方 雷からの身の守り方

前兆（こんな時にくるよ！！）

国崎信江先生に教わった頭の守り方の復習

【全校集会・音楽】「あたりまえぼうさい」プロジェクト！！

「あたりまえ体操 / COWCOW」ぼうさい編

あたりまえー あたりまえー あたりまえぼうさい

地震のときはー「だんごむし！」 あたりまえぼうさい

忘れちゃいけないー「あたまをまもる！」あたりまえぼうさい

逃げるときに大切なのはー「くつ！」あたりまえぼうさい

海の近くで地震がきたら

「とにかくにげっぺ！（石巻の言葉）」あたりまえぼうさい



どこにげっぺー「はやく！たかく！」あたりまえぼうさい
 「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」「命を守る」
 あたりまえ あたりまえ あたりまえぼうさい（ちゃんちゃん）
 「がんばっぺーす！！（宮古の言葉）」

【国語・美術】絵本作り

あたりまえぼうさい の詞を使って

パーティションの絵を使って



高等部選択情報<防災クイズ>



4 - 3 - 1 防災コミュニケーション

「防災カルタをしよう」

写真カードを使ったクイズ形式でコミュニケーションを高めながら楽しく防災を学ぶ



「防災安全集会」

高等部では学期末や臨時（大きな災害や事故があったとき）に集会をしています。交通安全、災害安全、生活安全の内容について、普段の生活や家庭生活、卒業後の生活に関連させています。

防災安全 生徒指導集会 高等部 2学期 12/11

- ☆いつものやくそく
- 自分の意見をもつ 話す
- 他の人の話を聞く

寄宿舎(地震・火災)家では?外では?



- ・ 道路交通法改正 自転車は歩道がない道路では左側に限定
とにかく左を!
ヘルメットも!

- ・ 自転車は
2列で並んで
走ってよい?



- どこでおきるかわからない
がっこう いえ どうろ でんしゃ
- どんなさいがいがおきるかわからない
じしん たつまき つなみ おお雨 かじ
- ◎きをつけることは
 - ・おちてくるものない?
 - ・たおれてくるものない?
 - ・いどうしてくるものない?
 そして あんぜんなところに にげ
たいせつなところをまもり ほうれんそう

4 - 3 - 2 避難するための体力づくり (スポーツベンチ・ジョギング)

【体育】『生きる力』を育む防災教育の展開 『健やかな体』
 中学部 「スポーツベンチ」 雨天時に踏み台昇降運動
 普段は集会等でベンチに 来年度は避難所開設訓練で活躍予定



高等部 「わかる・できる・自分から」取り組む体力づくり

- ・ 皆と一緒に行動し集団行動のルールを学ぶ (道徳)
- ・ 道具を準備したり片付けたりする (キャリア教育)



< グラウンドを1周走る毎に洗濯バサミをケースに入れる 目標は 周!! >

4 - 4 防災教育講演会と防災教育交流会（広い学区の有効活用）

地域の防災力を高めるための連携や防災に関する情報の共有と発信について、みんなで考える機会を作りたいと考え、「防災ユニバーサルねっと」と称して、様々な形態のネットワーク会議等を実施してきました。概要については、「3 - 1 防災ユニバーサルねっとの成り立ち」で説明をさせていただきました。

4 - 4 - 1 東金地域防災教育ネットワーク会議（防災教育講演会）

23年度は、「担当者連絡会議」と称して、県教育委員会、東金市（総務課と消防団）、東金市教育委員会、東金市社会福祉協議会、北之幸谷区長が本校に集まって年5回の情報交換をしました。また、東金文化会館にて「防災シンポジウム ～みんなで考えよう地域防災～」の実施をしました。地域の方々、自主防災会、教育関係（保育所から大学まで）、福祉関係、県・市議会等からの参加がありました。

地元災害の歴史「元禄地震・大津波等から学ぶ防災について」

元県立東金高等学校長 郷土史・元禄地震に関する調査研究等多数 古山 豊 氏

最新の取り組みから「想定外を生き抜く力 命を守る主体的姿勢を与えた釜石市津波防災教育に学ぶ」

群馬大学大学院 教授 片田 敏孝 氏

地元の被災地支援報告から「山武市の被災地支援ボランティア活動から」

山武市社会福祉協議会 ボランティア・市民活動センター 須田 高 氏

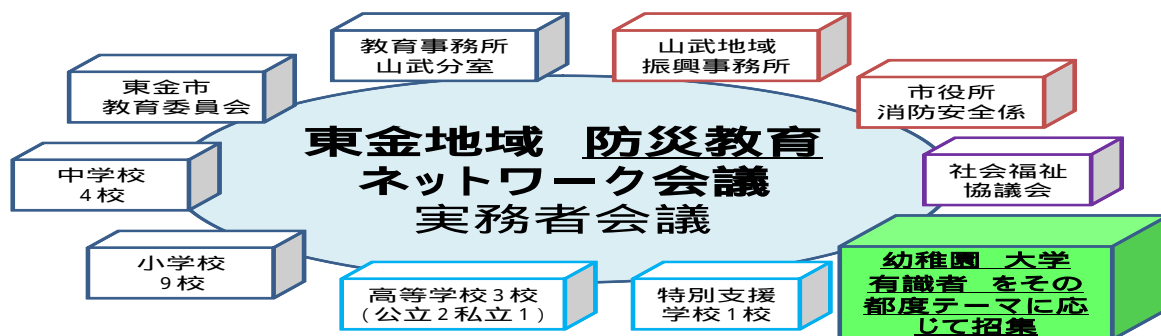
シンポジウム 震災からの困ったことや考えたこと、問題点を出し合っただけで考えていきました。

また、「九十九里版津波避難に関するガイドライン」に示された、防災教育の推進や継続、津波避難訓練の実施に向けた、行政・福祉・教育等の実務者会議の実施もしました。

24年度は、「東金地域防災教育ネットワーク会議」と称して8月と1月の年2回実施しました。「防災教育講演会」は、次の内容で8月に実施しました。

- ・ 報告 高等部 生徒会役員生徒 「今からできることを探しに東北へ」
- ・ 講演 東京大学地震研究所 大木聖子 氏 「命を守るために地震について知っておくこと」
- ・ 講演 危機管理教育研究所 国崎信江 氏 「地域と連携した家庭における防災教育」

各関係機関の 防災担当者が集まり情報交換をし 地域の防災教育のレベルアップを図る



また、「九十九里版津波避難に関するガイドライン」の実務者会議で作られたヘルプカードの啓発に向けて、ヘルプカード推進会議が5回行われました。山武健康福祉センター（保健所）、さんぶエリアネット（中核地域生活支援センター、自立支援協議会）、城西国際大学総合福祉学部、東金特別支援学校の代表者が集まり、以下の内容について検討しました。

- ・ ヘルプカードの普及に向けて、障害別（各障害者団体との連携）のヘルプカードの作成や紹介
- ・ 要援護者名簿登録等の実施状況の確認と推進のための方策の検討

・「災害時要援護者の避難を考える講演会・グループ討議」の実施

災害時要援護者の避難を考える講演会・グループ討議では、26団体、57名の参加がありました（幼稚園、大学（福祉）、市役所（総務課、福祉課）、広域行政、保健所、社会福祉協議会、各障害者団体（自閉症、身体障害者、精神障害者など）親の会、視覚障害者本人 等）

25年度は、情報交換及び地域の防災教育のレベルアップを図るという目的を明確にして、昨年度からの積み重ねという意味を込めて「第3回防災教育ネットワーク会議」と称して実施をしました（市内の小中高等学校、市役所、社会福祉協議会、教育委員会、教育事務所、地域振興事務所、大学、幼稚園等から25名参加）。実施にあたっては、宮城県立光明支援学校の山口裕之氏よりアドバイスいただき、ワールドカフェ形式にて実施をしました。リラックスしたムードの中で、活発な意見交換がなされ、各グループでキーワードを発表し、情報の共有を図りました。東日本大震災の記憶は薄れつつあるものの、話し合いのきっかけや話し合いを進めていく中では、東日本大震災の経験が多く語られました。

<グループから出たキーワード>

- 自助・共助（支え合い）
- 日常防災 経験は薄らぐ
- 地域差 防災意識の継続持続
- このような会議の場を作る
- 災害時に意識する共通事項



防災教育講演会では、「～防災の日常化に向けて東日本大震災から学ぶ～」というテーマで、引き続き山口裕之氏にお話をいただきました。防災教育の日常化に向けて「災害時の心理」「生きる力と防災教育の関連」「コミュニケーション指導の大切さ」「日常化＝習慣化『できた』『している』に」「タイミングの重要性と見通し」「100年先の命を守るために」「家庭における日常防災」「結論より議論することの大切さ」など、たくさんのお話をいただきました。

山口先生は、情報の共有・発信のために、「防災主任の学習室 <http://hiroy.kir.jp/bosai/>」の「学習机」内で、本校での講演記録をまとめてくださっています。ぜひ、ご覧いただきたいと思います。

4 - 4 - 2 災害支援を考える集い

4 - 4 - 1で書かれている「九十九里版津波避難に関するガイドライン」の実務者会議（23年度）や「災害時要援護者の避難を考える講演会・グループ討議」（24年度）を、福祉関係機関のネットワーク会議として形にしたいという関係者の思いから、25年度は、実行委員会を組織して打合せを重ねました。24年度に実施をした「災害時要援護者の避難を考える講演会・グループ討議」を1回目とし、今年度は「第2回災害支援を考える集い」として行いました。グループ討議は、ワールドカフェ形式にて実施をしました。実行委員会の協力団体は次の通りです。

（順不同）山武地域振興事務所 山武健康福祉センター 山武市・東金市社会福祉協議会 社会福祉法人ワーナーホーム 城西国際大学 長生山武地区自閉症協会 東金特別支援学校PTA 等
報告書は1,000部作成し、関係機関に配布しました。以下に抜粋で掲載します。

『災害支援を考える集い』報告

昨年10月、ヘルプカードの普及啓発を目的とした山武健康福祉センター主催による「災害時要援護者の避難を考える」講演会及びグループワークでは、多くの関係団体、行政関係者などのご参加を頂き、熱心な意見交換が行われました。第二次千葉県地域福祉支援計画の一部改定においても、「災害時要援護者対策等の市町村計画策定の促進」「災害時におけるボランティアの養成等」が追加されております。

災害時、だれもが要援護者になり得る、だれもが支援者になり得る。そうした認識から、私たちは継続した取り組みが必要と考え、今年度は実行委員会を結成し、千葉県福祉人材確保・定着対策事業として、「第2回災害支援を考える集い」を開催することになりました。いろいろな立場で災害支援について考えることができるように、基調講演に加えて今年度もグループワークを行い、行政・民間機関・住民などのそれぞれの立場で、災害支援に対してできること、やるべきことを考えました。集いのまとめと、実行委員会からの提言について報告します。

【「災害支援を考える集い」の概要】

日 時：平成25年12月4日（水）13：00～16：30

場 所：山武健康福祉センター3階 大会議室

参加者：山武地域にお住まいの方、防災・保健・福祉・教育関係機関より53名

基調講演：「いのちをまもる 災害支援」講師：国崎 信江 氏

グループワーク（ワールドカフェ形式）

：「みんなで考える！いろいろな立場で災害支援を考えよう」

【基調講演】「いのちをまもる 災害支援」講師：国崎 信江 氏

『災害時要配慮者は特別な人ではない』

- ・要援護者が安心して暮らせるまちはだれもが安心して暮らせるまちである。
- ・地域にいるそれぞれの立場の人がどのようなことに困るのか考えてみましょう。

『自助なくして災害支援なし』

- ・地域住民の個の自助力を高める

『災害に強い建物に住むことの重要性』

- ・阪神淡路大震災では十数秒の揺れで10万5千棟あまりの建物が一瞬で全壊。5502人が建物や家具の下敷きで亡くなった。ほとんどの人が即死だった。

『負傷しても軽傷にとどめることが重要』

- ・救急車はすぐには来ない 東金市では救急車の台数2台
- ・応急手当の講習の受講や救急箱の見直し（応急手当品の充実）
- ・トリアージの知識（トリアージ：指で爪を押さえて、はなす 2秒以内に赤みが戻らなければ重傷）

『給食施設の災害対応策』

- ・常に喫食者のいる施設（病院・介護老人/児童/心身障害者/福祉施設）で生活し介護や養護を必要とする対象者

『被災地における犯罪を知る』

- ・強姦・暴行・わいせつ ・夜間のトイレ（トイレが男女共同の恐怖）
- ・見知らぬ住民同士が雑魚寝する恐怖 ・着替える場所が無い ・下着を干す場所が無い

『火災の保障と初期消火の重要性』

- ・樹木と空間が火を止める ・耐火性の住宅である ・消火器具を備えている ・室内には難燃性のものを多く取り入れている ・避難の際にはブレーカーを落とす

【グループワーク（ワールドカフェ形式）】

「みんなで考える！いろいろな立場で災害支援を考えよう」

ワールドカフェとは？（kotobank.jp より）：“カフェ”にいるようなリラックスした雰囲気の中、参加者が少人数に分かれたテーブルで自由に対話を行い、ときどき他のテーブルメンバーをシャッフルしながら話し合いを発展させていくこと。相互理解を深め、集合知を創出していく組織開発の手法です。その考え方や方法論は世界中に普及し、ビジネスや市民活動、まちづくり、教育などさまざま

な分野で活用が進められています。

各グループで話し合った内容とキーワード

グループ1 自分と身近な人の命を守るために キーワード：事前想定・安全な場所

・危機意識。家庭での決めごと。人間関係づくり。プライベートでの訓練、サバイバル。安否確認の方法。事前の想定。安全な場所の確保。仕事先の人々を守っている間に家族を守れない。家族がバラバラの時の想定。避難と言われても弱者は逃げられない。住む場所の検討。

グループ2 自分と身近な人の命を守るために キーワード：近所 心の想定外は経験で対応できる

・普段のお付き合い。経験から学ぶ。情報伝達の難しさ。葉がほしかった。自分の命を守るための最低限の知識。仕事で帰宅できない。医療情報。自分の意識を変えて家族で共有。残された家族の不安。想定外。障がいのある人の支援。声を出す大切さ。判断力。自分から助けを求めるスキル、「たすけてカード」の活用。地域差。

グループ3 自分と身近な人の命を守るために キーワード：目の前のことをやる 知ってもらおう努力

・備蓄品と持ち出し品を分ける。発電機を買った。風化してきている。食料は何とかなるが、トイレは大変。障がい等を知ってもらおう努力。避難経路の確認。どこで災害にあうか分からない(靴)。ペットは家族扱い。おむつの備え。目の前のことをやる。どうやって子どもたちを親元へ帰すか。地震体験車が県に1台ある。車の中で長期間過ごすことで体調が悪くなることもある。

グループ4 助け合うためにできること キーワード：日ごろの備え 地域のコミュニケーション

・他職種の定期的な交流。地元行事やイベント、祭り等が盛んな地域は防災もしっかりしている。住民同士の新しい形の共助。自分の家で三日間暮らせる備え。地域での情報を知る。皆の意識を高めること。できること、できないことがあることを知る。消防団の参集には時間がかかる。訓練や点検の大切さ。助け合いとコミュニケーション。

グループ5 助け合うためにできること キーワード：近所付き合い 意識や情報の共有

・近所で助け合う。判断をするための情報、そして共有。意識の共有。避難生活時の不安の解消。事前の訓練やシュミレーション。ヘルパーの巡回。動けない高齢者の救助方法。ろうそくの対応は火事が心配。学校や施設から帰さないための備え。障がいがある子の慣れた場所を避難所とする。前もっての決めごと。コミュニケーション。自分から周りに輪を広げていく。

グループ6 助け合うためにできること キーワード：地域での訓練

・自分を変える。地域の防災。家庭内の危険個所のチェック。かかりつけ医からの処方箋FAX。個人情報の問題。沿岸部は高台がなく、どこへ逃げたらよいか、幼稚園生は歩くのも限度がある。マニュアル作り。映像の活用。予告をしない訓練の実施。交流、集まりへの参加、顔売る。障がい者等の手帳の把握。病院の情報。地域の人に支援が必要であることをどう伝えるか。

グループ7 もしもあなたが要援護者の立場だったら キーワード：障がいの状況を理解してもらう

・支援をする側の余裕。世代間のコミュニケーション。祭りの際に子どもの情報の提供。被災直後は、誰がどこにいるか分からない。災害時は余裕がなくなる。見た目には分からない障がい。いつ、要援護者になるかもしれない。顔が見える関係。近所、犬の散歩。助け合う日本の素晴らしい文化。話し合いの結果を皆さんに伝える方法。

グループ8 もしもあなたが要援護者の立場だったら キーワード：意識転換

・自分の苦手を公表して支援してもらう。福祉避難所。知識がない人でも分かる要援護者のマーク。ホイッスル、ブザー。要援護者でも自助は必要。自分たちで何とかできる意識としくみづくり。防災教育が必要。災害はネガティブな意識から、助けてもらえないかもという視点。頭を守るための用意。回覧板、あいさつ。外に逃げた方が危険だが、自宅にいるより助けてもらえるのでは。

グループ9 もしもあなたが要援護者の立場だったら キーワード：日ごろの備え 今でしょ！

・自分の存在を知ってもらう。自分が要援護者になるかもという視点はなかった。やすらぎのスペース。要援護者がいる家族も要援護者になる可能性。ひきこもりやうつの方は自分から叫べない、声をかけて

くれる人の必要性。伝えられない、伝えることができないことが理解されない。災害時のいろいろなパターンを想定し、話し合っておく。災害は忘れないうちにやってくる。

【まとめ】

- ・震災後、希薄化してきている参加者の防災意識を再認識させる機会となった。
- ・団体や所属にこだわらず、現実可能な限りの自助力（物資や行動力）を高めることの大切さがわかった。それからの共助となる。
- ・いろいろな分野の人と話ができたことがよかった。市町単位でもなく、分野の中だけでもなく、そこに大きな意味があった。これをきっかけに団体間の相互の理解と認識ができるとよい。また、参加者が所属に持ち帰ってもらうことで今後の事業、活動に反映させてほしい。
- ・所属機関としての立場より、一個人として意見を言い合える関係が、ワールドカフェスタイルのグループワークを用いることで感じられた。
- ・「もしあなたが要援護者の立場だったら」のグループワークでは、要援護者の立場を再確認でき、勉強になった。
- ・要援護者が個々に抱える課題は、それぞれ違うことを相互に理解することが大切である。
- ・当事者（要援護者）の声を聞き合える場として今後も期待される。
- ・行政区画・官民の枠を越えて、実行委員会が発足し、同じ考えを持って企画・実行・振り返りができたことで、地域と機関の結びつきを強めることができた。

自助力UP！3日間生きる残るための備えを！どこまで？どこまでも！！

最悪の事態を想定した危機管理が必要！それには「震度6」を想定した備え・訓練が必要！！

避難しなくても良い方法を考える(自宅の強化と備蓄の充実)！

実行委員会より提言

継続的に多分野・多世代の方々が集い、災害対策（支援）について考える場を作り、官民協働による災害に強い地域づくり・街づくりを目指した活動を充実させよう。

4 - 5 学校安全計画と防災教育

学校安全教育に関する年間指導計画の中に防災教育の内容を明記し、それを教育課程に組み込んでいきます。災害はいつ起こるか分からないことから避難訓練等は、児童生徒の生活が落ちつかない中ですが、できるだけ1学期中に実施するようにしています。

4 - 5 - 1 安全教育確認研修

23年度は3学期、24年度は1学期に引き渡し訓練を行いました。25年度は、授業参観や個別面談、運動会等で5月中を目標に、災害時情報カード（ に説明）の確認をし、引き渡し訓練は行いませんでした。様々な訓練や研修を積み重ねてきたことで、学校で2～3日待機ができるというイメージ作りができたことと、スクールバスの運行を中止することによる保護者の負担等を考えてのことでした。次年度もカードの確認をしっかりと行うことに重きを置き、引き渡し訓練は行わない予定です。

（ ）災害時情報カード ：引き渡し者を確認するための情報カード

災害時情報カード ：通学に関わる避難場所や連絡先

災害時情報カード ：土日や長期休業中の情報

その他にも、津波想定避難訓練に合わせて、車椅子の児童生徒を3階まで上げ下ろしをする訓練やスクールバスの緊急事故対応訓練と非常口の操作方法の確認、不審者侵入対応研修など、様々な訓練や研修を行っています。

一番の特徴としては、児童生徒を学校に迎える前に進んでいる安全教育確認研修です。安心・安全な学校や授業をつくるために、24年度は4月3日、25年度は4月2日に実施し「避難放送」「経路」「避難場所」「本部設置」「点呼の方法」「学校安全・防災教育の関連について」「火災の対応」「不審者対応」「大地震発生時の対応」「緊急事故対応」「行方不明時の対応」「スクールバス運行時の対応」などについて確認と共通理解を図るようにしました。

4 - 5 - 2 防災訓練の工夫と評価 「お・か・し・も」に一工夫

「おもかし??」「違いますよ!」消防署の方があわてていましたが「大丈夫です!」と児童生徒の代表がステージに上がり、正しく並べ直しました。



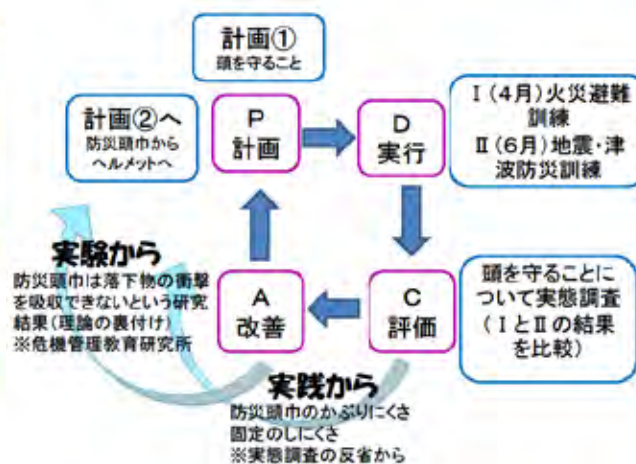
4 - 5 - 3 防災訓練の工夫と評価 頭を守ること実態調査から

頭を守ることと避難行動について、観察による実態調査を行っています。22ページに示すような簡単な調査用紙で担任が行い、その日のうちに提出してもらい集計し、翌日には報告します。年度によって児童生徒の様子は異なるため、毎年実施しています。安心安全な学校生活を送るために必要となる「児童生徒理解」の一助となっています。この調査をきっかけに、車椅子にヘルメットを取り付けるようになりました。



「頭を守ること調査」の段階的ねらい

- 調査① 4月 想定:火災
グラウンド避難
『頭を守ることの意識向上』
- 調査② 6月 想定:地震⇒火災
一次避難二次避難(グラウンド)
『一次:身を隠す(机等)こと
二次:頭を守ることの意識向上』
- 応用Ⅰ 9月 想定:地震⇒津波
一次避難二次(3階)
『一次:身を隠す
二次:頭を守りつつ違う場所へ避難できる』
- 応用Ⅱ 10月 想定⇒地震
一次避難(どこで起こるか分からない)
『一次:階段、廊下、教室等 それぞれの場所で
身を隠す』



防災教育 頭を守ること実態調査 回目

小 中 高 年 組

内容：地震想定避難訓練において

- ・ヘルメット（防災頭巾）をかぶるにあたってどうであったか
- ・机の下にもぐる等、避難行動の対応ができたか

明確でないもの（欠席も含）については予想でカウントをしてください

重複するものがあつた場合には、より優位な方に一つだけカウントしてください

- ・ヘルメット（防災頭巾） 一次避難（机の下）と二次避難を合わせた数です。

内 容	人 数
放送（警報）を聞いて、自分でかぶつた	
教師の言葉の指示でかぶつた	
教師の身振りと言葉の指示でかぶつた	
友達がかぶるのを見てかぶつた	
教師がかぶるのを見てかぶつた	
教師が示したカードや写真を見てかぶつた	
教師が渡すとかぶつた	
教師がかぶせた（そのままかぶれた）	
教師がかぶせた（嫌がるが押さえながら避難）	
パニック等を起こし、かぶせることができなかった	

- ・避難行動 一次避難

内 容		人 数
自分で	机の下にもぐつた（頭巾、メットかぶらず）	
	机の下にもぐり 防災頭巾（ヘルメット）もかぶっていた	
支援で	言葉、身振り、真似て、カード等で 机の下にもぐつた（頭巾、ヘルメットかぶらず）	
	机の下にもぐり 防災頭巾（ヘルメット）もかぶっていた	
教師が移動しての支援が必要だった 手を引いて		
教師が移動しての支援が必要だった 抱きかかえて		
教師が移動しての支援が必要だった 机の下に入れないため（車椅子 こだわり 等）その場で 防災頭巾やヘルメットをかぶせた 防災頭巾やヘルメット以外で頭部を守つたものがあれば教えてください（ ）		

その他、気付いたことや困つたこと、改善したこと等があれば教えてください。

（例）あごひもを自分でできるように練習した。

< 頭を守ること調査 回目 結果より >

- ・ 回目 回目 自分で 32% 19% （教師の見方が厳しく）
- 指示で 51% 62% （これを増やす）
- 教師が移動しての支援 17% 19%

- ・避難行動（机の下等） 調査
 - 自分で 53% 行動で覚えることが大切
 - 指示で 27%
 - 教師が移動しての支援 20%

	小学部	中学部	高等部	計
放送で	1→2	6→1	43→27	50→30
言葉で	9→9	21→20	20→37	50→66
身振りと言葉で	0→3	0→10	3→3	3→16
友だちを見て 教師を見て	0→2	1→0	7→2	8→4
写真等を見て	0	0	0→1	0→1
渡したら	8→1	8→5	1→2	17→8
教師がかぶせた	9→7	8→8	3→6	20→21
教師が押さえた	0→4	1→1	3→3	4→8
かぶれなかった	1→0	0	2→1	3→1
計	28	45	82	155

避難行動調査

	小学部	中学部	高等部	計 24年⇒25
自分で机の下へ	7	12	64	87⇒83
支援で机の下へ(言葉 身振り、カード等)	13	21	8	36⇒42
教師が移動しての支 援①手を引いて	5	6	2	23⇒13
教師が移動しての支 援②抱きかかえ	1	2	3	1⇒6
教師が移動しての支 援③机にもぐれない	2	4	5	15⇒11
計	28	45	82	162⇒155

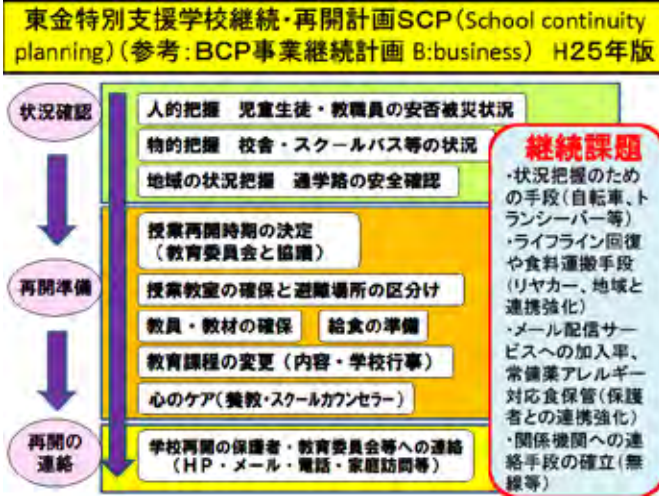
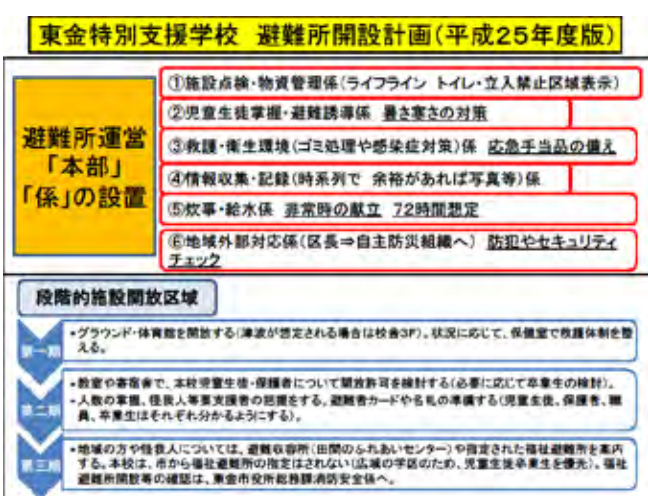
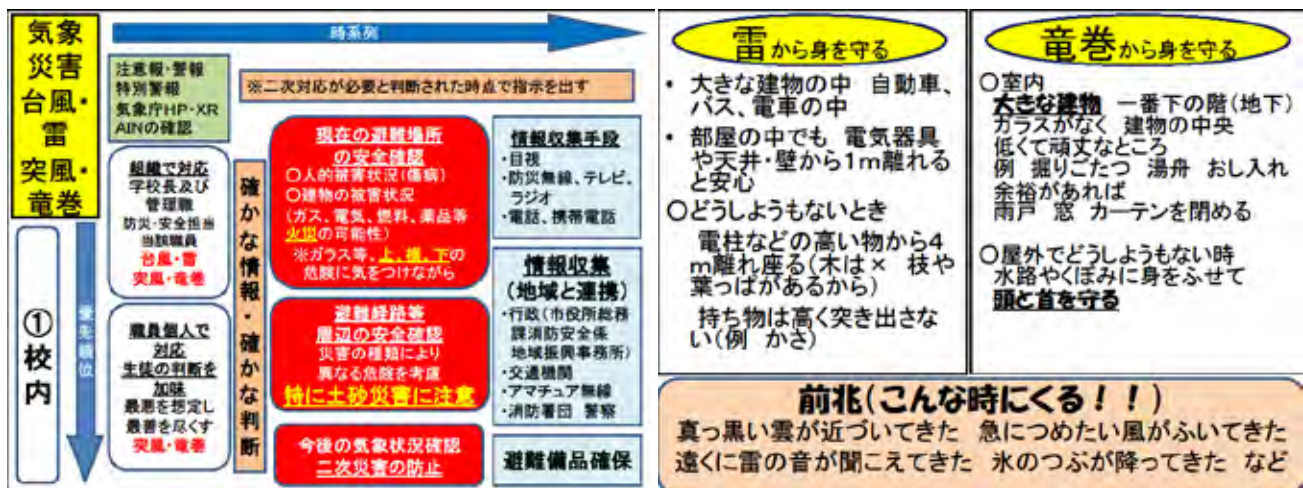
【自由記述から】

- ・事前にあご紐の調整をし、かぶる練習をした。
- ・事前にあご紐を止めることができない生徒がいて支援した。
- ・事前に練習をしたが、違う雰囲気のためか、かぶりたがらない子がいた。
- ・ヘルメットの紐は、目で見えず、手の感覚だけでやらなければならない。
- ・「頭を守って」と言うのと頭に手を持っていくことが、できた生徒がいた。
- ・ヘルメットの前後が分かるように、内側にシールを貼った。
- ・机がなかったら、手で頭を守る、だんご虫になる練習をした。
- ・今回は火災も想定であり、自分からハンカチを出し、口にあてていた生徒もいた。
- ・体育館でも（雨天）消火器の体験ができてよかった。
- ・個人用の児童机にもぐると全体が見えないので、大きな作業テーブルの下にもぐるようにした。
- ・日によって様子に違いがあり、今日とはとても嫌がった。

4 - 5 - 4 災害マニュアルのポンチ絵（簡略に描いた概略の図）

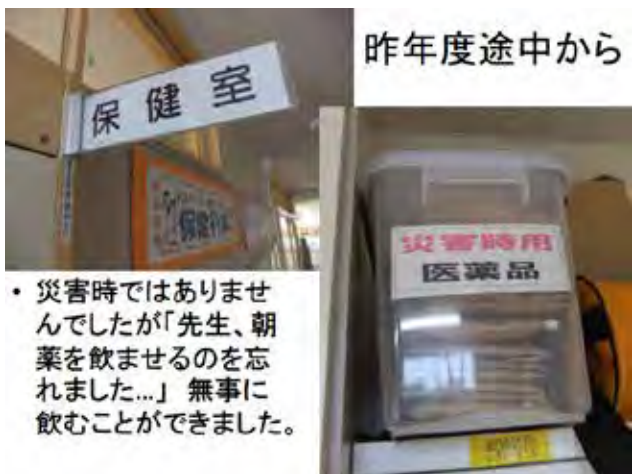
何枚にもなってしまうマニュアルの簡略版を作成しました。今後は、家庭版のマニュアルの作成に取り組み予定です。





4 - 5 - 5 災害時の与薬依頼・災害時情報カード

服薬児童生徒の割合が約35%いることから、昨年度から、使用介助依頼書を作成し、災害時に備えた医薬品の保管をするようにしました。生命にかかわるような、欠かすことのできない薬を預かる(てんかん薬や安定剤など)ようにしています。



・災害時にはありませんでしたが「先生、朝薬を飲ませるのを忘れまして…」無事に飲むことができました。

「4 - 5 - 1 安全教育確認研修」で触れた災害時情報カードは、家庭における防災教育の推進にも役立っています。

災害時情報カードⅡ（登下校）

下は厳重に保管し、災害時以外には使用しません。下は卒業時まで使用します。年度初めに確認をしますか
格をしてください。

小中(高)	児童生徒名	ピ
-------	-------	---

災害時情報カードⅢ（土日や長期休業等）

カードは厳重に保管し、災害時以外には使用しません。を
格をしてください。

庭で十分に話し合ってから提出をしてください（2部作成
名 小中(高) 児童生徒名 芥

避難】 家屋内及びグラウンドや公園の指定一次避難場所
が気を付けること（寝る場所や家具の固定、ヘルメット
ポイント：落ちてこない 倒れてこない 移動してこない

・送迎の方法	(自家用車)
・経路の避難場所	(大網東小学校)
・連絡方法	(携帯電話 まちこ)
・バス停付近避難場所	(大網東小学校)
・連絡方法	(携帯電話 kumi @ezweb.jp)
・自宅からバス停まで の避難場所	()
・連絡方法(本人)	()
・連絡方法(保護者)	()
・事業所との確認内容	()

保護者の勤務地において、震度5弱以上の地震が発生した場合には、引

・勤務先市町村名 (成田市)	・電話番号 (090-34 090-9 0475-
・勤務先名称 ()	
・その他の希望等 (叔母の学校へ向かえに行くのが希望) しきり	

災害時情報カードⅢ（土日や長期休業等） 学校提出用

ご家庭で十分に話し合ってから提出をしてください（2部作成し、1部学校、1部家庭で保管）。

学級名	小中(高)	児童生徒名	
-----	-------	-------	--

【一次避難】 家屋内及びグラウンドや公園の指定一次避難場所
家屋内で気を付けること（寝る場所や家具の固定、ヘルメット常備など）
ポイント：落ちてこない 倒れてこない 移動してこない
車のけな時 → 背座席の真ん中で座るか、テーブルの下に隠れる
動けるとき → 家族と一緒に一斉に外へ逃げる

			
---	---	---	--

家屋外の避難場所の名称や注意点（公園や小学校など）

靴をはいて 前の広場へ逃げる

	
---	--

4 - 6 兵庫県・鹿児島県の防災教育先進校・団体の視察

4 - 6 - 1 阪神淡路大震災から学ぶもの

【NPO法人よろず相談室 ホームページより抜粋】

はじめは、1995年の阪神淡路大震災発生の直後、避難所となった神戸市内のある小学校からでした。活動内容は、今後の生活、不安、悩みについて個人的な相談にのること、「よろず新聞」を作り必要な情報を避難者に届けることを主な柱としました。避難所解消後は、仮設住宅・復興住宅の高齢者のもとへ出向き、信頼関係を築くことを活動の柱としました。「同じ目線で話を聞き」「一人ではない、置き去りにされていない」と伝える訪問活動であり現在も続けています。2007年からは、震災で負傷され後遺症と共に生きておられる震災障害者の方々の支援活動もスタートしました。震災当時、大げがをした人たちが相談できる窓口はなく、震災障害者は孤立していました。震災障害者の当事者や家族が、当時、何を必要としたのか、今どのような支援が必要なのか、そして今後起こりえる大震災に向けてどのような教訓を「発信」できるかは、当事者・支援者等の役割であります。

キーワード：情報の共有と発信 信頼関係の築き 震災障害者

【兵庫県立舞子高等学校】

全国で唯一、「環境防災科」という防災専門学科を設置しています。県内の特別支援学校4校と連携して、身体・知的障害のある児童生徒への防災教育に取り組み始めました。東日本大震災では、災害時要援護者が逃げ遅れる事態が相次ぎ、障害者の総人口に占める死亡者の割合は、全住民の2倍近くに及ぶという被災県の調査結果があります。知的障害の場合、避難を促されるとパニックに陥ることがあり、いかに深刻な事態を伝えるかが課題ということで、特別支援学校が防災知識や避難法を体系的に学びたいと、舞子高校に出前授業を申込みました。しかし、舞子高校も災害時要援護者に特化した防災教育の知識がなく、まずは現状を把握しようと「特別支援学校の防災教育に係る実行員会」を設立しました。実行委員会の中では、親も教師もない自力通学中に災害に遭うケースへの対応も課題とされました。別に、数年前から特別支援学校で、紙芝居や劇、交流を通して防災について考える活動は展開されており、その中で「目は見えないが、口頭でのやりとりは得意。避難所で高齢者の話し相手はできる」などの意見から、特別支援学校の児童生徒が避難所で担える役割についても検討されることになっています。また、今後3年間の取り組みを冊子にして全国の支援学校に伝えるということも検討されています。



キーワード：連携 体系的な学び 避難所で担う役割 自力通学途中の災害

「兵庫県障害児教育諸学校長会」が編集した阪神淡路大震災の記録の中に、避難所に指定されている多くの学校施設には、車椅子用トイレやエレベーター、冷暖房設備設置されておらず、障害者が避難できる場所ではなかったとの記述があります。また、障害のある子どもたちとその家族が、日常的に地域の子どもたちや大人たちと交流し、人間関係が形成されている必要があるとも書かれています。先人の教えから、「できていること」「できていないこと」をもう一度見直し、日常的に防災安全について考えていくことができるような環境作りが必要なのではないかと思えます。



4 - 6 - 2 南海トラフ地震や火山噴火から学ぶもの

【霧島市立大田小学校】

平成24年度より2年間文部科学省「防災モデル実践校」の指定を受けています。緊急地震速報を活用した避難訓練や火山噴火を想定した避難訓練において、气象台等との連携により事後検証を実施しています。検証の中から「たえず声かけをし児童の不安を取り除くことが大切」「様々なパターンを想定し訓練する必要がある（放送機器が使えない、停電したら等）」「家庭でも日ごろから災害に遭遇した時どうしたらよいか話し合っておく必要がある」等の反省が出され、家族防災会議の依頼をアンケート形式で実施しています。家族防災会議の内容は、「緊急避難場所」「最終避難場所」「現段階での安全対策」「今後の安全対策」「災害時における学校への要望」等です。また、水害が原因でしらす台地に発生する土石流や土砂崩れの危険個所の確認のため、5月に集団下校訓練をしています。

キーワード：児童生徒の不安解消 外部機関を交えた事後検証 家庭防災会議

【鹿児島市立東桜島小学校】

グラウンドにある「桜島爆発記念碑」に先人の教訓が書かれており、地震津波等を想定した避難訓練を年4回実施しています。他に、県・市が主催する「桜島火山爆発総合防災訓練」に学校として参加しています。記念碑には、爆発の数日前から地震が頻発したり斜面の崩壊があったり海岸で熱湯がわき出る等の前兆現象（異変）を察知した時は、自分で早く避難することや、避難のための用意が重要であること等が書かれています。



キーワード：先人の教訓から学ぶ 異変を察知するための知識 情報収集

【志布志市立通山小学校】

平成24年度より志布志市防災教育モデル実践事業のモデル校として防災教育を推進しています。防火防災マニュアルの見直しを23年度から随時行っており、市の防災マップをもとにフィールドワークを実施し安全マップに津波に対する避難経路等を書き加えたり、津波の危険がある場合は避難した高台で児童を引き渡すように共通理解したりしています。避難訓練を繰り返し実施するために、教育課程の編成を進め、年7回の避難訓練に加えショート訓練も5回実施しています。



キーワード：マニュアルの見直し 教育課程への位置付け フィールドワーク

どちらの小学校にも、支援が必要な児童はいるものの、避難訓練をする際に特に配慮をしなくても皆と一緒に行動できているとのことでした。普段の授業や行事での交流によって、よい関係が築かれ安心して取り組んでいるのだと感じました。

5 総括

5 - 1 成果

車椅子を使用している児童生徒の自立活動（身体の動き）で、教師におぶられたり抱きかかえられたりするための姿勢づくりや、過敏な感覚を和らげる（環境の把握）ことは、スムーズな避難をする際には大切なことであり、防災教育の内容と関連させることができます。そしてそれは、児童生徒と教師の共助の関係を生むことにもつながります。東日本大震災では、車椅子から自力で降りて2階にはい上がって津波から逃れたという事例があると聞きました。また、コミュニケーションの指導では、発信する力を高めることを大切にしてきましたが、自助の力を高めながら、共助の意識も育むことができました。

全校児童生徒集会では姉妹学級を組み、長寿会を招いて防災集会をしましたが、緊急地震速報が流れた際には、高等部の生徒が自分の頭を押さえながら小学部の児童の頭を守ったり、中学部の生徒が長寿会の方のために椅子を引き出して、机の下に招き入れたりするなど、共助の姿が見られました。

それらのことから、授業や行事を通して、全ての児童生徒に防災教育ができることを示すことができたと考えます。

小学部の防災教育の目標は、「遊びや音楽の中で十分に身体を動かすことができるようになる」「帽子や靴の着脱をできるだけ早くできるようにする」と示していますが、先も述べたように、防災教育の目標や内容は、どの教科領域、行事にも関連させることができます。防災教育の目標は、学校安全計画に組み入れて作成されていますが、それが教育課程ともつながり、学校安全や安全教育全体の体系的な指導につなげることができたことは、本校の大きな成果です。

防災マルチパーティションは、普段は小学部の児童が集中して授業ができるように使用し、有事に学校が避難所になった際には、体育館等で地域の方々のために使われることを目的に高等部の選択美術で

作成しましたが、作成に携わった生徒が「私たちの作った物が、地域のためになると思うと嬉しい」と話していました。これは、「地域貢献型の防災教育」ということで、危機管理アドバイザーの国崎信江氏から教わったことにつながっていると思います。一つの授業が、学校内を地域をもつなぐことができるという視点をもつことができました。

「防災ユニバーサルねっと」と称しスタートした、関係機関の縦系を学校が横系でつなぐということをイメージしたネットワーク作りでは、「東金地域防災教育ネットワーク会議」や「災害支援を考える集い」として、形になってきました。山武地域の支援者と要援護者、要援護者同士などをつないできたことが、新聞記事では、「地域防災の中核を担う」と評価していただきました。地域の防災力を高める一助となれたことも、大きな成果の一つです。

5 - 2 課題

計画的に防災備品等を購入し、防災管理の推進をしていくことは大きな課題です。しかし、本校にはまだ、緊急地震速報システムや発電機、人数分の毛布、三日分の食料などは備えきれていません。また、学区が三市三町にわたり、卒業生のニーズも考えられることから、東金市と「福祉避難所」の協定も結んでいません。食料備蓄に関しては、給食室の残米を週末でも多く残すようにしたり、羽釜（鍋）でご飯を炊いたりする体験をしておくことで、有事に児童生徒を守るためのイメージ作りを図っています。寒さ対策としては、寄宿舎の備品や学校中のカーテンを集めたり、スクールバス車内で暖をとったり、職員や地域の方の発電機を借りることも考えています。東金市とは、東金地域防災教育ネットワーク会議や災害支援の集いで意見交換をしながら、お互いができることを模索しています。先立つ資金がなくても、学校や地域には多くの資源があり、つながりや工夫から備えをすることができると思います。

もう一点は、児童生徒・保護者・職員・地域の防災意識の継続と般化が課題となります。東日本大震災から3年が経ち、防災意識の薄れが心配されます。普段の授業や行事を防災教育の視点で見直し、実践してきたことで、3年間継続している授業や行事が多くありますが、1年でなくなってしまう継続できていないものもあります。児童生徒が、無理なく楽しく主体的に防災に関する授業や行事に継続して取り組めるような教育課程を編成するとともに、日本や世界各地で起こる災害を我が事としてとらえ考えていくような話し合いの場づくりや、情報発信を保護者と教師が協力しながら地域に向けて行い、地域との連携を更に深め、安心安全な学校づくりを進めていきたいと思えます。

6 おわりに

防災教育チャレンジプランの実践団体として2年間取り組んできましたが、株式会社危機管理教育研究所代表の国崎信江氏、板橋区議会事務局長の鍵屋一氏、兵庫県立舞子高等学校環境防災科長の諏訪清二氏には、今年度も継続して御指導をいただきました。また、防災教育講演会では、宮城県立光明支援学の辻誠一校長の御配慮で山口裕之氏を講師として派遣していただくことができ、防災の日常化に向けて、学校や地域の意識も高まりました。厚く御礼申し上げます。

加えて、東金市総務課消防安全係や消防団や山武地域振興事務所、山武健康福祉センター、警察署、消防署、などの行政機関、千葉県教育委員会、千葉県教育庁東上総教育事務所、東金市教育委員会、東金市内の小中高等学校、九十九里町立片貝幼稚園、城西国際大学などの教育関係機関、中核地域生活支援センターさんぶエリアネット、旭市飯岡のシスターズ&ボーイズ（仮設住宅）などの福祉関係機関や団体、そして、北之幸谷区の長寿会、子供会、ボランティア部会、嶺南地区社会福祉協議会など、地域の協力があった実践であったと思えます。重ねて、御礼申し上げます。

東日本大震災のあとすぐに、北之幸谷区の鈴木弘義区長(23年12月に他界)が、「学校は大丈夫か？」と来校してくれました。地域との炊き出し訓練では、昨年度からPTA厚生部が主催となりましたが、厚生部長が「大きな災害の時には、子どもたちが地域に助けをいただく必要があり、このような交流は

あたりまえ防災安全情報マップ

支援が必要な方への配慮について、みんなで考えてみませんか？



1月
17日 平成7年 阪神淡路大震災
防災とボランティアの日
「**コツコツ防災**」毎月の防災費を決めてみては？

住んでいる地域の災害の可能性は？
地震 津波 火山 竜巻 洪水 崖崩れ 火事や交通事故も気をつけましょう！

2月
21日 昭和43年 えびの地震 (宮崎県)地震⇒集中豪雨⇒崖崩れ
「**費用ゼロ防災**」家具を寝室や廊下など、生命や避難の妨げになる場所に置かないように！

3月
1日～7日 **春季全国火災予防運動**
9日 昭和21年 桜島噴火
11日 平成23年 **東日本大震災**
「**ついで防災**」季節の模様替えや生活環境が変わるタイミングで

「**介護中**」
介護マーク (東金市のHPより)
<http://www.citytogane.chiba.jp/0000001575.html>

「**高齢者・認知症など**」ゆっくり話しくよく聴いて 徘徊や大声を出しても「どうしましたか?」と言える心のゆとり **老眼鏡や「介護マーク」の備え 医療との連携**

4月
1日 昭和43年 日向灘地震 (南海トラフ)
「**スッキリ防災**」物は少なくすっきりと！

【**妊産婦・乳幼児など**】
・プライベートスペースやアレレギーの対応 **衛生面の配慮**
・泣いても大丈夫、くつろげる、連絡がすぐにとれるような**場所の配慮**

○「**避難者カード**」は、山形県で統一されています。避難者カード・ヘルプカードの作成 (千葉県HPより)
<http://www.pref.chiba.lg.jp/kc-sanbu/pres/2012/tsunami-guideine.html>

5月
9日 平成49年 伊豆半島沖地震
28日 昭和58年 日本海中部地震
「**もしも防災**」外出時の備えも

「**外出のかばんの中に**」
ミニライト ホイッスル マスク 救急セット 電池 携帯トイレ 携帯充電器 使い捨てカイロ 身分証明書
必要に応じて アレルギー対応の軽食 常備薬 ヘルプカード・緊急時サポートブック (ご希望の方には、東金特別支援学校でお渡しできます) など

6月
22日 昭和27年 ダイナ台風
27日 昭和36年 梅雨前線豪雨
28日 昭和23年 福井地震
「**一石二鳥防災**」紫外線対策効果のある飛散防止フィルムを窓に 新聞紙は保温効果があり水が流れなくなったトイレにも利用できます

7月
18日 平成12年 三宅島噴火
30日～5日 防災週間
「**防災博士**」近くの学校や公民館などは避難場所? 避難収容所??
避難場所: 一時的に避難し様子を見る
避難収容所: 一時的に滞在できる (備蓄有)

8月
1日 防災の日
大正12年 関東大震災
9日 救急の日
26日 昭和34年 伊勢湾台風
「**やってみる防災**」災害伝言ダイヤル171などの連絡ツールは防災週間にお試しできます

9月
27日 平成23年 新潟・福島豪雨
16日 平成19年 新潟中越沖地震
「**チャレンジ防災**」災害体験やプチ断食体験など経験や体験は心を強くします!

日常的に非常食を食べて、食べたらいよいよ足すと、期限切れのチェックもしなくて済みます。

10月
6日 平成12年 鳥取県西部地震
24日 昭和53年 有珠山泥流災害
「**楽しむ防災**」趣味 (菜園) や特技と防災を結び付ける楽しさを何でも防災力になります!

長期保存水だけでなく、長期保存のカレーやお菓子もあります。

11月
5日 津波防災の日
7日 平成18年 北海道佐呂間町・竜巻災害
9日～15日 **秋季全国火災予防運動**
15日 昭和61年 伊豆大島噴火
「**美味しい防災**」美味しさ! 栄養のバランス! 食べやすさ!

緊急時サポートブック (防災主任の喫茶室)
<http://hirow.kir.jp/bosai/drawer/em-spbook.html>
SOS ファイル (福岡中央特別支援学校)
<http://www.fuku-c.ed.jp/schoolhp/yschuo/>

12月
7日 昭和19年 東南海地震
11日 平成2年 **茂原の竜巻**
17日 昭和62年 **千葉県東方沖地震**
26日 平成16年 スマトラ島沖地震・インド洋大津波
「**大掃除防災**」大掃除は防災のチャンス!

家具やテレビ、冷蔵庫の固定
器具・転倒防止
滑り止めシート
ドア開き防止ストッパー
ガラスの飛散防止フィルム

「制作」千葉県立東金特別支援学校 PTA 「参考・引用」 2014 防災カレンダー：危機管理教育研究所 <http://www.kunizakinobue.com/>
これだけは準備しておきたい!：全国特別支援学校知的障害教育校 PTA 連合会防災部会 <http://www.zenchipren.jp/>

30

**「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性」
～心とからだの変化を学ぼう～**

愛知県立春日台養護学校P T A

平成25年度 調査研究助成事業

「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性」

～心とからだの変化を学ぼう～

愛知県立春日台養護学校

【 目 次 】

1	はじめに	1
2	愛知県立春日台養護学校の概要	2
3	PTAの役割とその現状	3
4	調査研究事業年間計画	4
5	事業の詳細	
(1)	PTA座談会(情報交換会)	5
(2)	演劇等鑑賞会(演劇・公開授業)	9
(3)	PTA講演会	12
(4)	職員向け講演会	15
(5)	PTA分科会	18
(6)	その他	23
	ア PTA主催『はるひまつり』	
	イ 性教育の授業(PTA寄贈本等を使用して)	
6	総括	24
7	おわりに	25
	資料	26

1 はじめに

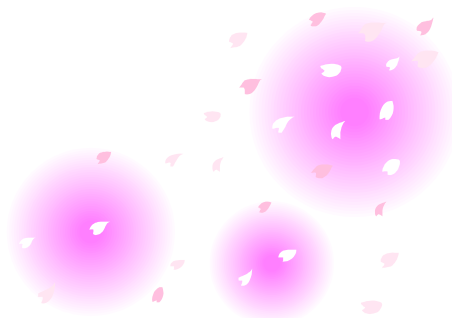
愛知県立春日台養護学校は知的障害教育の特別支援学校です。幼児児童生徒数は年々増加し、全国でも屈指の数となっています。本校PTAは、そんな学校規模の過大化による教育環境等の変化に対応しながら、様々な事業を行っています。

平成24年度にPTAで毎年行う「保護者向けの講演会」のテーマについてアンケートを取りました。すると思春期や青年期の子どもたちの心やからだについての講演を願う声が多く寄せられました。このアンケートでは、子どもが学校に在籍している間は、家庭での教育についても保護者同士や教師と相談できる環境があり、保護者も心強さを感じていますが、卒業後の家庭教育については大きな不安をもっていると感じられました。加えて思春期・青年期の心とからだをどう理解し、子ども自身の戸惑いについてどう答えていくのかについても、大きな悩みを抱えていることがわかりました。

「性」については、学校では「保健」の教科等では取り上げるものの、教師も今まで正面から向き合って研究したことはなく、学校としても性の問題に対する支援の弱さを感じているところでした。そこで講演会では、日本福祉大学の木全和巳先生に「思春期の性」についてお話ししていただきました。その後のディスカッション等の中で、保護者も教師も、特に自分と同姓でない子どもへの支援の仕方に対する不安は大きいと感じられました。

このような背景があり、本校PTAでは、平成25年度に全国特別支援学校知的障害教育校PTA連合会の調査研究助成事業に応募し、助成金の交付を受けて、「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性～心とからだの変化を学ぼう～」をテーマに調査研究事業を行いました。この事業は前出の木全先生にスーパーバイザーをお願いし、様々な面からのアプローチを行うこととしました。

以下に、その事業内容等について、御報告いたします。



2 愛知県立春日台養護学校の概要

愛知県立春日台養護学校は、愛知県春日井市にある愛知県心身障害者コロニーの中に昭和44年4月1日、コロニー条例によって設置された愛知県初の知的障害養護学校です。今年で45年目を迎えた伝統のある学校です。愛知県心身障害者コロニーには、中央病院を始め、発達障害研究所、あいち発達障害者支援センター、こばと学園（医療型障害児入所施設）、はるひ台学園（福祉型障害児入所施設）、養楽荘（障害者支援施設）、緑の家（短期母子療育施設）、春日台職業訓練校、その他の施設があります。そのうち、はるひ台学園に入所している児童生徒は本校に通学しています。また、こばと学園と中央病院では本校の教員が出掛けて施設内教育も行っています。各施設同士はいろいろな連携を図っていますが、特に中央病院はコロニーの要となっています。本校においても幼児児童生徒の急なけがや体調不良時にはすぐに受診をし、子どもたちの健康や安全を守るためにはとても重要な施設です。

本校は幼稚部、小学部、中学部、高等部があります。県内では唯一幼稚部のある知的障害養護学校です。幼児児童生徒数は、幼稚部1名、小学部131名、中学部103名、高等部204名、施設内教育4名で合計443名（平成26年1月1日現在）です。通学区域としては、春日井市、瀬戸市、尾張旭市、小牧市の一部（名鉄小牧線の東側）となり、約300名の児童生徒が6台のスクールバスを利用して登校しています。また、中学部と高等部のうち、約120名の生徒が電車やバスなどの公共交通機関を利用した自力通学を行っており、社会自立を目指した学習の機会にもなっています。高等部卒業後の進路については、毎年、約3割から4割の生徒が企業就労をし、それ以外の生徒は福祉的就労をしています。

緑豊かな環境の中、幼児児童生徒は四季折々の季節を感じながら、毎日、明るく元気に学校生活を送っています。



愛知県立春日台養護学校

3 P T Aの役割とその現状

本校のP T Aは、開校から8年を経た、昭和51年4月に「愛知県立春日台養護学校親の会」として発足しました。この年は、本校が『自閉症児の教育』を出版して、全国の幅広い人々と関係機関の注目を浴びたときでもありました。これを機に「親の会」は全国の皆さんを2日間にわたって心から接待されたそうです。今思えば、学校外部の大勢の方々が私どもの子どもたちの教育について関心をもたれ、全国から尋ねていただけたことは、大変光栄であり、喜ばれたことと思います。当時の親としての気持ちが心から理解できます。

平成22年度からは、長年親しんだ名称を時代の流れの中で『愛知県立春日台養護学校P T A』として新しい一歩を踏み出しました。P T Aの活動としては、執行部を中心に全体で企画するものと三つの部を中心に進めているものがあります。

(1) 執行部の取組

避難所体験 夏休みを利用して学校の体育館に宿泊する体験をしました。市の災害ボランティアN P O団体を招へいし、体験活動を取り入れました。

黄色いレシートキャンペーン 黄色いレシートの1%が還元される大規模小売店のキャンペーンを活用して、災害時の備蓄品を引き替えて子どもたちの安全安心な学校を目指しています。

はるひまつり 夏祭りを催しました。子どもたちへの楽しいイベントです。同窓会の模擬店や福祉事業所の協力もいただき大変盛況でした。

(2) 事業部の取組

奉仕(除草)作業 6月初旬の運動会に向けて運動場周辺の除草を実施
運動会バザー 提供を受けたバザー物品と飲料水を販売



運動会バザー



はるひまつり

文化祭バザー 提供を受けてバザーと喫茶コーナーを実施
子供たちの学校行事への支援 運動会や文化祭などメイン行事への参加賞と卒業式の記念品等を提供

(3) 研修部の取組

P T A研修会 救命・救急法研修会
情報交換会 卒業生の保護者の皆さんや進路指導の話
社会見学 福祉事業所等を見学
講演会 時の話題を中心に専門家の話

(4) 広報部の取組

年3回の広報紙発行 「親の会会報」から「ゆりの木」と改めて、現在114号を発刊いたしました。

4 調査研究事業 年間計画

テーマ「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性」
～心とからだの変化を学ぼう～

- (1) P T Aグループ別座談会 6月21日(金) 10時30分～12時00分
参加者：保護者、O B保護者、教職員
Aグループ・・・女子(小・中学部・高等部)の保護者
Bグループ・・・男子(小学部1～5年)の保護者
Cグループ・・・男子(小学部6年・中学部)の保護者
Dグループ・・・男子(高等部)の保護者

- (2) 演劇等鑑賞会 10月6日(日) 10時30分～12時00分
参加者：保護者、児童生徒、教職員、施設職員等関係者
演劇「ハッピー パースデイ」：障がい者の演劇を楽しむ会「劇団：ドキドキわくわく」
公開授業「タッチの授業」
：劇団事務局長 愛知性教協会員 性教協障がい児サークル世話人 渡辺武子氏
6月30日 岐阜市において演劇、公開授業等をP T A役員及び教員で鑑賞。

- (3) P T A講演会 10月23日(水) 10時40分～12時00分
参加者：保護者、教職員
講師：日本福祉大学 社会福祉学部 教授 学部長補佐 木全和巳氏
演題：「障がいのある子どもたち、青年たちの豊かな性と生を育むために」

- (4) 教職員向け講演会 10月30日(水) 15時45分～16時55分
参加者：本校教職員、地域の小・中学校教員等、保護者
講師：日本福祉大学 社会福祉学部 教授 学部長補佐 木全和巳氏
演題：「学校でしかできない愛と性の学び合いを」

- (5) P T A分科会 12月9日(月) 10時40分～12時00分
参加者：保護者、O B保護者
講師：日本福祉大学 社会福祉学部 教授 学部長補佐 木全和巳氏 (第1分科会)
愛知性教協会員 性教協障害児サークル世話人 渡辺武子氏 (第2分科会)
愛知性教協会員 新崎道子氏 (第3分科会)
愛知性教協会員 大塚あつ子氏 (第4分科会)
第1分科会(遊戯室)・・・女子の性と生について
第2分科会(遊戯室)・・・思春期以前から思春期の男子の性と生について
第3分科会(会議室)・・・思春期の男子の性と生について
第4分科会(応接室)・・・思春期から青年期の男子の性と生について
分科会終了後、会議室で4名の講師と希望者でランチ交流会を実施。

- (6) その他
 - ・「はるひまつり」での児童生徒、保護者によるフォークダンス(7月13日)
 - ・P T Aより性教育に関する本の寄贈、保健体育等で性教育の授業を実施
(1、2月)

5 事業の詳細

(1) P T Aグループ別座談会（思春期・青年期の性について）

ア 実施要項

P T A グループ別座談会（情報交換会）

1 日 時

平成25年6月21日（金） 10時30分から12時00分まで

2 日 程

全体会（P T A会長挨拶・日程説明等）	10：30～10：45
グループ別座談会	10：45～11：45
全体会（各グループからの報告、 P T A会長挨拶・連絡等）	11：45～12：00

2 場 所

体育館

- ・ 館内で4グループに分かれて行う。途中で他のグループに移動可能とする。

3 内 容

- ・ 思春期を迎えることに不安を感じていること
- ・ 思春期になる前にやっておきたいこと
- ・ 思春期になって困っていること
- ・ 異性への接し方など性教育について など



4 グループ分け

- Aグループ・・・女子（小・中学部、高等部所属）の保護者
- Bグループ・・・男子（小学部1～5年）の保護者
- Cグループ・・・男子（小学部6年・中学部）の保護者
- Dグループ・・・男子（高等部）の保護者

5 座談会役割分担

- ・ 全体会の進行（研修部長）、日程説明・連絡等（副会長）
- ・ 各グループ（4グループ）、司会1名、記録1名をPTA役員で行う。
- ・ アドバイザーとして、教頭、部主事、P T AのOBが参加する。

6 その他

- ・ 参加については、希望調査（話題にしたい内容等のアンケートも記入）を行う。
不参加の場合もアンケートの記入、提出をお願いする。
- ・ 各グループの進行等について、司会・記録で当日10時10分より打合せ、準備を行う。
- ・ 年齢や男女、障がい種、抱えている問題など、アンケートの結果を参考にしてグループ分けを行い、当日までに、どのグループで会場はどこかを参加者にプリントを配付する。

イ 各座談会での内容（情報交換した内容）

(ア) Aグループ・・・女子（小・中学部、高等部所属）の保護者

（保護者16名、アドバイザー教師1名・OB保護者2名）

生理について

- ・生理をどう教えてよいか分からない。なかなか周りにも聞けない。母と一緒にトイレに行ってみせたり、繰り返し教えたりした。
- ・ナプキンの当て方、処理の仕方、ずれてしまって服を汚したときの対応。羽根なしナプキンの取り扱いが簡単。生理中はもれたときに備えてスカートや下着は色の濃いものを選んでている。

下着について

- ・ブラジャーのホックが自分でできるかなど心配。スポーツブラなどかぶれるものや、胸元が二重のキャミソールを着させている。感覚過敏を少しでも軽減できるような素材にしている。

羞恥心・異性の意識

- ・男女問わず抱きついてしまう。異性を意識していないが、声を掛けられると付いて行ってしまわないか心配。抱きつくのではなく握手するようにしている。本人は意識していないので胸元の見えない服やセクシーに見えない服を選んで着させている。

思春期のイライラ

- ・あまりにも怒り方がひどいので、受診したところ、思春期によるもので、普通に通過していくと言われた。薬が処方されたが飲んでいない。

その他

子宮頸がんワクチンの接種について、性交や結婚についてどの段階で教えればよいかなど、話題となりました。

(イ) Bグループ・・・男子（小学部1～5年）の保護者

（保護者16名、アドバイザー教師1名）

性的な行動について

- ・体つきが大きくなり、それに伴ってよく下半身を触るようになってきた。
- ・下半身を触って大きくなることを喜んでいる。祖母や母の胸を触って笑っている。どのように教えればよいのか。
- ・畳に下半身をこすりつける。作業療法の先生には止めるように言われたが、なかなかやめない。時期が来ればなくなるものなのか。床に下半身をこすりつけるなど、暇なときにすることが分かった。ここならよいという場所を教えるようにした。時々、ベッドやソファで下半身を触って喜んでいる。ベッドであれば見て見ぬ振りをしている。自慰行為を強く叱る必要はなく、場所や時間を決め、繰り返し教えていくことが大切。性の衝動には個人差があるため、強い子にはトイレに連れていき、徐々に時間を制限するなどしている。

その他

小学生のため母親と一緒に風呂に入ったり、抱きついたりするのをやめさせる時期などについて話題となりました。

(ウ) Cグループ・・・男子（小学部6年・中学部）の保護者
（保護者11名、アドバイザー教師1名）

入浴について

- ・中学生と小学部低学年の兄妹と一緒に風呂に入っている。妹が兄の身体に触ることがある。大家族なのでなかなか別々に入ることができない。独りで風呂に入り始めた頃はよく洗えていなかったが、週末になって父と入るときによく洗うようにしている。将来、風呂は独りで入ることで癒しの場所になると考えている。

身体について

- ・陰毛が生えてくると抜いてしまう。
水着で隠れているところは大事なところなので触らないと教えている。

自慰行為について

- ・包茎の手術がきっかけで自慰行為をするようになった。デイサービスのときや送迎車の中でも触ることがある。
ゲームや散歩、プール、水のお風呂、お手伝いなど気を紛らわすとよい。お手伝いは、させるのではなく、助けてもらうような態度をとるとうまくいく。ゲーム機も勉強ができるソフトがある。

その他

思春期の情緒不安定について、インターネットについて、子どもが母親に抱っこを求めたり胸に手をやったりするといった母親との関わりについて話題となった。

(I) Dグループ・・・男子（高等部）の保護者
（保護者11名、アドバイザー教師1名・OB保護者2名）

自慰行為について

- ・下半身を触る。知的遅れが重度なので、時と場所を選べない。
何か教えるときは根気が必要。何百回、何千回と繰り返し教えるぐらいの気持ちが必要。大切なのは怒らないこと、いらいらしないこと。「恥ずかしいよ。」と何回も声掛けして、公の場でしないように注意する。
- ・自慰行為でシーツを汚してしまう。
父親に教えてもらう。トイレに流せるティシュペーパーを使う。

母子関係について

- ・母子家庭で、母親にべったり。母親のお尻や身体に触りたがる。
女の人というより胸に触りたいという気持ちがある。触ってよい人（母、祖母）といけない人を分けた。距離のある人（友達、親戚等）から本人に言ってもらえると、本人が受け入れやすい場合がある。女性の下着など隠さずに見えるところがあれば、過剰に反応しなくなると聞いたことがある。

その他

- ・思春期の情緒の不安定について、好きな人ができた際の接し方、結婚、自動車運転免許証、学校の性教育などについて話題となりました。

ウ 座談会のまとめ

(ア) 参加者アンケートのまとめ

- ・生理について話が聞けてよかった。対応の仕方とか、悩みが一緒なのだと思います。(A)
- ・年齢が上の方の経験が聞けて参考になりました。これから先にくる生理の手当てや下着選びを考えたいと思います。情報を得るタイミングや関心をもつことなど、どう対応していけばよいのか考えたいと思います。(A)
- ・まだ低学年で思春期に入る前ですが、性的な行動を、皆が持っているのだと、少し安心しました。(B)
- ・段階を踏んで対応していく必要があることが分かった。繰り返し学習という形で習慣を身に付ける方法が有効な場合が多いと思いました。(B)
- ・性の不安や行動など、本当に身近な話が聞けて良かったです。男の子に対しての接し方を、もう一度考えてみたいと思いました。(C)
- ・皆さんにたくさんの体験談や悩みを聞くことができました。日頃、これでよいのか？と手探りで対応していましたが、これからの参考になりました。今後は講演会等を予定しているそうなので、楽しみにしています。(C)
- ・今日参加してモヤモヤしていたことがなくなりました。これからも子どもとの接し方、観察、言葉遣いを大事にしていこうと思いました。(D)
- ・もう何年も障がい児の親をやっているのに、未だに怒ってしまうことが多々あり反省しきりです。「性」だけ切り離して扱うのは不自然という言葉が新鮮でした。家族それぞれの役割をもう一度考え直します。よい機会となりました。家に帰って主人とよく話してみようと思います。(D)



(イ) まとめと課題

今回のPTAグループ別座談会は、「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性」に関する調査研究事業の第1回目でした。まず、保護者の方々がどのようなことに不安や困り感をもっているのかを出し合い、確認して、次回からの計画に生かすことを第1の目標としました。

当初は、内容が性に関することだけに意見が出づらいのではと考え、事前にアンケートを取り、話題にする事柄の準備をしていました。しかし、それも杞憂に終わり、大変活発に意見が出て、時間が足りないぐらいでした。また、PTAのOBの方の参加を得られたことで、豊富な体験談が加わり、深まりのある情報交換会にすることができたように思います。



多くの参加者アンケートにあったように、今後の専門家をお呼びしての講演会等に期待を寄せる声は大きいです。今日出し合った意見の解決策が見いだせるように、それぞれの保護者のニーズに合った調査研究事業を計画し、進めていくようにしていきたいと考えています。

(2) 演劇等鑑賞会(演劇・公開授業)

ア 実施要項

P T A 演劇等鑑賞会(演劇・公開授業)

1 日 時

平成25年10月6日(日) 13時00分から15時00分まで

2 日 程

開会の言葉(P T A 会長挨拶・講師紹介等)	13:00~13:05
演劇鑑賞	13:05~14:55
公開授業	
お礼の言葉(副会長)	14:55~15:00
閉会の言葉(研修部長)	

3 場 所

体育館

(演劇は舞台上、公開授業はフロアを使用)



4 内 容

演劇発表

「ハッピー バースディ」 青年期の性と生
・私たちは何のために生まれてきたのか?

公開授業

「タッチの学習」 思春期・青年期の男女の適切な関わり方
・どんなタッチがあるのか?

5 出演団体

障がい者の演劇を楽しむ会 通称『劇団：ドキドキわくわく』

(劇団員：約30名、支援者等：約30名。)

6 参加者

- ・ 参加希望のあった本校の幼児児童生徒及びその保護者(家族)と教職員等。
- ・ 高等部の自力通学生については、生徒のみでの参加を可とする。その他の幼児児童生徒は、保護者同伴を条件とする。保護者のみの参加も可とする。

7 その他

- ・ 進行等について、役員と出演者で当日11時より応接室で打合せ、準備を行う。
- ・ 終了後、参加者に演劇と公開授業等の感想をアンケートする。
- ・ 会場準備は、10月4日(金)の15:45より、教職員で行う。
- ・ 劇団員等の昼食場所は会議室。保護者と幼児児童生徒は遊戯室。
- ・ 当日愛知県コロニーでは、コロニー祭が開催されている。

イ 演劇等鑑賞会(演劇・公開授業)での内容

(参加者 児童生徒54名、保護者106名、教職員66名、関係者6名)
(劇団関係者約60名)

(ア) 演劇「ハッピー パースディ」 青年期の性と生

あらすじ

主人公のじゅんは、劇団で学生の頃から仲間と活動している。劇の練習のないときには、いろいろなことの勉強をしている。今日は「なんのために生まれてきたのか」というテーマだった。その後、仲間たちは話し合うがなかなかわからない「私が生まれてきたわけは、父と母に出会うため」「私が生まれてきたわけは、いとしいあなたに出会うため」じゅんは、彼女であるマコと誕生日のプレゼントを一緒に買う約束をした。しかし、当日マコはインフルエンザのため行けなくなってしまった。そこでじゅんは、一人でプレゼントを買いに出かけた。宝石店の客を見て自分もダイヤモンドを買おうとするが、1000円では買えず家に帰った。



次の日姉とプレゼントを買いに行くが、その様子を見ていた劇団の仲間が姉を恋人と勘違いし劇団の練習の時にじゅんを責めた。しかし、じゅんは、姉とプレゼントを買いに行ったことを秘密にすると約束していたため、みんなから攻められても言えずにパニックになってしまった。そこへ先生が呼んだ姉が来てみんなの誤解は解けた。責めたことはいじめではなく誤解だということが分かりみんな仲直りすることができた。

一週間後、じゅんは元気になったマコに誕生日プレゼントを渡し、共に喜び合い幸せを感じ、「生まれてきた喜び」「生まれてきたわけ」を理解することができた。

(イ) 公開授業「タッチの学習」 思春期・青年期の男女の適切な関わり方



・優しいタッチ

・自分の汗を拭くために自分にタッチ
(さっぱりする)

・相手に同意を得たタッチ
相手に聞く いいよ

プライベートゾーン (大事な場所)

・人前で見せない、人前でタッチしない

・いっぱいお付き合いをする

・目と目で相手の気持ちが分かる

プライベートゾーンへのタッチ

子どもたちはゆっくりゆっくり学んでいく！



・たたく

・けがにつながるタッチ

・相手に同意を得ないタッチ



ウ 演劇等鑑賞会(演劇・公開授業)のまとめ

(ア) 参加者アンケートのまとめ

演劇鑑賞

- ・一人一人がとても一生懸命に演技されていて素晴らしかった。みんなのチームワークの良さが印象的で仲間同士の絆が感じられました。(中学部、保護者)
- ・ちょっとした誤解から仲間全体に広がってしまうことは、現実身近によくあることなので本当にドキドキしました。姉さんがきちんと説明してくれ誤解が解けて良かった。(高等部、保護者)
- ・一生懸命生きること、愛しい人とは何なのかを考えながら物語を進め、皆は地球に生まれ、生きた意味があることを考えさせてくれました。「ヘビロテ」なかなかでした。(高等部、生徒)

公開授業

- ・タッチの授業のように自分の子どもにタッチの良い、悪いを教えられるのが不安ですが、大切なことなので、子ども心に届くように伝えなくてはいけないと思いました。難しい課題を笑いを交えて分かりやすく教えていただけてためになりました。(小学部、保護者)
- ・けっこう包み隠さないリアルな内容に驚きましたが、とても大切な問題をきちんと分かりやすく説明することの重要性を感じ、とても納得のゆく授業でした。(中学部、保護者)
- ・自分の気持ちだけでなく、相手の気持ちをくみ取って同意をもらうのは大事なことだとよく分かりました。(高等部、保護者)

(イ) まとめと課題

今回のPTA演劇鑑賞会は、「演劇」と「公開授業」の二部構成で実施されました。先に行われた「演劇」では、一生懸命に演技をする劇団員一人一人の姿を目の当たりにし、鑑賞したほとんどの方が感動されていました。また、演劇の内容については、自分の子どもにも「人を好きになる」というごく普通のことを普通に経験してほしいという声や、「私が生まれてきたわけ」は、幸せになるために生まれてきたと思ってくれるように見守っていききたいといった声が多く聞かれました。

続いて行われた「公開授業」では、渡辺武子先生が教師役、劇団員が生徒役という設定で「タッチの学習」が行われました。タッチの種類やプライベートゾーンなどについて、渡辺先生の明るくて軽快なテンポでのお話、生徒役への質問や鑑賞していた大人へのインタビューなどを織り交ぜて授業が展開されていきました。終了後には、「同意」のところが分かりやすく、自分の子どもにも同じように伝えていきたい、お互いに尊重し合うことの大切さや「性と生」について改めて考えさせられた、という声も聞かれました。

日本の社会や文化において、「性」の話題はタブーのように避けてきた傾向にあり、なかなか親子では話しづらいテーマです。しかし、自然に身に付きそうで付かないことなので、いつか真正面から向き合わなければなりません。そのためには、まず保護者自身が正しい知識をしっかりと身に付けることが大切です。そして、子どもたちの明るい未来のために、保護者同士が連携をしながら取り組んでいきたいと思えます。

(3) P T A 講演会

ア 実施要項

P T A 講演会

- 1 日 時 平成25年10月23日(水) 10:40から12:00まで
授業参観日(学校開放日)
- 2 場 所 体育館
- 3 講 師 日本福祉大学 社会福祉学部 社会福祉学科
教授 学部長補佐 木全和巳氏
- 4 演 題 「障がいのある子どもたち、青年たちの性と生を育みあうために」
- 5 日 程
 - 10:25 講師到着、校長室にて休憩、懇談
(P T A 会長、研修部長・相談役、校長、教頭、担当部主事)
 - 10:38 講師、講師席に着席
司会・進行(研修部長)
 - 10:40 開会
講師紹介(研修部相談役)
 - 10:50 講演
 - 11:50 質疑応答
 - 11:57 お礼の言葉(会長)
 - 12:00 閉会
校長室にて懇談
(P T A 会長・副会長、
研修部長・相談役、校長、教頭、担当部主事)
- 6 準備物
マイク2本、マイクスタンド(長1本、短1本)水、コップ、お手拭き、長机、
講演資料、参加者アンケート用紙、鉛筆、アンケート回収箱
- 7 その他
 - ・講演会終了後の公団の際、講演料(交通費込み)をP T A 会長より手渡す。
 - ・高蔵寺駅までの講師の送り迎えを担当部主事が行う。
 - ・当日朝、追加資料があれば、担当部主事が印刷し配付する。
 - ・保護者向け案内には、10月30日(水)15:45~16:55の教職員向け講演会(木全先生)も含めて参加希望をとる。



イ P T A 講演会の内容 (参加者 約 120 名)

演題「障がいのある子どもたち、青年たちの性と生を育みあうために」
- 保護者のみなさんと共に考えあいたいこと -

男の子「自慰」の支援と父母、特に「父」の役割について

- ・双子の男子（自閉症）に対して両親が自慰の支援を行ってきた事例
決められた場所でしっかりと自慰をできるようになり、落ち着いた弟。教師や父親に否定的な言葉を掛けられたことで、裸の女性が載っている雑誌やテレビを受け入れられず、よくトラブルになる兄。
思春期を迎え、自分の身体の変化（2次性徴）への戸惑いが出てくる。ひげや性毛など今までなかったものが生えてくると気になる。でもそれは、生えてきても大丈夫なものだと教えてあげることが大事。
父親が息子に自慰の方法を教えることに抵抗感のある場合は多い。ビデオや本を見せて分かるならそれも一つの方法。父親になるのは、母親になるより難しく、子どもといろいろな経験をし、繰り返しながら父親になっていく。
思春期に自分崩し、自分づくりをやっていないと、二十歳を過ぎた頃に問題を起こしてしまう。その時々でやらなければいけないことはやらせた方がよい。

女の子の成長における「恥ずかしい」ことの意味について

- ・16歳の自閉症の女の子の事例
プライベートゾーンを隠さずに着替えているところを、女の子に指摘されたことをきっかけに、自分と友人との比較（友人と違う着替え方）をして自分が違うことに気付いた。そして、周りを見ることができるようになり、素敵なお姉さんになる気持ちが芽生えた。
「恥ずかしい」という気持ちは、話し言葉の中から獲得するもの。幼児期から小学校低学年程度の知的レベルが育たないと難しい。もう一人の自分が出てくる（内現）。これが育たないと「恥ずかしい」という気持ちは出てこない。
生理が始まったとき、母と同じだと思えることができたため抵抗がなかった。自分が大人になることはよいことだと思えたことがよかった。
絵本や模型など視覚的にわかりやすい教材の工夫や、友人と一緒に学ぶ環境作りが大切。周りの子と比較をするようになる、その気、やる気にさせるように仕組むとよい。
その他
自分の身体を守るためには、自分は祝福されて生まれた子なんだという自覚は必要。
性的な問題が起こるのは、学習が不足しているからではないだろうか。
子供の障がいがどんなに重くても親と子は別々の人格。
子供たちは「社会」で育てていくもの。
重い機能障がいがあっても、教育・支援の中で必ず誰もが成長・発達していき、素敵な「おとな」になっていく。

ウ P T A 講演会のまとめ

(ア) 参加者アンケートのまとめ

- ・母親には分からない男性の身体の仕組みを知ることにより、過去の行動に説明がついてよかった。これからするかもしれない行動も知ることができて、漠然とした不安が軽くなった。
- ・初めて参加しました。親として子どもの成長をうれしく思う反面、避けてきた話題でした。でもいつまでもそのままではいられないので参加を決めました。具体例で説明していただき、分かりやすく聞くことができました。男の子なので父親にも聞いてもらおうとよかったと思いました。
- ・小学部3年生なので、まだ早い内容かなと思いながら参加しました。とても分かりやすく、理解しようと前向きに考えることができました。
- ・父親の役目を教えていただきましたが、私には息子に教えることのできる父親がいません。これから男の性について全く分からない自分がどうしたらよいのか悩んでいます。父親というものは必要なのか、と考えさせられました。
- ・障がいがあっても思春期からくる・・・恥ずかしいことをやめさせると思っていたのですが、制限させることではストレスがたまってしまうことが分かりました。娘に対して「ダメ」ということが多かったと反省しています。娘の気持ちを大切にしつつ、分かりやすい言葉で説明しながら、そして自分の思春期を思い出しながら接していきたいと思いました。
- ・とても参考になりました。男性器の事情？など主人に聞いてもはぐらかされるばかりで・・・。ただ、「男の子なんだからパパ教えて」と言うことは控えようかなと思いました。主人にとっても秘密の儀式？だった訳で、息子といえども進んでやってくれることではないと分かりました。1問1答形式で、今の困り事の解決策を教えてくださいたいです。
- ・息子には、性教育（自慰）を教えない、やめさせる方向を考えていましたが、今日の講演会を聞いて、大人になって困ることも多いということ学びました。思春期をうまく乗り越えられるように接していきたいと思います。



(イ) まとめと課題

今回のP T A講演会では、昨年度末のP T A講演会が大変好評で、もっとお話を聞きたいという御意見を多数いただいたため、再度、木全和巳先生を講師にお招きして実施しました。前回の講演会では詳しくは聞けなかった、父親の役割、女の子の性に関する話の2点を中心にした講演をお願いしたため、前回出席された保護者も大変満足された様子がアンケートからも読み取れました。また、今回初めて参加された保護者も多く、障がいのある子どもたちの性について考える取組への関心の高まりと広がりを感じることができました。このことは、次回の教職員向けの性教育の講演会に、児童生徒が帰宅する夕方開催にもかかわらず、20名を超える保護者の参加希望が出ていることから伺えます。

次回の分科会では、多くの保護者が望んでいる、困っている事柄に直接助言をいただけるような会となるように計画をしていきたいと考えています。

(4) 教職員向け講演会
ア 実施要項

教職員向け講演会

- 1 日 時
平成25年10月30日(水) 15時45分から16時55分まで
- 2 日 程

開会・講師紹介	15:45～15:50
講演	15:50～16:40
質疑応答	16:40～16:50
閉会	16:50～16:55
- 3 講 師
日本福祉大学 社会福祉学部
教授 学部長補佐 木全和巳氏
- 4 演 題
「学校でしかできない愛と性の学び合いを - 教職員のみなさんとともに - 」
- 5 場 所
体育館
- 6 参加者
本校教職員
地域の小中学校教員
保護者(OBの保護者含む)
- 7 内 容
 - ・ 学校でしかできないこと 愛と性の学びについて
 - ・ 授業実践の報告について
 - ・ 性教育段階別指導内容一覧表の紹介について など
- 8 その他
 - ・ 事前に、全教職員にアンケートを実施し、性教育に関する指導について、どのようなことで悩んでいるかなどの意見を収集する。
 - ・ 事前に、担当者が講師と電話やメールで連絡を取り合い、講演内容や本校の研修のニーズについて確認を行う。
 - ・ 当日は、講師と顔を合わせて打合せを行い、講演内容や会場、配付資料の確認を行う。
 - ・ P T A 講演会(10月23日)の案内の参加希望用紙に教職員向け講演会の参加希望を併記したものを保護者に配付し、保護者の参加希望者数を把握する。
 - ・ 地域の小・中学校の特別支援学級の教職員へは、地域支援部を通して参加希望をとる。



イ 講演の内容について

(参加者 本校教職員約140名、地域の小中学校教職員約20名、保護者等約20名)

はじめに

性と生の教育的課題について、困難だから逃げないで、子どもたちのねがいを受け止めて、子どもたちとともに「こころとからだの学習」ができる教師になってほしい。

授業実践の報告

特別支援学校高等部の椿さと子先生が、高等部三年間を見通して実践した性教育の授業報告がされた。特に、椿先生は、高等部教育では、早期から性教育に取り組み、性に関して正しい知識をもち、悩んだり困ったりしたときに相談できる人間関係を作っておく必要があると考えている。



1年目は、子どもたちより、教師の変容を見ることができた。“性について子どもたちがどこまで分かっているかが分かっている”“授業できちんと教えている”という確信が、いたずらに心配や禁止に終始する性教育にならなかった。そして、それが、子どもたちが大人に心を開くことができるよい結果に大きく影響した。

2年目は、異性との関わり方に関する指導として、社交ダンスに取り組んだ。社交ダンスは、異性との距離感を直接関わりながら学ぶことができる。また、相手を思いやりながら楽しく学習することもできる。パートナーを選んだり、男女それぞれに素敵な衣装を選んだり、相手に合わせて踊る練習をしたりした。練習を重ねるうちに、徐々に子どもたちの情緒が安定したことが大きな変化だった。それは、「安心できるスキンシップが保証されている」ことが大きな要因だったと思われる。

3年目に入り、子どもたちは、人との関わりを豊かに表現できるようになった。また、性に関する話題や疑問にもオープンに語る事ができる雰囲気できた。しかし、その話題からは現代の氾濫する性情報に翻弄されているという課題も浮き彫りになった。今後は、これから子どもたちが直面するであろう性に関する問題により深く切り込んだ内容で授業を行い、その中で子どもたちが、性交、避妊、自慰、体の清潔、身だしなみやおしゃれ等について学び、自分自身と向き合うことができるように指導したい。

おわりに

子どもたちが、幸せに自信をもって安心して生きていくことができるために、学校でもう少し、性と生について、親密な人間関係のもち方について、信頼できる人間関係の作り方について学んでほしいと思う。

また、安曇養護学校で作成した性教育段階別指導内容一覧表の紹介があった。幼稚部から高等部まで各部が連携して性教育に取り組むことが大切であり、きちんと系統立てた教育を行うことが、学校としての責任であり、子どもたちの力を伸ばすことができる着実な支援方法である。

参考資料：青春真っ盛り！「Shall We Dance？」で開く17歳のこころ 椿さとこ

ウ 教職員向け講演会のまとめ

(ア) 講演会開催にあたって

今年度、研究助成事業において、性教育についての研修を保護者中心に行いました。しかし、子どもたちに性について教えることは家庭のみのことではなく、学校においても適切に指導すべき大切な内容です。そこで、改めて私たち教職員も性教育について研修を積み、より研鑽する必要があると考え、PTA研修会でも好評であった木全先生を講師に招き、教職員向けの講演会を開催することにしました。

実際に性教育について悩んでいる教職員も多く、事前に実施したアンケートでは、講師に対して様々な質問事項があげられました。以下にその内容を抜粋して記載します。

- ・小学部段階で指導すべき性教育の内容を知りたい。
 - ・いつごろまで、異性とのスキンシップ（ハグや抱っこ）をしてよいか。
 - ・いつごろまで、異性が介助（着替え・排泄・入浴）してよいか。
 - ・好きな女子に抱きつく男子にどのように指導したらよいか。
 - ・高学年の男女の好ましい関わり方について知りたい。
 - ・知的に高い子に対して、どのように避妊の方法を教えたらよいか。
 - ・妊娠をしてしまったときに、どのように対応したらよいか。
 - ・障がいのある子どもへの性教育に対しての社会的なニーズはどのようなものか。
 - ・場所をわきまえずに自慰行為をしてしまう生徒に対して、性欲の好ましい発散方法を発達段階別にどのように伝えたらよいか。
 - ・具体的な教材や支援方法があったら教えてほしい。
- これらの質問事項を講師に伝え、講演をしていただきました。

(イ) まとめと今後の課題

アンケート結果にあるように、性教育について悩み、よりよい指導を模索している教職員は多くいます。問題が起こったときに叱ったり、前もって禁止したりするだけの性教育ではなく、異性を含め周りの人との好ましい関わり方を学びながら自己肯定感を育てていくことを土台とした性教育が、実は、「自分や他の人を大切に思う心を育む力」を伸ばすことができ、さらに、「性について正しく理解する」ための礎になるということを今回の講演会で学ぶことができました。

今後も、講演会などを通して専門家の意見を聞いたり、教員間で性教育について話し合う場を設けたりしながら、子どもたちにとってよりよい性教育を行うことができるように学校全体で取り組んでいきたいと考えています。



(5) P T A分科会 (思春期・青年期の性について)
ア 実施要項

P T A分科会

1 日 時

平成25年12月9日(月) 10時40分から12時00分まで

2 日 程(分科会ごとに実施する.)

挨拶・講師紹介等 10:40～10:45

分科会 10:45～11:55

お礼の挨拶・連絡等 11:55～12:00



3 場 所

応接室、会議室、遊戯室

4 講 師(4名)

日本福祉大学 社会福祉学部 教授・学部長補佐 木全和巳氏

愛知性教協会員 性教協障害児サークル世話人 渡辺武子氏

愛知性教協会員 新崎道子氏

愛知性教協会員 大塚あつ子氏

5 内 容

第1分科会(遊戯室)・・・女子の性と生について(渡辺武子氏)

第2分科会(遊戯室)・・・思春期以前から思春期の男子の性と生について
(大塚あつ子氏)

第3分科会(会議室)・・・思春期の男子の性と生について(新崎道子氏)

第4分科会(応接室)・・・思春期から青年期の男子の性と生について
(木全和巳氏)

6 分科会役割分担

第1分科会 進行(研修部) お礼の言葉(会長) 記録(研修部)

第2分科会 進行(相談役) お礼の言葉(副会長) 記録(研修部)

第3分科会 進行(研修部長) お礼の言葉(副会長) 記録(研修部)

第4分科会 進行(研修部相談役) お礼の言葉(副会長) 記録(研修部)

7 その他

- ・ 分科会終了後、「ランチ交流会」を実施する。希望する保護者は、弁当を持参し、会議室で4名の講師の方と一緒に昼食をとりながら相談等を行う。
- ・ 参加される保護者に、分科会の講師や会場を知らせる案内を配付する。その際、「ランチ交流会」についての希望調査も行う。
- ・ 会場準備は、前日に教職員で行う。
- ・ 11月18日(月)9:30～11:00に本校において、講師、P T A執行部、進行で打合せを行い、各分科会の担当講師等を決めた。
- ・ 各分科会の最終打合せを、進行、講師で当日10時15分より行う。

イ 各分科会での内容（協議した内容）

(ア) 第1分科会「女子の性と生について」

講師 愛知性教協会員 性教協障害児サークル世話人 渡辺武子氏

参加者 小・中・高女子の保護者25名、大学生2名、OB保護者2名

男女の関わり方について

- ・人が好きで男女関係なく抱きつき、トラブルになることもある。
本を読んだり話を聞いたりするよりも、実際に接した生きた学びが大切。
仲間が「それはだめだよ」と言うなど、集団の中での学びが効果的。劇団
でのお芝居、ロールプレイは大切。

身体の成長について

- ・高等部1年生で身体は大きく胸もあるが、陰毛が生えておらず、生理が来
ない。そのままにしておいてよいか。
20代半ばで生理が来ていない人もいる。甲状腺やホルモンのバランスが原
因ということもある。婦人科を受診する場合は、障がい者に理解のある医
者を探しておく。保護者から障がい者に理解のある病院についての情報
提供があった。

女性の自慰行為について

いろいろな解消もある。女の子は特に「はしたない」という親の偏見があ
る。罪悪感をもたせない。自分の身体を慈しむということが大切。

その他

自傷行為、他害行為への対応、身体の仕組みやプライベートゾーンの教え
方、妊娠、夫婦や親子のスキンシップなど。

(イ) 第2分科会「思春期以前から思春期の男子の性と生について」

講師 愛知性教協会員 大塚あつ子氏

参加者 小学部男子の保護者が中心22名、施設職員1名

思春期を見通した性の学びについて

必ずどの子にも思春期はある。身体が先に変わり、心が後から変わってい
くため、一つずつ丁寧に教えていくことが大切。思春期までに自分の身体
は素敵だと思えることが大切。身体を大切にしていけることを親が見せてい
く。思春期は自己肯定感が落ちていく時期で、親から離れていく時期。自
分に自信がないと飛んでいけない。

兄妹の関係

- ・兄妹と一緒に風呂に入るのをいつやめさせればいいのか。
異性の兄妹の場合、身体が変化してきたら一緒に風呂に入るのはやめ、可
能なら部屋も分ける。自立の第一歩になる。

父親との関わり方

- ・母親ではなく、父親でなければならない役割はあるのか。
男の子の自慰の問題は母親では教えられない。父親でもつらい時はあるの
で、つながりのない友人の父などの存在も必要。思春期以降は、母親より
も、父親との関わりをもたせてほしい。

その他

親と子どもの距離感、子どもは今後どのように変化していくのかなど。

(ウ) 第3分科会「思春期の男子の性と生について」

講師 愛知性教協会員 新崎道子氏

参加者 小学部6年生及び中学部男子の保護者22名

入浴について

- ・姉と弟、母親と息子、いつまで一緒に風呂に入ってよいのか。
姉と弟など一緒に風呂に入るのは小学校入学までが基本。4年生は思春期の入り口。介助が必要な場合は、母親は短パンで行う。

自慰行為について

- ・下半身を触る行為がなかなかやめられない。
自分で心地よいことは大事なことで肯定しながらもルール（独りのとき、誰にも見られない場所、清潔に）を守れるようにする。悪いことではないので「ダメ」ではなく、どうしたらよいのか対応を教える。理解度によっては難しいが根気よく教える。性器に触れているときは、「遊ぼうか」「本を読もうか」など言葉をかける。それでもやめないときは、「みんなの前で触るのはやめようね」と言って触ってもよい場所まで誘導する。

思春期を迎えるまでの基本的な学びについて

パンツで隠れるところ（プライベートゾーン）は大事な部分。自分だけの大切な部分だから、人のを勝手に見たり触ったりできない。パンツを脱ぐのは、風呂、トイレ、着替え、医療時の四つだけ。（性被害を受けない）

その他

身体に触れるコミュニケーション、インターネットのポルノサイトなど

(I) 第4分科会「思春期から青年期の男子の性と生について」

講師 日本福祉大学 社会福祉学部 教授・学部長補佐 木全和巳氏

参加者 高等部男子の保護者24名、OB保護者1名

自慰行為について

- ・昼間から下着を付けたまま布団にこすりつけ自慰を行い、その後トイレで射精している様子。かかりつけの医師は、自分でできてよいと言われる。自分でやっていることはすごいこと。清潔か、炎症はないかなど子どもが嫌がらない程度に確認できるとよい。射精後、ティッシュで拭いてきれいにするように教えてあげる必要がある。障がいの程度は軽度・中度の子どもは特に男同士の勉強会で学べるとよい。重度の子どもは絵本や教材を使って分かりやすく、根気よく説明する。

男女関係について

- ・ストーカーにならないか、分からなくて幼児にいたずらしないか心配。
幼児の方が精神年齢が合い、気持ちが落ち着いて一緒に遊びたいと思う。幼児のことを理解し上手に遊べ、保護者の了承を得られれば遊んでもよい。人を好きになるのはよいこと。しかし、だめなときとよいときがある。本人の気持ちを受け止め、好きな気持ちが怒りに変わらないようにする。折り合いのつけ方を学ぶことが大切。

その他

- ・思春期の身体の変化・心の変化、兄妹関係など。

ウ ランチ交流会

(ア) 実施要項

- 1 日 程
平成25年12月9日(月) 12:10(分科会終了後)から14:00
- 2 場 所
会議室
- 3 参加者(27名)
講師(木全和巳氏、渡辺武子氏、大塚あつ子氏、新崎道子氏)
参加希望のあった保護者(17名)、OB保護者(3名)
教師(1名)、大学生(2名)
- 4 ねらい
・講師の先生方と昼食を一緒に取り、交流を深めながら、性に関する相談をしたり、話を聞いたりする。

(イ) 内 容

- ・父親と高校生の娘が今でも一緒にお風呂に入っている。独りでも入れるのに、お父さんが大好きで入っている。
高校生の娘と一緒に入っているのはおかしい。やめさせるべき。最もプライベートでリラックスできる時間なので、風呂は独りで入れるように導いていくことが必要。
- ・性教育を家庭で行うことはなかなか難しいのだが。
学校で集団で学ばせることが最も有効である。友達が行っているのを見るなど、集団学習は大切。それを踏まえての個別指導である。
- ・デイサービスのバスの中で性器を出して触ってしまった。トイレはよい。車の中はだめと教えた。ちょっとだけ理解できているよう。父親に「自慰の仕方をしっかり教えた方がよいのでは」と相談した。父親は「そればかりになってしまうのでは」と不安で教えようとはしない。
父親の知的障がい児に対する理解が乏しいように思う。最後までしっかりとできれば、射精は何度もできるものでなく疲れてしまう。きちんと教えてあげないと息子が困ってしまう。子どもの自立には父親が必要で、男同士で話し合えるとよい。女性がいると恥ずかしくて聞けない。
- ・その他
男の子が女性の身体に興味をもったときにどうするか。身体は大きくなっているが自慰行為はないがそのままよいのか。他害・自傷行為をなくし落ち着くためには、などの保護者の悩みに講師の先生方からアドバイスをいただいた。



エ 分科会のまとめ

(ア) 参加者アンケートのまとめ

- ・親もきちんと科学的知識をもっと学ばなければと思いました。(第1)
- ・今回は妊娠、それも望まない妊娠の話まで聞いて考えさせられました。同じ女性として母親が理解していないと娘に教えてあげられない。これはとても納得しました。目をそらさずに向き合っていきたいと思います。(第1)
- ・命のテープとして考えると思春期がいかにか短く大切な時期であるのか。それまでに親子が関わるための大切な時間をどう使ったらよいか、改めて考えることができました。障害のある子どもや成人の性については、情報が入りにくいため、今後も聞くことができればよいと思いました。(第2)
- ・思春期の問題や時期は、皆それぞれ違って必ず来るため、親が観察していくことの大切さ、思春期を見通し、今からやらなければいけないことが、たくさんあることが分かりました。(第2)
- ・身体がどんどん成長してきて、性についての自立が必要であると感じました。自立って親の方なのですね。それが大切なのだと思いました。(第3)
- ・子どもが異性ということで、性の問題はどうしても構えてしまいましたが、今日のお話を聞いて、当たり前前の成長の過程だということが分かって少し安心しました。(第3)
- ・性について、人に話しづらいとか、恥ずかしいものという固定観念がありました。笑顔でジョークを交え、模型を使ってのお話の中で自然のままの男性の性について考え直しました。(第4)
- ・気持ちを受け止めてあげるのが大前提だということが改めて分かりました。(第4)



(イ) まとめと課題

今回の分科会は、「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性について」の研修事業の最後となる会です。初めて参加される方はもちろんのこと、これまで座談会や講演会等に参加されてきた方であっても、いまだ性に関する不安や悩みを抱えている方は多くいます。それぞれの保護者のそれぞれの悩みに具体的な助言をいただきながら、皆で協議できるような会にすることを目標にこの分科会を計画しました。そのため、できる限り小グループで話が聞けるようにと、専門の先生を4名もお招きして、保護者の希望を中心にした小グループに分かれて実施しました。この目標は、講師の先生方の御厚意で「ランチ交流会」を開催できたことで、更に達成度が上がったように思います。昼食を取りながらということもあってリラックスした雰囲気となり、分科会で発言できなかった方も積極的に悩みを話されるなど、大変実りある交流会となりました。



1年を通して実施してきたこの取組には多くの保護者が参加されましたが、全ての保護者の性教育への意識が高まったわけではありません。また、保護者アンケートにもあるように、障がいのある子どもや成人の性については、情報が入りにくいという一面があります。今後も、PTAの活動として、講師の先生方とのつながりを大切にしながら、性についての研修会を長く続けていくことが大切だと考えます。

(6) その他

ア P T A主催「はるひまつり」

毎年、夏に行われるこの主催行事もすっかり定着してきました。今年度は7月13日(土)に実施しました。酷暑のため会場をロータリーから遊戯室と食堂に変更しました。参加者600名というイベントを盛り上げてくれたのは「親子なかよし太鼓」「校長先生の歌とギターのハーモニー」「盲目の歌姫上田若菜ちゃん」「春日丘高校インターアクトクラブ」また、「福祉事業所の物資販売」「同窓会の焼きそば」など模擬店が夏を満喫させてくれました。

この行事を通して本研究の目的であるイベントを盛り込みました。子どもたちが実際に異性に対して触れること、手をつなぐことがどのように性に関する関係性をもたらすのか、どのように感じるのかを知りたいと思いました。お願いしたのは、春日丘高校インターアクトクラブです。私たち保護者も経験があるフォークダンスをインターアクトの皆さんに教えてもらうことにしました。「オクラホマミキサ」に合わせてぎこちない子どもたちもなぜか恥じらいの中にほほえましいひとときを過ごすことができました。

参加した男子生徒は、「最初は、とても恥ずかしかったけど、お姉さんたちと一緒に踊ったらだんだんと楽しくなりました」また、「フォークダンス楽しかった！また、踊りたいです」などと、感想を述べていました。



パートナーとオクラホマミキサ

イ 性教育の授業（P T A 寄贈本等を使用して）

本校中学部、高等部では、生活単元学習や保健体育の授業等を使って性に関する学習を行っています。

中学部では、自分のからだに関することを中心に、高等部では、自分のからだと性行動を中心に、男女に分かれて学んでいます。授業の参考資料として有効な書物を、分科会の講師の先生方にも紹介していただき、P T A から寄贈していただきました。授業としては未熟な面が多いですが、自分や他人のからだや命を大切に、性に関する正しい知識をもてるようになることを目指して、研究と実践を積んでいきたいと考えています。



高等部 1 年男子保健体育の授業



中学部 2 年女子生活単元学習の授業

6 総括

思春期は、大人になる前に誰もが通る重要な成長段階です。しかし、障がいの有無に関係なく子どもたちにとって自分の意思に関わらず、身体や精神が大きな変化を遂げる混乱と不安の時期でもあります。このことは私たち障がいのある子を持つ親にとって、大変見通しの立ちにくいわが子の成長過程です。

思い返せば私たち親は、成長過程の中で、「プライバシー」と「羞恥心」という概念を自然と身に付けたと思います。成長過程で、異性への恋愛感情や性的な立場の違いを感じ、自分を中心としたコミュニケーションから、他人の立場や感情に気を配るコミュニケーションへと、成長してきたと思います。しかし、わが子を見ていると、「プライバシー」や「羞恥心」といった概念の獲得が、周囲の子どもに比べて遅れています。周囲が性的な物・事柄に対して「大人の振る舞い」を行っている中、一人だけ性的な物・事柄に対して「子どもの振る舞い」を行ってしまうことで、周囲から浮いてしまう。そのため、周囲との性的な面でのコミュニケーション・トラブルを引き起こすことによって、自分の「性に関する尊厳」を深く傷つけてしまい「性に関する自立」を達成できないことがあります。

今回の研究を通して、私たちPTAが学んだことは子どもの「性に関する尊厳と自立」を守るために、私たち親や学校の先生方の指導・教育は、きわめて重要な意味をもつと感じました。その正しい指針として以下を総括いたします。

- (1) 子どもの自尊心をきちんと保護・育成し、自分や他の人の「身体と心の大切さ」を理解させる。また、「自分を大切にすること」を身に付けさせる。
- (2) 子どもの恋愛感情や性的な欲求の存在をきちんと肯定し、正しいマナー、ルールを教え、恋愛感情や性的な欲求をもつこと自体を、叱ったり禁止したりしない。
- (3) 正しい知識・情報を与えることで、世間に氾濫する情報や性的被害（虐待や暴行）から子どもを守る。
- (4) 生活年齢に応じて周りの大人である私たちが正しい指針をもち、生活年齢に応じた年相応の距離をもって、尊重した一個人として認めていきながら支えていく。



公開授業「タッチの学習」



座談会

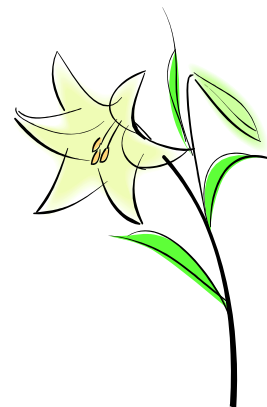
7 おわりに

本事業は、テーマに対し多面的なアプローチをしており、多くの事業から成り立っています。スーパーバイザーをはじめ、地域の性教育協会の会員の方にも御尽力をいただき、事業全体を通して幼児児童生徒、保護者、本校教職員、障がい者の演劇を楽しむ会「劇団：ドキドキわくわく」の劇団員と支援者、交流校の高校生ボランティア、地域の施設職員、保護者OB、地域の小・中学校教職員、性教育協会の関係者等、多くの方が参加しました。

2013年(平成25年)12月4日、国会では2006年(平成18年)に国連で採択され、2007年(平成19年)に我が国が署名した「障害者の権利に関する条約」の締結のための承認がされました。2014年(平成26年)1月20日には批准書が国連に出され、これで2014年(平成26年)2月19日には我が国でも、この条約が効力をもつことになります。

権利条約に関する流れがこのように進む中、私どもPTAは今回の調査研究を行ってきました。障害者の権利に関する条約では、当事者の自尊心、自己決定権の重視や、不可侵性の保護、差別の禁止、障がいによる隔離や孤立の防止、社会参加の権利等について述べられています。「障がい者の権利や人権・基本的自由・尊厳」が大切にされ、子どもたちの人権や基本的自由の享有を確保し、固有の尊厳の尊重を促進することが求められています。このタイミングでこの条約が批准されたことは、私たちPTAにとって子どもを守り育てていくうえでの大きな力となりました。

子どもたちの自立を図る道筋で、周囲が思春期や青年期の心とからだの変化にしっかりと向き合うことは避けては通れません。保護者も教師も子どもたちのこの大きな変化を冷静に受け止めていくことが必要です。その中でこそ、子どもたち自身が自分を肯定し大切にできる気持が醸成されると考えます。私たちが「障がいのある子どもたちの思春期・青年期の性」の調査研究の中で行ってきたことは「子どもたちの性の尊厳と自立を守ること」につながっていました。そしてこうした取組の一つ一つが、権利条約の実現化の道に続いており、これから子どもたちが暮らすしあわせな社会へつながっていると信じています。



資料

P T A 寄贈図書一覧

- 「しょうがいのある思春期・青年期の子どもたちと性」 【かもがわ出版】
「おとなになりゆく自分を育む」
木全和巳 著
- 「性問題行動のある知的障害者のための16ステップ」 【明石書店】
「フットプリント」心理教育ワークブック
クリシャン・ハンセン 著
ティモシー・カーン 著
本多 隆司、伊庭 千恵 監訳
- イラスト版「発達に遅れのある子どもと学ぶ性のはなし」 【合同出版】
「子どもとマスターする性のしくみ・いのちの大切さ」
伊藤修毅 編著
- 「女の子のからだの絵本」 【アーニ出版】
こんにちは！からだところシリーズ1
北沢杏子 文
今井弓子・長谷川端吉 絵
- 「男の子のからだの絵本」 【アーニ出版】
こんにちは！からだところシリーズ2
北沢杏子 文
今井弓子・長谷川端吉 絵
- 4月増刊 季刊 「セクシュアリティ」 NO.60 (増刊号) 【エイデル研究所】
人間と性をめぐる教育と文化の総合情報誌

